
森の魔女

ファラミーア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の魔女

【Nコード】

N9136L

【作者名】

フララミニア

【あらすじ】

この世界とは違う、どこか別のとある世界。その世界では永遠と受け継がれていく力ある地があった。その地を新たに受け継いだ代行者と、その周りの人々と街と森のお話。

プロローグ（前書き）

ほのぼのですが、残酷描写、R15描写があります。矛盾してんじやん！と思われるかもしれませんが、そんなもんです。お気を付け遊ばせ！

プロローグ

森があつた。

人がその地に流れ着くずっと前から、森はあつた。

森にはあらゆるものがあつた。

あらゆるものがせめぎ合い絡み合い、奪い与え合う。

森に全てがある。

知恵、力、神秘。

森には代行者がいた。

この森だけではない。森のように特別な地には必ず代行者がいた。

巫女、神官、魔法使い、長。

言い方は様々だったが、この土地の者はこの地の代行者をこう呼んだ。

魔女と。

「……（弱つたな）」

森の奥、しかし魔女の領域の一手手前のやや開けた場所。子供たちの格好の遊び場でもある。親たちは色々な意味で——例えば町から離れすぎているとか大型動物もいないことはないとか、魔女の家から近い、とか——危ないからこの場所で子供たちが遊ぶのを嫌がった。しかし元々猟師小屋があり、子供好きの誰かが簡単な遊具を造ってからは、子供たちの人気の遊び場になっていた。

そこに男が一人、途方に暮れて立ち尽くしている。

男はこれから魔女の所に向かう途中だった。

男自身はそんな事を一度も感じた事はなかったが、町の人間の中で魔女と一番親しいのは己らしい。少なくとも町の他の人間の評価はそうなのだが、男は実感した事がなかった。

何故なら男にとって魔女というのは仲が良いとか悪いとか、そんな次元の話が通じる相手ではない。例えるならばお前は太陽と仲が良いね、と言われ、そうだと肯定する。魔女との仲を肯定する事はその例えと同じ事だった。

「……」

見なかった事にして、先に進もうかとも考えつつも、もう一度、一度は視界から外したモノを隅に入れてみる。

木の下で、子供が一人うずくまっていた。髪も真つ白でぼさぼさに伸び放題の、薄汚い白いぼろの服を着た子供だ。きつい臭いが男の鼻を刺激した。身体を丸め膝を抱え、ぎゅっと手は折り曲げた足に回している。顔も埋め、男が近くに来て身動き一つしない。歳の頃は四、五歳程だろうか。

当然男が連れてきた子供ではないし、辺りに親らしき人間が行き倒れている様子もなかった。

森ではたまにあることだ。

森は恵みを与えるが、同時に奪いもする。

男も何人か知り合いを森で亡くした。だが男は森を恨む気にはなれなかった。それは筋違いだと、男は考えている。

行き倒れの子供でないとしても、町の子供でないことは確かだ。町の子供が今、外に出られるはずがない。だから男がここに、魔女の家を訪れようとしているのだから。

「……ここで何をしている」

子供を見下ろしたまま、男は尋ねた。

お前誰だとかどこから来たとか、そんな当然の疑問を男は口にしなかった。

無論興味はあったが、それよりも男の頭の中にはある噂がよぎっていた。

災いは森より来たる。

誰が言い出したかは分からない。ただ子供たちが原因不明の病に倒れるようになり始めてから、この噂は急速に広がった。

それを魔女だと直接口にする者はいなかった。

魔女に恩義がある者そうでない者、関わりがない者ある者、それら全ての町の人間が魔女を恐れていた。

だから口にはしなかった。しかし誰でもそう、少しは疑っているのは町の空気で良く分かった。

馬鹿馬鹿しい。

男はある種強い怒りをもってこの噂を断じた。

そして、更にはそれでも魔女を結局の所頼ろうとする町の長たちにも、男は怒りに似た苛立ちをもった。

「……」

子供は答えなかった。答える代わりに顔を上げた。

ぼさぼさの白い髪の下からは冷え切った氷のような蒼い瞳と、異様な煌めきを持つ紫の瞳が不自然な程大きく、のぞいた。

「、」

美しい、と、男は一瞬子供から臭う異臭を忘れる程に目を奪われた。

二つの瞳はまさしく宝石だ。人の眼球というものはこんなに美しいものだったのかと、男はひどく驚いた。

しかし同時に薄気味わるい寒気も覚え、なんとも言い難い感情に囚われる。何故なら子供は無表情だったから。小さな唇は真一文字に結ばれていた。

子供の髪も肌も服も全てが薄汚い白であるのに対し、その二つの色違いの瞳は場違いな程強烈な色彩を持っていた。

異臭が鼻をつく。

死臭だ。

男は唐突に気づく。

嗅ぎ慣れた臭いが混じっている。

血の臭い腐った肉の臭い魚の生臭い臭い臭い匂いにおい。

「……」

男は子供を見続けた。子供も男の視線をしっかりと受け止め、見つめ返してくる。外した方が負けだと、男は少し意地になった。

「……」

「……」

沈黙のまま、男と子供は見つめあっていた。

なにか話しかけるべきか。男は更に言葉を重ねようとしたが、やめた。子供は先程の質問に答えていない。じっと待つことにする。しっかりと目を合せてくる子供の様子を見るに、言葉が通じていない様子もない。

瞳はとても落ち着いていた輝きを宿している。混乱しているようではなく、またぼんやりと生気がないわけでもなく。

とても。

とてもしっかりとした意志の感じられる瞳。

男は逆にそれが気味悪かった。

恐ろしいとも感じた。

何か事件が事故に巻き込まれて茫然自失としているという状況ならまだしも、子供は明確な意志をもってこの場にいるようだ。

「、」

子供が、ようやく口を開いた。

赤い唇の下から白い小さな歯がのぞく。そして更に下には真っ赤な下、白い歯、赤い唇。

「いきてる？」

最後の音が少し上がった。疑問形らしい。小首を傾げる可愛いしぐさをしながら、子供はゆっくりと立ち上がった。

無表情から一変、新しい玩具を手に入れたような、生き生きとした表情になる。

「……まあな」

否定することでもないの、男はうなずいておいた。

「そつ、じゃころさなきゃ」

まるで、そうまるで手を挙げて挨拶を返すような気取らなさで、子供はひどく物騒な言葉を吐くと共に、右手を振ろうとした。

振ろうとした。

男にそれが分かったのは、子供の様子をつぶさに観察していたからだ。男には子供が右手に力を入れたのがよく見えた。

しかし、実際には右手は僅かに震えるばかりで少しも動かなかっ

た。

「……あれ」

子供が訝しげな声を上げた。

不思議そうにまじまじと自分の腕を眺めている。

指を開いたり閉じたり腕を回してみたり。

ぎこちなさはあるものの、ちゃんと動いた。そしてよし、というように男に向かって腕を振り下ろそうとすると、

「なんで？」

腕は動かなかった。

不思議そうに見てくる子供に男は返す言葉を持たない。男にも分らないからだ。

「……それよりもだ、おれはお前の質問に答えた。だからお前もおれの質問にとつとと答える」

「いちりある」

男の大人げない言葉にうんうんと、したり顔で子供はうなずいた。歳の割に難しい言葉を知っている男は感心した。

「でもね、これたちもしらないの」

「……」

これたち。

子供がそう三人称で示す人物が子供自身だと気づくまで、男は数秒要した。

「……これたち？」

「？」

男が子供の言葉を繰り返すと、子供は首をかしげた。

どうして男が戸惑うのか分かっていないようだ。

これたち。

物を指す言葉で、決して人を指す言葉ではない。と男は思ったが自信はなかった。

男はごく一般の民間人で、えらい学者でもなんでもないから、もしかしたら男の知識は間違っているかもしれない。もしかしたら一部の地域ではそう言うのかもしれない。言葉とは常に緩やかに変化していくもので、絶対だと思われた決まりもいつしか時代と共に変わっていく。

それになんたって幼児語。男の常識は通用しない。男は常々何故食事のことを『まんま』と言うのか、理解できなかった。それと同じことだろうそうにちがいない。

そう男は納得して、気にしない事にした。そうでもしないと話が進まない。

「まあいい。それで、おまえ名前は？　どこから来た？」

「これたちはこれたち！　なまえあったこれもいたんだけどね、これがふこうへいだっていうからなしにしたの。これたちあたまいいでしょ！」

「……ああ」

よく分かった。頭がおかしいんだと。

子供ははしゃいでいる。なにが嬉しいのか満面の笑みを浮かべ、その場で飛び跳ねながら、しかし時折不自然に右手の動きが止まるのが男には気になった。

——じゃ、ころさなきゃ

殺さなきゃ。

聞き間違いではないと思う。その瞬間、確かに殺気を感じた。

そう、明確な殺意をもって子供は何か仕掛けようとした。しかし原因は分からないが実行に移せなかった。そして、今もしかすると子供は実行中なのかもしれない。右手の不自然な動きがそれを表している、ように男は感じられた。

「……無駄な事はやめろ。おれはお前をどうこうしに来た訳じゃない。お前がもしここで人を待っているのだったらそいつが来るまで

一緒に居てやってもいいし、道に迷っているのなら案内してやる」

「これたち、ここにいろっていわれたの」

飛び跳ねるのはやめ、しかし右手の不自然な動きはやめずに、子供は答えた。

「待っているのか？」

「いろっていわれた」

「待っている？」

「いろって」

「……」

要領を得ない子供の答えに、男は頭を抱えた。

お手上げた。

しかし放っておく訳にもいかない。

得体が知れず気味の悪い子供だが、小さい子供に変わりない。町の子供たちと同じよう、あの原因不明の病にいつ倒れるとも限らない。

男には子供がいないので詳しい症状は知らなかったが、この病は子供だけに発症した。だからこの子供も発症しているかもしれない。

それになにより、こんな場所に一人小さな子供を置いては行けなかった。

もうすぐ夜になる。

危険な夜行動物が出没することもある。野犬だって危ない。特にこの子供のひどい臭いは獣が好みそうな臭いだ。

「良く分かった。お前、いいからおれについて来い」

「？」

きょとんと、子供は小首をかしげた。

少し考える素振りをしつつ、子供は答えた。

「でもね、これたちここにいろって」

「おれが良いと言っている」

男は子供の言葉を遮り、更に重ねた。

「いいから黙っておれについて来い」

「……をを」

子供はひどく驚いたらしい。色違いの瞳が大きく見開かれる。

「ほんとうにいいの、これたちがついていても」

「来いと言っているのはおれだ」

辛抱強く、男は言葉を紡ぐ。

「お前をここに置いていく訳にはいかんからな」

危ないから。と言いかけた口は何故かその機能を途中で放棄した。その理由を考えるのを男はやめた。意味が無いからだ。それに考えるという行為はひどい労力を男に要求する。考える事は面倒だったから、男はそれ以上考えるのをやめた。

くしゃりと、薄汚い頭をなでる。

臭い。が、我慢できない程ではない。一体こいつは何日風呂に入っていないんだらうと、男は考えた。

子供の瞳がますます大きく見開かれる。

「これたちは――」

「いいから来い」

男は屈んで、子供の手を握った。

不自然な動きを繰り返す右手を。

小さな手だ。少し男が力を入れれば簡単に折れてしまいそうな、小さな手。

子供と目があつた。

にいと、子供はぎこちなく笑みを浮かべた。

「……」

口元は辛うじて微笑みじみたものが作れているが、二つの色違いの瞳は全く笑っていない。男はひどい寒気を覚えたが、努めて表に出さないようにした。

「さあ、行くぞ」

こくりと、男の言葉に子供はうなずいた。

その仕草は可愛らしいのに。

そんな事を考えながら、男は子供の手を引く。

小さな手が男の手を握り返す。男の真ん中の指を、ぎゅっと。その慣れない感覚をこそばゆく感じながら、男はちよいと、子供の手を引いた。

「あ」

男が手を引き、子供が一步踏み出すと同時に子供は小さく声を上げた。その瞬間、かくんと子供の身体が前へ倒れる。

「！」

男は驚いてとっさに抱き留める。

ひどい臭いが鼻をついだが、どうにか耐える。

子供はぐったりとしている。やけに重い。それもだんだんと、有り得ない事だが重さが増していつている感じがした。

気のせいだ、と男は自分に言い聞かせながら魔女の元へ急ぐ。

人の身体が重くなっていくなんで、有り得ない。見かけも全く変わらないのに何故体重だけが増えていくのか。

男には理解不能だった。

しかし男の腕はだんだんと重くなっていく子供の体重を、しっかりと男に訴え続けた。

ずしずしと重たくなる、子供の小さな身体を抱いて、男は全速力で森を駆け抜けた。

「よく来たな」

魔女之家に着くと、魔女は家の戸口の前で男を待っていた。

いつ来てもその度に驚かされる、不思議な家だ。

黒いフードを目元深くまですっぽりと被り、手には曲がりくねった木の杖。黒のローブに複雑な刺繍が織り込まれた深い紫のマントを羽織っている。

男も何度か見たことがある、魔女の正装である。

「お主が来ることは分かっておった」

男が事の経緯を説明しようと口を開く前に魔女は言った。

「ただその童を拾って来るかは分からなかった。それは分かれ目じやった。わしが見た二つの未来の」

魔女は厳かな声で男に告げた。

男は思わず腕の中でぐったりしている子供を見た。

「……おれは正しい選択をしたのか？」

「正しい、間違った……どれも結果論じゃな、おまけに正しい言葉ではない。正しく言うならば都合良いか悪かじゃな」

「問答はいい」

「つれん男じゃ。つまらんのお」

「……」

男は無言のまま子供を魔女に差し出した。男にははなから魔女の問答に付き合う気はない。それよりも男には町の人間から託された使命があった。

「おれがここに来た用件は分かっているだろう、時間がない。早く

してくれ」

「ほんにつまらん男じゃのう、久しぶりに顔を見せたと思えば茶の一つも飲まんと去ぬるとは。お主はもうちつと遊ぶことを覚えるべきじゃな」

「状況が状況だ」

「分かっておるわい。まるでわしが人でなしのような言いぐさじゃな、失敬な奴じゃ」

「そんなつもりはないが」

「冗談じゃ」

にやりと、魔女の口元に深い笑みが浮かんだ。

「中へ入るがええ。薬は用意しておる」

ああ、やはり魔女は魔女だ。これから起こる事、やるべき事をきちんとわかっている。

男は肯いて、魔女の言葉に従う。

魔女が先に家の中に入った。男も子供を抱いたまま、後に続く。

魔女の家は広い。男の家なら三軒は入りそうなくらいに広い。

玄関を入るとすぐに応接間。魔女は自分の家にあまり人を入れたがらない。魔女によると他人を家に招き入れると家の『場』が乱れ

るとの事。男はよく分からないし興味もなかったからそれ以上を聞かなかったが、だから大抵の者はこの応接間までしか魔女の家には踏み込めなかった。

男も大抵の者のその一人であつた。今日までは。

「なにをしておる。こつちじゃ」

男が応接間のソファに子供を寝かしつけようとしたら、魔女は奥の扉の前に立ち、男を手招いた。

「何十年ぶりかのう、この奥に他人を招き入れるのは」

楽しそうに魔女は笑いながら扉を開けた。

真ん中に螺旋状の階段がある。その奥には広い調理場。魔女一人しかないのに、豪勢な話だ。

魔女は螺旋階段を降りていった。男も続いてく。

次の階は書庫のようだった。たくさんの本棚が並んでいる。本で埋まつた書棚もあれば、ほとんど空いている書棚もあった。

魔女は更に降りていった。仕方なく男も続いてく。

螺旋階段はその階で終わっていた。妙な部屋だ。暖かく適度に湿っている。部屋は大きく二つに別けられていた。

部屋の入り口は半透明のガラスのすり戸。暖簾といわれる、極東のカーテンのような看板のような布きれ。ガラス戸の半分を覆って

いる。そこには大きな文字でそれぞれ『男湯』と『女湯』と書かれていた。

「こつちじゃ」

女湯、と書かれた方に魔女は入っていた。

一瞬戸惑う男だったが、

「安心せい、わしらしがおらん」

魔女の笑いを含んだ声に腹を決めて女湯と書かれた暖簾をくぐる。殺風景で広い脱衣所を過ぎるとまたガラス戸の引き戸が。

魔女がからりと開けると、中から湯気が入ってきた。

相当熱い。熱気がむうーんと男の元まで伝わってきた。

ぴくりと、その時子供が動いた。

「そのまま湯へつけるんじゃ。暴れるようなら押さえつけてでもの」

魔女は振り返り、男をあごでしゃくった。浴室に魔女は入らないつもりらしい。男は子供を抱く腕に少しだけ力を込めながら、浴室へ足を踏み入れた。

熱い。

むんむんと、湯気が沸いていた。湯船のお湯は沸騰しているので

はないかと思うほど。また何かの薬草の臭いも充満していた。

広い浴室だ。ベージュ色のタイルで統一された、飾りっ気のない広い浴室。湯船も大きく、大人でも一人ぐらいなら悠々と泳げそうだった。

男は言われた通りに屈んで子供を湯船につける。湯気は白い程に湯船から沸いていたが、男の腕が感じる温度は高くはなかった。むしろ生優しい。臭いの元の薬草の効果だろうか。

子供の身体が湯に浸かった瞬間、子供の目が見開かれた。

「！」

その目の開き方が、かつっ！ というような気迫に満ちた目の開き方で、びっくりした男はすっかり子供を湯船に落としてしまった。

どぼん。

小さく水しぶきを上げ、子供は頭ごと湯船に浸かった。

「っー」

しまった。

慌てて引き上げようと男は腕を伸ばしたが、魔女の杖が遮った。

「これで良い。これでもう大丈夫じゃ」

横を向くと魔女がいつの間にか立っていた。

「これで、いいのか……？」

「良い」

「湯につけたただけだぞ。というか今頭まで浸かっているが、それこそ大丈夫なのか？」

男は湯船をのぞき込みながら魔女に尋ねる。子供の目は両目とも見開かれたまま、湯船に沈んでいる。ひどく恐ろしい状況なはずだが、隣に魔女が居るせいかな男は恐怖を感じなかった。ただ心配だ。

「大丈夫じゃ。この湯は特別にはったものじゃからの。心配ない。それよりもお主は急いで町に帰らんとまずいじやろ。早く薬を持って帰ってやれ」

「それは、そうだが……」

男は子供から目が離せない。

「この童が気になるか？」

そりゃそうだ。

答えるのは躊躇われたが、男はちいさく肯いた。

面倒事の臭いがぶんぶんとしたが、仕方ない。自分に嘘はつけない。ついたら後がしんどいだけだった。

「なら次に会う時にまでにこの子の名を考えてやれ。わしがつけて

やつても良いが、それでは面白くないからのう」

「名前……？」

名前をつける。

それは特別な事だ。たとえこの先一生この子供と会わずに過ごしたとしても、この子供との繋がり、縁は名前をつける事でできてしまう。一生、この奇妙な子供との縁は切れる事はない。

この子供が無関係の他者ではなくなってしまう。

「そうじゃ。この童にはまだ名がないからのう、お主がつけてやれ。その童が気になるのならば」

男は即答しなかったが、頭のどこかではもう名前を考え始めていた。

エーファ。

いい名前だと思った。どこかで聞き覚えがあると記憶を辿れば、もう随分と前に亡くなった祖母の名前だった。

「さあ、もう帰るがええ。もうこの童は大丈夫じゃ。わしに任せて帰るがええ」

「……ああ」

男は立ち上がり、浴室を後にする。

「薬は机の上においておる。町長の奴にわたしてやれ」

「分かった」

男が振り返ると、魔女は湯船の前に立ち、なにやら呪文を唱えていた。

もう自分がやる事はなにもない。

言われた通りに男は階段を昇り応接間まで戻ると、机の上にいる間にか置かれていた小さな革袋を手にする。

ずしりと重たい。町の子供たちを救う薬だ。大切に男は懷にしまふ。

魔女の家を出た時、男は何気なく振り返った。

魔女の家は不思議な家だ。一本の大きな木をそのまま家にしている、木のあちこちに扉や窓がついている。かと思えば大きな枝の先にはちよこんと小屋が乗っているし、なんとも不思議な家だ。家の周りには畑もある。

男が子供の頃に初めてこの家を見た時、あまりの大きさに驚いたものだが、今はどうだろう。慣れてしまったのか男の図体がでかくなったせいか、その時感じた大きさを感じなかった。むしろ小さくなったような……。

「何を馬鹿なことを」

かぶりをふって、男はつまらない感傷を振り払った。

子供に構い、無駄な時間を過ごした。町の人間は今か今かと男の帰りを待っているだろう。急いで帰らなければ。

またな。

胸の内だけで呟き、男は町へと急ぎ足で帰って行った。

それから数年後、古い森の魔女が死に、新しい魔女が生まれたところで物語は始まる。

ブローグ（後書き）

誤字を訂正しました（22/9/8）

森の街グレイソン。

王国の西に位置し、魔女の森とも言われる広大なメルバの森に最も近い街。昔は小さな町で、メルバの森に生える特殊な草花を目当てにした者がたまに訪れる、本当に小さな町だった。

森の向こうにはメルー大山脈。その向こうは隣国だが荒れ果てた荒野がただ続いている。森の向こうへと行く者は皆無だった。森の向こうは険しい山と荒れ果てた荒野、得るものは何も無い。だからグレイソンには森以外何もない町だった。

十年前までは。

「我々メルディン社はこの計画の成功とともにこの街を本拠地とするつもりです。ですから、この仕事はとても重要で絶対に成功させなければなりません。ご理解いただけますかな？」

メルディン社。

世界有数の企業だ。情報サービスから衣料・食料品まで幅広く扱う総合メーカー。

グレイソンが近年急速に、王都に次ぐ程の大都市に発展したのはこの世界企業が深く関係している。

十年前にメルディン社の工場が造られた。そしてメルディン社は街の整備に力を尽くし、グレイソンを都市へと発展させたのだった。

クルトはにへりと笑った。

「分かります。分かりますとも」

依頼人の男が満足げに肯くのを、クルトは笑みを貼り付けたまま冷めた心地で眺めた。

どこにでも居そうな男だ。だが、だからこそ逆にクルトを警戒させた。

茶髪に茶色の瞳。どこにでもありそうな黒眼鏡に地味な焦げ茶色のスーツ。

一見ただの優男だがクルトの経験上、こういう人間ほどくえない人間だった。

「そんな大層な仕事に俺達をご指名、ありがとうございます」

大げさに頭を下げて見せ、クルトは唐突に席を立った。

「でも悪いですね、俺も忙しい身でして——」

すみません。

と、断ろうとした時、依頼人は先程と同じ、満足げに肯いたままのいい顔のままで告げた。

「申し訳ないが、貴方に選択権はない」

「は？」

ああ、やっぱり勘は当たりやがった。

苦々しい思いでクルトは男を見た。男は変わらず満足気な笑みを浮かべ、クルトを見ている。

クルトを脅迫しているというのにおだやかな物腰だ。だが、逆にそれが迫力を持っていた。

「呪術というものをご存じですか？ それを予め貴方にかけて頂きました。断れば不幸が貴方を襲うようにね」

「はあ？」

呪術。

聞いた事がなかった。

最もクルトは魔術に詳しい方じゃないから当てにならなかった。それはクルトの弟分も同様。

「ふふ、私共を訴えますか？ それはやめておいた方がお互いの為だとは思いますが」

クルトはとりあえず一度立ち上がった席に不本意だが座り直した。

「別に、はなから泣きつくつもりはねえよ」

それほど上等な身分の市民でもない。

クルトは苦々しく己の身の上を顧みた。

叩けば埃がでるのはきつとお互い様だ。ただしこちらが街の何でも屋二人に対して、向こうは世界有数の大企業様。象と蟻の比喻もきつと向こうが大きすぎて不適切だろう。

やはり来るべきではなかった。この場に來た事を腹の底からクルトは後悔した。もうお手遅れだが。

「それでは、本題に入りましょうか」

男の満足気な笑顔を苦々しくクルトは眺めた。

男はそんなクルトに構うことなく、満足げな笑顔のまま話を進めた。

話が終わり、メルディン社の応接間を出ると、クルトはとっと自宅も兼ねている事務所へと戻った。

『ボルク事務所』。

自分たちの苗字をそのまま事務所の名前にした小さな事務所。

三階建ての小さなおんぼろビルを借りている。一階部分は飲み屋のような喫茶店で、朝のモーニングから深夜のバータイムまでずっと営業している。二、三階部分がクルト達が借りている物件で、二階を事務所、三階を自宅として使っている。

「帰ったぞ！」

勢い良く扉を開け、二階の事務所に入る。

出迎えの声はなく、入り口近くの受付には誰も居なかった。普段ならばロルフの定位置だ。

受付といっても長机を置いているだけで、呼び鈴は置いていない。事務所は小さく、扉を開ける音はどんなに用心して開けたとしても、部屋のどこに居ても聞こえた。

受付の横にはシンクとコンロが備え付けられ、ここでお茶ぐらいは出せた。

留守番を言いつけた弟は出かけているらしい。扉に鍵も掛けずに、不用心な事だ。

「まったくロルフの奴……」

苦々しくクルトは呻く。

「仕方ねえ奴だな、まったく」

壁に取り付けている洋服掛けに上着を掛けながら、独り呟く。

戻ったと言わなければ。

鍵を掛けないで出て行ったのはこれが初めてではない。以前にも何度かあった。その度にきつく言い聞かせて来たつもりだったが、この様子では改めれていなくなっていた。盗られて困る物も、昔に比べたら随分と増えたものなのに。

「そんなにロルフさんを責めないであげて下さいまし」

「！」

後ろから掛けられた声にクルトは不意を突かれて驚いた。

「あらあら、そんなに驚いた間抜け顔、折角の男前が台無しですよ」

「……そりゃ、どうも……」

男前と言われて悪い気はしない。たとえそれが百パーセントお世辞だと分かっている、やっぱり悪い気はしない。

目の前にはお得意様が立っていた。

きれいな妙齡の女性だ。歳の頃は三十過ぎから四十代、少女のように無垢な笑顔が絶えない女性。色の薄い金髪の髪はふんわりとカールし、深い蒼の瞳はいつも楽しそうな色をたたえている。服装も少女みtainなふりフリルがふんだんにあしらわれた、まるでお人形さんが着るようなものだが、不思議と彼女が着ると落ち着きが
出て、よく似合っている。

名をロゼッタ・マクシハイム。

どういう訳かクルト達を気に入り、なにかと仕事をくれたり回してくれたりする、この事務所のバトロンの存在だ。

先程のメルディン社の仕事を仲介してくれたのも彼女だった。

「どうでしたかしらメルディンのお仕事の方は？ お話は今日でしたわよね？」

首をかしげながら尋ねるロゼッタからは悪意を感じなかった。いやたとえあったとしてもクルト如きの若造では感じ取る事は不可能だろう。実際に彼女からの依頼の中で痛い目にあったことは一度や二度ではない。

「……ま、報酬の割には簡単そうではありましたが」

クルトは良い仕事である事は認めた。

呪術とかよく分からない術を掛けられたが報酬は破格で、仕事内容は単純そのものだった。

だからこそ胡散臭かったが。

まさか呪術というものには仕事が終わった瞬間に殺されるような、そんな呪いも付いているのだろうか？ 絶対に有り得ないと言い切れないのが怖い。後で診てもらおう。

「そう、それはよかったですわ。紹介した甲斐があります」

ふふふと、柔らかに微笑みロゼッタはまるで純粹無垢な少女そのものだった。

不思議な女性だ。

何度痛い目にあつたとしても彼女の事は憎めなかった。悪い気がないのかは疑問が残るが、なんとなく憎めない。にくい女性だ。

「ところでロルフはどこに？ それにロゼッタさんがどうしてここに？ もしかして仕事の話ですか？」

「ちよつとお使いを頼みましたの。何をお願いしたかは、ロルフさんが帰ってくるまでのお楽しみですわ」

「はあ……」

「それとわたくしがここに居るのはたまたまですわ、近くを通りかかつて、気になったものでしたから」

苦々しいを通り越し、クルトは頭痛さえ覚えた。

ロゼッタが我が物顔で事務所の留守を預かっていたのもびつくりだが、押し切られたロルフの押しの弱さにも参る。まあクルトだってロゼッタにはどうも頭が上がらないから、もし同じ状況に陥ったら果たしてどうなるか。結局同じ事になるかもしれないが、それはそれ、これはこれだ。いくらバトロンの女性とはいえ、いいようにこき使われて情けないぞ！ と、こっそり兄貴面してロルフには言つとこつ。

「さ、立ち話なんですし、お座りになって。お茶でもいれますわ」

「どうも……」

ここは俺の事務所なんですけど。

胸の内だけでこっそりとうめきつつも、クルトはロゼッタの勧めに従って接待用のソファに腰を下ろした。

1（後書き）

誤字脱字訂正しました（9／18）

「それで、お仕事はどうでした？」

お茶を差し出しながら、さも当然のような顔でロゼッタは尋ねた。

差し出されたお茶が乗るカップもお皿もティーポットもティースプーンすら、クルトは見た事がないものだった。

弟のロルフは料理さえまともにしない奴で、ロルフが揃えた物ではないだろう。むしろクロトとロルフ二人ともこういう嗜好品の類には縁がない質で、水さえあれば十分な人間だった。事務所をここに構えてからは客に出す程度にインスタントコーヒーは揃えていたが、それも素っ気ないマグカップで出す程度で、こんな上品なカップを用意した覚えはなかった。

「ええと……」

もしかしてこれは彼女の持ち込みだろうか？ それかロルフに買いに行かせたか。どちらもあり得る事だったが、後者の可能性は考えにくかった。だってこの茶器の一式はとても高そうに見えた。

透明感のある白い陶器に、そつと描かれた紅い華と緑の葉っぱがいくつか。

個性的でもなんでもない、どこにでもありそうな絵面だが、だからこそ芯のある上品な美しさがそこにあった。

芸術を愛でる心なんて生まれて数年で忘れ去ってしまったクルト

ですら、ちょっとした感嘆を覚えてしまう。単純に綺麗だと思った。

美しいとはこういう物だと、素直に感嘆できた。

一体買えば幾らするのか、そんな事は恐ろしくて考えたくない。しかしロゼッタに「これくらい必要ですわよ」と言われればきつと買ってしまうだろう。それに認めるのは少し癪だが、クルトはこの茶器が気に入ってしまった。もしロゼッタが持ち帰ろうとすれば、表面上ではせいせいした振りをしても心の奥底では残念がるだろう。

ロゼッタの質問とは全く関係無い、そんな事を考えながらカップを持ち上げ、クルトは紅茶を口に含んだ。

「紅茶、とても美味しいです」

「当たり前です、わたくしが自らお入れしたのですもの。そんな決まり切った事をわたくしは聞いておりませんの。もうイジワルね、クルトさんは。ロルフさんと大違いですわ」

ぶんぶん。

わざとなのか素なのか、どちらにせよ可愛いことには変わりなかったが、どうなのか。

そこそこの年齢に達した大人に似合う形容詞として、『ぶんぶん』って。

クルトは物理的に頭をぶんぶん左右にふってその形容詞を頭から振り払おうとしたが、無駄だった。

どう見ても向かいに座り、自分で入れたお茶を飲もうとして、クルトの言葉に気分を害した様子のロゼッタの様子は『ぷんぷん』としか言いようがなかった。

薔薇色のふくよかなほっぺを膨らませ、不満げにうつとした瞳で見つめられてみる。

ロゼッタはそういう子供じみた仕草が恐ろしい程に似合う女性だ。もういい加減耐性はつき始めたから悩殺されることは少なくなっただが、居心地が悪くなるのは変わらない。

耐えきれずにクルトは許しを請うた。

「勘弁して下さいよロゼッタさん。確かに貴方から紹介は頂きましたが、知ってるでしょ、守秘義務ってヤツ。依頼人との秘密は守ります。守らせて下さいよ」

守秘義務とは、職務上で知る事のできた秘密を守らなければならない義務。

クルト達の『ボルク事務所』は依頼があればなんでもやる何でも屋として活動している。持ち込まれる依頼も様々だ。浮気調査から迷い犬の搜索、取り立ての代行まで幅広く。そういった仕事の中で依頼人や周辺の人間の事情に深く関わりすぎ、要らない事まで知ってしまう事がままにある。

ここだけの話、質の悪いそういう何でも屋の手合いの中には仕事で知り得た情報をネタに依頼人を脅す、依頼人に限らずにネタを手に入れた人物を脅す輩は多い。中にはそういうネタ探しを目的にしている輩もいる始末で、非常に危うい仕事なのだ、この何でも屋と

いうのは。

クルトが守秘義務を徹底的に課するのはひとえにこれら厄介事を避ける為。依頼人との信頼関係も大事だが、そんなものは二の次だ。

全ては己のため。

自分たちの場所を、守る為。

だから絶対に守秘義務は守る。

「まあ」

ロゼッタは大げさに拗ねてみせた。

「わたくしとクルトさんの仲じゃありませんか？　ね、いいでしょう？　少しくらい」

「だから、少しも何もないでしょうが」

「んもう、クルトさんのい・け・ず」

「マジで勘弁して下さい」

「本当に……だめ、ですか？」

「無理です」

つけ込まれないよう、しっかりとロゼッタの深い蒼の目を見なが

ら、クルトは言い切った。

「仕事を回してくれたのは感謝してますけどね、無理なモンは無理です。俺はまだこの仕事辞める気はないんで」

「……そう。分かりましたわ。今日は大人しく帰ります」

ふうと一息、深く息を吐き出して、ロゼッタは頂垂れた。

クルトは危うく一緒に溢しそうになったため息を飲み込んだ。

「そうしてくれると助かります」

「んもう、本当にいけずね、クルトさんは」

「そりゃどーも」

「もう、可愛くないっ!」

ぶんぶん。

憤慨した様子でロゼッタは立ち上がった。

「その茶器は差し上げますわ。ここに来るといつもコーヒーばかりですもの」

「はあ、ありがとうございます」

「茶葉はご自分で揃えてくださいね。そうそう、茶葉はこのお店がお勧めですわ」

そう言って渡された小さなパンフレットにはいかにも高そうな店が映っている。

「はあ、どうも」

受け取りながら、多分この店を使う事は無いだろうなとクルトは考えた。

「それではご機嫌あそばせ」

優雅に一礼して、ロゼッタ婦人は事務所を後にした。

ロゼッタが帰った後、残った紅茶を飲み干しクルトはする事がなくなつて呻いた。

「……ロルフはどこまで使いに行つたんだ？」

答える者は、いなかった。

「つまり、こう、いう事、なんだ」

ロゼッタが帰ってしばらく。

ようやくロルフが帰ってきた。

ロルフはぜえぜえと、息を切らせながら報告する。

「ろ、ロゼッタさんに頼まれて、葉っぱを買いに、行ったんだよ」

葉っぱとは茶葉の事だろう。もっと他に知性を感じさせる言い方はできないのか……。

「この店か？」

ソファに背を預けたまま、少し情けなく思いながらクルトは先程そのロゼッタから頂いたパンフレットを差し出して見せる。

「それ、それ」

「……幾らしたんだ？」

自然と低くなってしまふクルトの声。

昔に比べれば格段に生活水準は向上し、明日のメシに困るような事態はおさらばしているが、それで

も厳しい時は厳しい。ちょっとくらいならいいが、大きな無駄遣いはいい。

「二百^{エッジ}E」

何故かロルフは誇らしげだ。こんな高い物を俺は買えるんだぞ、
という心のやらしさの表れか。

「……」

その答えに、はぁ、と、大きくクルトは息を吐いた。

二百Eもあれば一週間分の食料が買える。十分に大きな無駄遣いの額だ。

一体誰が紅茶など飲むか。ろくに入れ方も知らないのに。

「ロゼッタさんが言うには今度の仕事の相手先の好きな奴だからって。絶対に用意しておけて言うもんだから」

「ったくあの人は……ん？」

ロルフの言い訳がましい言葉の中に、一つ聞き捨てならない単語が聞こえた。

「相手先の好物？」

身を起こし、ゆっくりと向かいに座り喉を潤しているロルフに尋ねた。

「あの人がそう言ったのか？」

「ああ」

「じくりと」。

豪快に喉を鳴らしながらロルフは肯いた。

「なんでも昔からの知り合いらいいぜ。その、今回の仕事の相手先と」

「……」

あの狸め。

クルトは頭を抱えた。

初めから、全て分かっていたのか。

分かっているがらしつこく尋ね、クルトをからかったのか。

意味が分からない。

あの人のことだ。意味などなく、あの人自身が言っていたようにたまたま寄っただけなのか？ いや、それにしてもタイミングが良すぎる。やはり何かしらの意図はあったはずだ。

「……………まあいい」

しばらくの黙考の後。

組んでいた手をほどき、クルトは決断した。

「とにかく仕事だ。飯食ったら行くぞ」

「分かった」

ロゼッタの事は、考えるだけ無駄だ。

彼女との付き合いは長いと言えるが、それでも知らない事の方が多かった。

住所と家族構成はなんとなく知っているが、実際に訪ねた事は無いし、家族とは会った事もなかった。

依頼人という関係から考えればおかしい話ではない、かもしれないが、一人の依頼人というには付き合いが長すぎるだろう。

まあ最終的に食えればそれでいいのだから、ロゼッタの意図はどうでも良かった。

金になるのは確かだし、ロゼッタの持ち込む仕事は悪いものばかりではない。

それにここが重要なのだが、クルトにロルフ、二人ともロゼッタの事は嫌いではなかった。たまにいらつとなったり、不快感を覚える時もあるが、それがどうでも良くなってしまふような、言葉には辛い魅力が彼女にはあった。

困った事に。

「なんか食うモンあったっけっか？」

ソファから立ち上がり、三階へと移動すべくクルトは足を向けた。

「えー、下行こうぜ。もう店開いてたし」

下とは一階の店の事だ。すっかり常連で、他の店で食べるよりは安くて済むので利用する事が多い。

不満げな声を上げるロルフをクルトは睨んだ。

「駄目だ！ お前今さっきもロゼッタさんに言われて無駄遣いしたばっかじゃねえか。うちにはそんな贅沢品を買うお金はそうそうありません！」

ありません、の前に「そうそう」と付けたところが、クルトの微妙なプライドだった。

きょとんとした様子でロルフは答えた。

「え？ いや、あの葉っぱのお金はロゼッタさんが出したぜ」

「……なんだと？」

「馬鹿だな兄貴。俺が葉っぱ如きに二百Eも出せるかって！ 馬鹿言うなよなあ」

「そりゃそうだ」

「だろう？」

だとしたら、ますます分らない。

ロゼッタは一体何をしに来たんだ？

「じゃ、下に行くか！」

弟の言葉で我に返る。

「ああ」

つい下の店で昼食を取る事を了承してしまった。

思考が泥沼にはまる。

だからこれ以上ロゼッタについて頭を巡らせるのは止めようと思
に言い聞かせたのに。

なのに、いつの間にかロゼッタの泥にはまっている。

恐ろしい人だ。

そして、これから向かう先の相手はその恐るべきロゼッタの知り
合いらしい。それもロルフを使い走りにさせてまで、しかも自費で
その相手の好きな茶葉を用意させる程の、だ。

ただの知り合いではないだろう。

勘弁して欲しい。

「……はあ」

クルトは深く、息を吐いた。

深く深く。

もしあるとしたらロゼッタの泥を頭から胃から、全て吐き出すように。

ふかくふかく。

カフェバー『カツ』。

カフェバーと言われれば小洒落た、いかにも女性が好みそうな小綺麗な外装を思い浮かべるが、この『カツ』は見事にその予想を外させる。

そもそもクルト達の事務所も含め、建物全体が古びてぼろっちい。レトロとか味があると言えない事もないが、やっぱり古くさくてぼろい。かび臭さを感じる。

それで店の装飾が素っ気なくカフェバーという文字と店の名前が入った看板と、やはり素っ気なく最小限のメニューだけ書かれたメニュー表のみ。メニュー表は店の椅子でもある木製の椅子の上において置かれているだけだ。

名前詐欺もいいところだ。よくカフェバーという単語を看板に掲げ、真っ当に営業を続ける他の店から苦情が来ないものだと思う。いっそカフェという単語を取ったらどうだろうか。バーというだけならその雰囲気はある。

外見だけなら。

からん。

古びたドアを開けると木製のベルが乾いた音を立てた。

「いらっしやい」

カウンター席で新聞を広げていたマスターがちらりと顔を上げ、
来客を歓迎した。

「なんだ、お前らか……」

マスターは明らかに期待ハズレといった、失望感をあらわにした。

老年の男だ。

白髪で真っ白な頭を短く刈り上げ、もみあげから口元まで全て真
っ白なひげが覆っている、なかなか厳つい強面のじいさんだ。体格
もがっしりしている。カフェバーの店主というよりは盗賊の頭がお
似合いだ。

「折角のお客にそんな顔するんじえねえよ。ただでさえ不味い飯が
更にまずくなるだろう」

「腹減った……」

ぶーたれるクルトと、力なく呻くロルフ。

「ふん。ここは飯屋じゃねえぞ」

マスターは席も立たたず、憎々しげに言った。

狭い店だ。

カウンター席が五席と二人がけのテーブル席が二つ、六人掛けの
席が一つの小さな店。

素っ気ない外観に比べ、内装は幾分愛嬌があつた。

テーブルには全て真っ白なテーブルクロスがかけられ、造りががっしりとした骨太の椅子の背もたれと腰の部分にはクロスと薄いクッションが敷かれている。椅子のクロスとクッションはどれ一つとして同じ物はなく、花柄だったりレースがあしらわれた綺麗な物から、飾り気無いストライプ模様だったりと様々だ。

「いいから何でも食わせてくれよ。コーヒーも飲んでやるからさ」

「頼むつて。俺腹減つて死にそう」

「ここは珈琲屋だ。そんで夜は酒も出す。だからカフェバーだ」

懇願する二人に対して、マスターはしかめっ面で答えた。

マスターなりに拘りがあるらしい。素晴らしいことだ。それだけの拘りならば味の方もさぞかしだろう。しかしクルトに言わせてもらえれば、確かに珈琲の良い香りは店に常に満ちている。が、だがしかし、肝心の客の姿を見た事がなかった。

それは当然、クルト達だって営業時間中常にこの『カツ』に居る訳ではない。だから見逃しているかもしれない。が、ほぼ毎日、多い時には一日に三、四回もクルト達はここカツに出入りしている。

だから、自分たちは大変貴重な客の筈である。そんな貴重な客をそんなに無下に扱ってよろしいものかと、是非伺いたい。

「珈琲飲みに来たのなら歓迎してやる」

マスターは仏頂面で妥協した。

「ああもうそれでいいよ。コーヒーと何か食いモン頼む」

「頼む」

クルトとロルフはカウンター席に座った。

マスターは億劫そうに立ち上がり、読みかけの新聞を机の上に置いて、キッチンへと入る。

なんだかんだで面倒見の良い男だ。請われれば何でも作ってくれる。コーヒーしか出さないと言いながら、きっちり材料の買い置きはある。だからご飯ものも用意できる。

「ちょっと待ってろ」

とんとんと、野菜を切る軽快な音が響く。

やがてじゅーじゅーと油のはねる、騒がしい音が聞こえ出す。

手早い。

ぼんやりとしている間に、料理はもう出来ていた。

「ほらよ」

愛想もなく差し出されるといふよりは、突き出す。

しかし文句も言わずに、クルトとロルフはありがたく受け取り、むさぼり食う。

素っ気ない白の深皿にのっているのは、野菜の微塵切りがたっぷり入ったソースがかけられたショートパスタ。フォークで突き刺し、そのこしの強い独特の食感を楽しむ。

「これから仕事か？」

「ああ。ちよつと出かけてくる」

「ほお、どこへ？」

他愛ない話だ。深く考えずにクルトは答えた。

「森だよ。そこの人間に用がある」

「……魔女にか？」

少しだけ驚いたようなマスターの声。

ちらりと視線を上げ、マスターを見ると、マスターはひどく驚いている。

「魔女？」

聞き慣れない単語だ。

クルトが聞き返すと、ますますマスターは驚いたようだ。

「なんだ、知らずに引き受けたのか？ 呆れた奴だな」

「うっせ。それよりも魔女ってどういう意味だ？」

「魔女ってあれか、変な薬作ったり箒で空飛んだり、要するに変なばあさんだろ？」

他にも黒猫を飼っていたり巨大な鍋でなにかを煮込んだり等々。ロルフは不気味で恐ろしい魔女のイメージを挙げた。

「それは絵本の読み過ぎだ。森の魔女はそんな事はしない。……薬は作るがな。昔は皆よく世話になったものだ」

感慨深げにマスターは言った。どこか昔を懐かしむようでもある。

「薬ねえ……」

メルディン社が出来てから風邪薬や解熱剤、胃腸薬などちよつとした薬はメルディン社が販売する市販薬でこと足りている。クルトも病院など行かずに、そういった薬に頼ることが多い。

魔女が作った薬など、クルトには怪しい物としか思えなかった。

「まああの会社ができてからはほとんど魔女の話は聞かなくなったがな。あのばあはまだ生きてやがったのか」

あの会社とはメルディン社の事か。この仕事の依頼主である。

「そつらしいぜ？ つつーか魔女とは知り合いなのか？」

ロゼッタも知り合いらしいし、魔女とは意外にオープンな人間なのか？ 魔女と言われればひっそりと人に隠れて暮らしていそうなのに。

「昔からこの町に居る人間なら誰でも知ってるさ。魔女はなんでも知ってるからな」

「？」

奇妙な言い回しだ。

少し薄気味悪い。

「なんか気味悪いばあさんだな」

「そうだな、なんでも見透かしたような、少し近寄りがたい人だった」

マスターは魔女を懐かしんでいる。

ロルフの暴言にも笑っており、魔女を敬っているのか恐れているのか、よく分からない。

「まあともかく、森へ行くなら気をつけることだ。魔女を怒らせるなよ。あのばあさん何やらすか分からんからな」

「怖い事言つなよ……」

クルトは顔をしかめた。

もしかしてロゼッタが手土産として茶葉を用意させたのも、その魔女のばあさんの気性の難しさを知っていたからか？

いや――。

もしそうなら、逆にロゼッタは魔女の嗜好と全く違った、むしろ真逆の茶葉を用意させたのかもしれない。ロゼッタとはそういう人だ。全部が全部その調子ではなく、むしろ普段は優しく、よくしてくれるありがたいお方なのだが、たまに奈落の底に突き落とすようなむごい仕打ちをする事があった。

今回もそうなのか。

いや、いつも通りの親切心か？

クルトには分からなかった。

だが――。

「ま、いつか」

結局いつもの結論に行き着く。

考えた所であるものはなるようにしかない、と。

「何がいいんだ？」

「別に。大したことじゃねえよ。こっちの事。それよりもじつとうさん。相変わらず早くて旨いなここの飯は」

「ふん。おだてても何も出んぞ」

そう言いながらも、満更でもない顔で食後のコーヒーを用意し始めたマスター。

コーヒーの香ばしい香りが更に強く、店に充満していく。

まったりとした、至福の時間だ。

「ほらよ。ゆっくりしていけ」

ご飯の皿は下げられ、代わりにコーヒーカップが差し出される。

「あー、やっぱりインスタントとは大違いだな、兄貴」

「だな」

ロルフの言葉に肯く。

コーヒーは好きでも嫌いでもないが、やはり普段飲んでいるようなインスタントと全く違う、豆を挽いていれられたコーヒーのkokoroの深さと香りの良さには落ち着かされる。

しばらく香りを堪能して、クルトはゆっくりとコーヒーに口をつけた。

ロルフはたつぷり砂糖とミルクを入れるが、クルトはブラック派だった。

ブラックなのはちょっとした理由がある。コーヒーの味を楽し

みたいから、ではなく、砂糖とミルクを入れるのが面倒だからだ。それに大体、コーヒーとは苦い物だ。だったら苦い苦いと感じながら飲むのがコーヒーに対する礼儀ではなからうか。甘ったるいのが好きなのならジュースでも飲んでろ！ とクルトは思うが、口に出した事は無い。口に出すほどの強い主張ではないからだ。

ただ、

「……おいロルフ、入れすぎじゃね、それ？」

溢れんばかりに砂糖やミルクを入れる奴には少しだけいらった。た。

「そうか？」

言いながらも更にロルフは砂糖を、もう既に溢れんばかりに、ぎりぎりになっているカップへと投入した。絶対に溢れると危惧したクルトに対し、カップは意外にも包容力の高さを見せつけた。

少しだけ表面が揺れた後、何事も無かったかのようにカップは平穏を取り戻した。そのカップを持ち上げ、ロルフは中身を口に含んだ。

よくこぼさないものだど、感心してしまう。

「まあ、それぞれ好みだからな。旨い飲み方を分かっている奴がえらいのさ」

マスターはどこか諦めた口調で諭した。

「いや、別にどうでも良いけどよ……」

なにか釈然としない思いを抱きながらも、クルトはこれ以上この話題については言及しない事にした。

今はこの瞬間を楽しもう。

まったりとした時間を、クルトは楽しむ事にした。

のんびり、のんびりと。

「なあ、兄貴」

弟のか細い声にクルトは答えた。

「なんだ、我が弟よ」

こういつ芝居かった言葉使いをする時は不機嫌か上機嫌かのどちらかだと、ロルフは長い付き合いの中で分かっていた。

分かつてはいたが、泣き言は止まらない。

「なあ、どうしても行かなきゃ駄目なのか？」

「さつきも道すがえら説明したよなあロルフ君。俺達の仕事は魔女だかなんだか知らないが、ともかくこの奥に住んでる人間に用があるんだよ」

いらいらと、クルトは足元を蹴った。

「で、でもよお……」

「お前の言いたい事は分かる」

尚も言い募るロルフに、クルトは同意を示しながらも強引に遮り言った。

「確かに普通じゃない。ここは普通の森じゃない。それは分かる」

「……」

ロルフは無言で、辺りを不安げに見回した。

物置なのか小さな小屋があり、その横には手作りのブランコとシーソーがある。それらは長い間使われていないのだろう、草木が生い茂り、覆い尽くしている。

不気味だった。

ロルフはこういうのが苦手だ。寂れた廃墟、人から忘れ去れた誰かの墓地。そういう物悲しく切なく、哀愁漂う場所が大の苦手だった。

しかし、誰なのかは知らないが、最低限の手入れは行われているようで、うっすらと獣道のように細い道が奥へと続いているのが分かった。

その先はおそらく魔女の館だろう。

うっそうと薄暗い森が続いている。

不気味な森だ。

光の加減の所為か、まさしく文字どおりに真っ黒な樹が所々生えている。

普通では有り得ない。

どう光が当たり、影が色濃くなるうと、樹が黒くなることはない……筈だ。

最も、ロルフもクルトも植物学者ではないから確かな事は言えないが。

「だが仕方ないだろう？　ここで引き返す訳にはいかねんだ。ガキの使いじゃあるまいし、『できませんでした』じゃ終わらねんだよ！」

そりゃその通りだ。

ロルフは兄の言葉に納得する。

しかし、理屈が理解できても感情と身体がついてこなかった。

「……」

無言のまま、足元を眺め続ける。

ただいたずらに時が過ぎるのを乞う。時が全てを解決してくれる気がした。何もしなくても、何かが起こる。

こちらから動かずとも、向こうから何かがやってくる。

そんな気がした。

ただの気のせいだが。

「行くぞ」

兄の言葉に身体が勝手に硬くなる。

あれだ。

いくら大人だからといっても無理なものは無理だ。出来ない事はできないし、更に付け加えるならばやりたくない事はどうあってもやりたくない。

しかしそのやりたくない事を無理矢理する強がり、大人を大人しめるたった一つの根拠かもしれない。

が。

無理無理無理。

いくら大人といえど、出来る強がりと出来ない強がりがある。

ロルフにとって、これは出来ない強がりだった。

みつともなくても構わない。無理はものは無理。

唯一兄の失望が心残りだが、仕方ない。例えるならば兄に「死ね」と言われて死ねないのと同じだ。

絶対に無理なものは無理。

「……」

ロルフは無言でブランコに腰掛けた。

横に三つ並んだブランコの真ん中の物は、どういう訳か一回り大きかった。大柄なロルフでも楽に座れる程に。

余程体格の大きな子供が居たのだろうか……そんな訳ないか。二人乗り用？……危ないな。

そんなどうでもいいことがロルフの頭をぐるぐる回る。

体格が大きい割に、ロルフはどちらかというと内向的な性格だ。

考えが煮詰まると逆に開き直り、なにかしらの行動に移す能動的なクルトと違い、ロルフはどこまでも受動的である。

自分一人では出来ない事がある。誰がなんと言おうと、世の中にはそういうものが絶対にある。

それにぶち当たった時、どうするのか。

一人ではどうにも出来ない。どうしようもない。そんな八方塞がりな、絶望的な状況。

そういう時、ロルフはどうするのか。

簡単だ。

ひたすら待つ。

誰かが、何かが起こるのをひたすら待つ。

無論常に物事は都合良く、ロルフの良いように運ばない。運びはしないが、事態が動けばそれで良かった。

後はどうとでもなる。だって、自分には兄が居るのだから。

自分と兄の二人がいれば、なんでも出来る。

これまで常にそう二人でやってきた。それで上手くいつている。だから、ロルフはこのやり方に疑問は持ったことがない。

それはまあ、ちょっとだけ情けないかな、と思わない事もないが、構わない。結果が全てだ。

と、ここだけはカッコつけて結論づけるロルフだった。

「……仕方ない奴だな、お前は」

深く息を吐いて、クルトは呆れた調子で言った。

「ここで待つてろ。暗くなる前には戻るようにはするが、暗くなったら明かりを頼む。俺はお前の明かりを頼りに帰って来るからな、絶対に絶やすなよ」

すたすたと、既に歩き出しながらクルトはロルフに指示を出した。

「うん、分かった」

少し顔を上げ、空を見た。

まだまだ明るい。日が暮れるまで十分に時間はある。

「うん言つな」

「はいはい」

「はいは一回！」

母親のような小言に鬱陶しさを覚えるより、ロルフは安堵した。

クルトの機嫌が直った証拠だ。機嫌が悪いなら一々注意はしない。

「それじゃちよっくら行つてくるぜ」

「よろしく」

「ああ、任せとけ」

兄は頼もしく頷き、森の奥へと入っていった。

くらいくらい、森の中に。

「……ここか」

今回の仕事は簡単だ。

クルトは胸の内で繰り返す。

ここまでの道すがら、ロルフにも同じ事を説明した。

呪術なんて訳の分からん物をかけられたが、仕事そのものは単純だ。

森に住む人間のサインを貰ってくる。

それだけだ。

それ以下でもそれ以上の難題ではない。

特殊なペンや紙に書いて貰う必要はない。なんでもいい。とりあえずサインを貰えれば、それでいい。

クルトの目の前には真っ黒な大樹があつた。本当に大きな樹だ。樹齡は何千年とあるだろうか、クルトには想像もつかない。その樹を中心に森は開けていた。上を見上げればぼっかりと穴が開いたか

のように、真っ青な空がのぞいている。緑で覆われた額縁の中に収められた一つの絵画のようでもある。

その樹の中が魔女の館らしい。根本に大きな扉があった。扉の横には呼び鈴を置いた台がある。

どこにでもありそうな、ごく普通の呼び鈴だ。真っ黒な台の上にちょこんと乗っかっている。

「……」

手に取る事を、クルトの何かが押しとどめた。

にゃあ

気づけば黒猫が足下にすり寄っている。

黒猫。

魔女にお似合いだ。

……気味が悪い。

身体が硬くなる。

ロルフの気持ちは、よく分かる。クルトだってそうだ。仕事でなければこんな所一瞬たりとも居たくない。だが、一旦仕事を引き受けた以上最後までやり遂げるのが大人のルールだ。

ロルフに見せつけてやらなければならない。だって自分は、兄なのだから。

こほん

わざとらしい咳。

誰が見ている訳でもないから、取り繕う必要などないのに。

違う。

クルトは一人かぶりをふった。

己に取り繕う必要があった。誰よりもまず先に、まず己にカッコつけなければ。そうしなければ、クルトは先に進めなかった。

「……行くか」

猫を丁寧に避け、クルトは呼び鈴に手を伸ばす。

「イルマっ!」

誰かの名を呼ぶ声と同時に勢い良く扉が開いたのは、クルトの指先が呼び鈴に触れる前だった。

「っ!」

扉はクルトの方に向かって大きく開いた。かすりもしなかったが、その勢いの良さに身体がびくつく。

「さっきは悪かったって馬鹿猫！ もう機嫌直せって、って？」

どーんと、勢い良く扉を開けたのは若い女だ。

質素な黒のローブを身につけている。頭には大きな黒の三角帽子。手には箒も持っている。

魔女だ。

どこからどう見ても魔女スタイルだった。

「……誰？」

女は帽子のつばを引き、顔を隠しながら短く尋ねた。

真っ白な髪以外、三角帽子で隠れ、女の顔はよく見えない。

身長はちょうどクルトと同じくらいで、女性にしては高い身長だ。辛うじてクルトの方が女を見下ろせた。

「……この人間か？」

逆に問い返せば、女はむっとしたようだ。

「それ以外に何に見える？」

顔を隠すようにしていた帽子をぐいと上げ、真っ直ぐにクルトを睨め付けた。

女の顔があらわになる。

綺麗な顔だ。街の女達よりもずっと、クルトの脳天を直撃した。

目筋が整っているのは当然として、目を引きつけたのは目だ。

蒼と紫の色違いのつぶらな瞳。強い意志の輝きがある。

金持ちの人間がファッションの一つとして眼の色をいじるのは珍しい事ではない。クルトも何人か見た事がある。あるが、そのどれもが薄っぺらい色だった。目の前の女のような、鮮やかな色は見た事がなかった。

「何に見えると聞いている！」

女の苛立った声でクルトは我に返った。怒っていても可愛らしい声だ。

「あー、えーと、そうだな……」

「どうした？ 早く言え」

女は何か期待している。わくわくと目を輝かしていて、まるで大きな子供だ。

「……」

居心地悪く、クルトは目を女からそらした。真っ直ぐに見てられない。なんだかひどく恥ずかしかった。なんではよく分からない。いや、女の真っ直ぐ過ぎる目が悪いのだ。かっかっかと身体が火照

ってくる。今なら口から火だつてはき出せる。それは言い過ぎ、嘘です、すいません。

くるくると思考は空転する。

サインを貰ってくるだけ。仕事はそれだけなのに。

クルトの口は動かない。

黙ったまま、ちらりと再びそらした目を女に戻した。

「？」

女は真っ直ぐにクルトを見ていた。

見られている。

あの蒼と紫の瞳が、真っ直ぐにクルトを見つめている。

見つめられている。

そう意識した瞬間。

「じゃ、そういう事で！」

クルトはくるりと女から背を向け、急ぎ足で来た道に戻り始めた。

にゃあ

猫の鳴き声が出た。どこか呆れているような響きがあったが、考

えすぎだろう。

この身体の火照りも全部が全部、気のせいだ。急に走り出したせいかもしれない。そう、クルトはいつの間にか走り出していた。己でも気づかぬ内に、何故か走り出していた。

「くそ、くそくそくそ！」

クルトは目に見えない、なにかに追い立てられるようにして、森の入り口まで走った。

走り続ける。

身体にしつこく纏わり付く、原因不明の熱を振り払うかのように。

「くそ！」

「……」

女は無言のまま男が立ち去った後も戸口に立ち、男が去った方向を眺めていた。

「なんだっ たんだ？」

女の呆然とした呟きに答える者はいない——筈だった。

「さあねえ？」

黒猫が答えた。

優雅に己の前足で頭をかきながら、黒猫はどうでもよさそうに答えた。

「ま、どうでもいいんじゃない？ 用件も言わないで帰っちゃような奴、こっちからじゃどうしようもないでしょ？ 用があったらまた来るわよ」

「無かったら？」

「二度と来ないわね。いいじゃない、それ。静かに生活できて」

女は猫の気楽な言葉に顔をしかめる。

「それは、困る……」

「どうして？」

「だって……最近はお前以外の顔見てないし、そんなのつまらないだろ？」

「アタシにとつてはどうでもいい事ね。アンタが愉快に暮らそうが一人寂しくひっそり暮らそうが、とりあえず生きてさえくれればアタシはどうでもいいの」

「……人はつまなら過ぎて死ぬ事もできるんだぞ」

「ちょっと、そんなデカイ図体して拗ねるのやめてくれない？ すごくイライラするわ！ 何よ、そんなに気になるのなら追っかけてみればいいじゃない！ ついでにアタシ以外の顔も拝んでくればいいじゃないの！」

「っ……」

女は黒猫の言葉に居心地悪げに身じろぎした。

「この根性ナシ！ 一人じゃ街にも降りられないなんてどこのガキよ！」

「う、うるさい！ ま、魔女様にできない事はない！」

「フン、よく言うわね。さっきも魔法失敗した癖に」

「あれはお前の気合いが足りないんだ！」

「はいはい、その何でもアタシの所為にする癖、いい加減直しなさいよ。アタシは常日頃アンタの傍に居るんじゃないんだから」

「……」

自らの使い魔に軽くあしらわれ、若い魔女は沈黙した。

やがて。

「……分かった」

若い魔女は決意する。

「これから街に行ってくる。街に行つて、さっきの男を捜すついでに買い物もしてくる」

要するにただの買い出しなのだが、魔女はまるで重大な使命を告げるかのごとく深刻な顔をして使い魔に命じた。

「だからば様の買い物リストをここに持ってこい。私は着替えてくる」

「はいはい」

黒猫は気怠げに返事を返し、さっさと自らの仕事を果たしに行つた。

若い魔女は満足げにその後ろ姿を見送ると、自らも着替える為家の中に戻っていった。

こうして、森の魔女は街に降りる支度を始める。

魔女が街にとってどういう存在に成り下がったか。そんなことちつとも考えずに新米魔女は街へと繰り出す。

それがどんな騒動を引き起こすかなんて、やっぱり何にも考えずに新しい魔女は、

「……なに着ていこうかな」

なんて実に女の子らしく、お出かけの服を心を躍らせ、頭を悩ませながら選び始めた。

彼女の名はエーファ。

先代魔女が亡くなり、新たに森の魔女を継いだ新米魔女である。

それを知る者は、まだ誰も居なかった。

今はまだ。

「どう、これ？」

くるりと、エーファは床に寝そべるイルマの前でくるりと一回転して見せた。

「どうでもいいわ」

イルマは冷淡に感想を述べた。

「……ふんだ」

不満げに鼻を鳴らし、エーファは自ら鏡の中の自分を眺めた。

エーファだつて女の子。自分を可愛く見せるのは嫌いじゃない。おまけに街にはエーファの大好きな人がいる。気合いが入らない筈がない。

老人のような真っ白な髪はエーファ自身嫌いだから、茶色のつばのある帽子に詰め込んでなるだけ隠す。髪の色を染めるのは魔女の主義に反した。だから染めはしないが、嫌いな物は嫌いだった。

白いシャツに茶色のスカートを合わせ、足下には黒のパンプス。シンプルな装いだが、それがエーファをお上品に見せていた。黙っていれば良家のお嬢様に見えない事は無い。

「そんなに悪くないよな？」

鏡を入念にのぞき込みながら、エーファは再びイルマに尋ねた。

「流行には激しく乗り遅れた、田舎のお嬢様スタイルね」

適当にだがイルマは答えた。

「流行ってなんだ？」

「田舎のお嬢様には縁の無いものよ。いいじゃない、アンタ顔の作りだけはいいんだから、ナニ着たって結局は似合うのよ。気にしないでいいわ」

「そ、そう？」

滅多にない相棒からの賛辞にエーファは顔をほころばせた。

流行とは何か分からないままで、おまけにイルマが言った事は一つも分からないが、とりあえず貶されていないのは分かった。

それだけ十分だ。なにせイルマからは誉められた事など一度もなかった。

「そうそう。だからさっさと行ってきなさい」

気怠げにイルマは起き上がり、大きくのびをした。

「アンタが出かけるならアタシものんびり過ごせるわ。早く行きなさいよ。で、暗くなる前にはちゃんと戻ってくるのよ？」

「分かってるって！」

「はいはい、行つてらっしゃい」

「行つてくるよ！」

何故かけんか腰でエーファは背を向けた。最後に忘れ物はないかと確認して、エーファは外に出る。

「それじゃ行つてくる」

「二度も言わなくていいわよ」

「ぐっ……」

あくまで冷淡なイルマにちょっとだけ傷つきながら、エーファは大きく一歩踏み出した。

館から出るのは久しぶりだった。街に行くのはもつと久しぶりだ。それも、自分から、誰に強制された訳でもなく自主的に行くのは。

「……あ、そだ」

何か思いついたらしい。

くるりと、エーファは後ろを振り返った。

「折角だからお土産持つて行こ。うんうん、何がいいかな」

そしてそのまますたと、応接間を横切つて奥のドアを開け、調理場兼実験室兼居間へと入る。

魔女の館はやたらと広い。エーファ一人とイルマー一匹で暮らすには十分過ぎる程に。先代魔女がいなくなってからは尚更その広さを痛感する。

「あいつら何が好きだったっけ？」

イルマに尋ねてはいるが、エーファはあいつらの好物をよく知っている。ごそごそと、食料庫から目的の物を探す。

「クパの砂糖漬けならもう無いわよ」

イルマが面倒くさげにだが、食料庫の上に飛び乗って言った。

クパの砂糖漬けとは、クパという花の花片を砂糖漬けにしたお菓子だ。どこにでも生えている花で、家庭によってそのレシピが違う——のは昔の話だ。現在ではあまり見かけなくなった、古くさい菓子の一つだ。

しかしあいつらはこれが好物で、エーファの好物でもあった。

「へ？」

「アンタがこの前食べたので最後。だからそろそろ作つとけば？つて言ったのに。っていうかあ、さっさと行きなさいよ鬱陶しいわね！」

「っ」

「怖じ氣ついてんじゃないの！　ほんと鬱陶しいわねアンタ！

いい加減にしなさいよ！？ クパぐらいどこにでも売ってるわよ！
良い機会だから他の味も食べてみたら！？」

「うつ……そ、そんなに怒鳴らなくても良いじゃないか」

イルマの剣幕にエーファはたじろいだ。

エーファ自身分かっている。これはただ単に嫌な事を先延ばしにしている、ただの幼稚な行為だということを。勿論お土産を、折角だから手土産を何か持って行きたいというのはエーファの本心である。本心ではあるが、それなら街で選んでもいい。普段からあいつらの所へ行く時のお土産はクパの砂糖漬けと決まっているのだからたまには、こういう時なら街で適当に見繕ってもよかった。

「……」

俯いてエーファは唇をかみしめた。

それをしないのは街が怖いのだ。

街自身に、街の人間になにかされた訳じゃないけれど、エーファは街が苦手だった。

その理由は自分でもよく分からない。分からないまま、エーファは一人になった。

「……ねえ、イルマ」

「ついて来て、って言うなら却下よ」

か細い声を俯いたまま上げるエーファに対し、イルマはどこまでも冷淡だった。

「……」

ぐさりとお願いしたい事を当てられ、あまつさえにべもなく断られ、エーファは言葉を失う。

「ただ、そうねえ、今日の晩ご飯からアタシのご飯に、アタシが言う物を用意できるなら、付き合っただけでもいいわよ?」

優しいイルマの声にはっとエーファは顔を上げた。

黒猫は魅惑的な笑みを浮かべ、まさしく天使のように慈愛に満ちた笑みで悪魔のような提案をする。

「魔女の名にかけて誓いなさい。そうするなら街に付いて行ってあげる。勿論今日だけじゃなく、可能な限りね」

「……本当に?」

「本当。なによ、自分の使い魔が信用できないの?」

信用できない!

「……」

率直には言葉にできず、エーファは視線をイルマから外した。

なにか裏がありそうで怖い。イルマはいつだってエーファに優し

くなかった。

魔女の名にかけて誓う、それは指切りげんまん、のような軽い約束事ではない。絶対に守らなくてはいけない誓約で、守れぬなら魔女としての資格を失ってしまう。

果たして魔女の資格を失ったらどうなるのか、エーファは知らなかったが。

「そんなに悩む事じゃないでしょ？ アンタが困る事はアタシが困る事なんだから。ねえ、アタシ達は一蓮托生だもの。そうでしょ？ 魔女と使い魔ってそんな関係よねえ？」

「……それは、そうだけど」

「だったら早くしなさいよ」

イルマの声に若干の苛立ちを感じ取り、エーファは覚悟を決めた。

「分かった、やる」

魔女と使い魔は一蓮托生。魔女が死ねば使い魔は死ぬし、使い魔が死ねば魔女は死ぬ。

それは事実だ。

だから、結局の所イルマはエーファに無茶難題を吹っかけるのは無理だろう。エーファの身に危険が及ぶのは即ちイルマに及ぶ危機だった。

わざわざ自分が危なくなるような真似はしない……だろう、と、
エーファは納得する。

少しだけ、違和感を感じながら。

「嬉しいわ、これからよろしくね」

極上の笑顔でイルマは鳴いた。

「それじゃ早速始めましょう。早くしないと日が暮れるわよ?」

「……私、魔女エーファはエーファの名においてイルマとの約束を
違えません。誓います」

胸に手を当て、エーファは魔女の誓いを行った。

誓いとはこれだけ。

誓いは己自身に課すもので、他の誰かは騙せても己だけは騙せない。
い。

「よく出来ました」

満足げにイルマは目を細める。そんなイルマを不安げにエーファ
は見上げていた。

「なあゝに、その顔? 信用ならないって顔ね。心外しちゃうわ」

「……いや、そんな事はない。行こうか。日が暮れる」

使い魔を信用できないって、自分は駄目な主なんだろうか？

エーファは一人、誰にもきけない事を胸の内であめく。

他の魔女をエーファは見た事がなく、先代魔女の使い魔は何故か一度も見えた事がなかった。だから魔女と使い魔の関係というものがよく分からない。

現在のこの関係はどこおかしいんじゃないか。そうは感じるものの、だとすれば適切な関係とはどういうものか、全くエーファには思い描けない。だとすればこの関係は間違っではないのかも。十人十色って言うし。

そんな不毛な考えばかりが胸の内をぐるぐる回る。

回ったが、

「そうねえ、早く行きましょうか。日が暮れてしまっわ」

「うん」

イルマの一言でエーファは思考を切り替える。

ぱんぱんと自分の頬を両手で叩き、気合いを入れる。

「それじゃ行こう。まずは買い物しなきゃね」

「了解」

しゅった、っと、軽やかにイルマはエーファの足下に舞い降りた。

なんだかんだ色々思っ事はあるものの、やっぱりその姿は頼りになる。

「……よろしくね」

「任せなさい」

それは頼もしく、イルマは任された。

久しぶりに訪れる街はどこかしこも変わっていた。

まず見慣れない建物が増えた。行き交う人の姿も、ここは異国かと思うほどに見慣れない格好の人間が多い。まるで全く知らない街だ。

「……はあ」

エーファは小さくため息をつく。

この街を自分の街だと感じた事はなかったが、なんだか寂しい。独り取り残されたような、そんな寂しさがエーファを襲った。

折角街に出て来たのだから昔よく行った店を一通り回ろうかと考えていたが、あの店はちゃんとあるだろうか。少し不安になる。それでもし跡形もなくなっていたら立ち直れない程ショックだ。だったらまず先にあいつらの所へ行ってから打ちひしがれるのが良いかな、とも思うが、駄目だ。

今のエーファは手ぶらで、手土産を持ってない。手ぶらで行っても、顔を見せるだけで向こうは喜んでくれるだろうが、それではエーファの気が済まない。だって向こうはいつも何かしらの手土産を持ってきてくれる。滅多に街に降りないエーファに代わるように、洗剤等のちょっとした生活必需品から果ては洋服まで。今着ている洋服も全部あいつらからのお土産だ。

だから、絶対に何か贈り物をしたい。

こちらから訪ねる時は、尚更。

「さあて、まずはどこから行くの？　ここからだが一番近いのはあの子達の所だけど、どうする？」

イルマの問いに、エーファは改めて決意を固めながら答えた。

「まずはお土産買いに行く。どこか良い店知らない？」

「ナニにするかにもよるわね……まあアンタのセンスで物選ぶなら食べ物にしたい方が無難だと思うけど」

「どういう意味だよ」

「そのままの意味よ。アンタの趣味は独創的。悪いってレベルじゃないのよ。貰う方が可哀想だわ」

「う、そんな事ないと——」

言いかけてエーファはやめた。

以前、だいぶ昔だったが、普段のお返しだと思って自分が可愛いと思った小物をプレゼントした事があった。その時の反応と言えば……。

「まあ、うん。今日は食べ物の気分かな」

「いつもその気分で居る事ね、困らせたくなかったら」

イルマの辛辣な言葉をあえて気にしないようにして、エーファは己を鼓舞した。

「それじゃ行こう！　おー」

「はいはい」

一人と一匹は周りの注目など全く気にも留めず、目的地に向かって出発した。

その場を見た者で若い者は、猫に一方的に話しかける可哀想な女性がいると単純に考えた。

一方で、昔からこの街に居る者は顔をひどく歪めた。

「魔女が……今更何の用だ」

「何も起きなければいいけどねえ」

「今更奴らに何ができるっていうんだ？」

「気にする必要なんかないさ。この町で魔女を知る者ももう少ない……奴らは忘れ去れていく存在なんだ」

イルマの案内でエーファが訪ねたのは、昔から何度行ったことのあるお菓子屋さんだった。

先代魔女もここのお菓子が好きで、たまに使いに走らされた記憶がある。

「……」

じー、と、ひどく緊張した面持ちでエーファは入り口近くに立っていた。イルマはのんびりと店の横で、邪魔にならないような場所で寝そべっている。

「……早く行きなさいよ」

「うー……」

イルマにせっつかれ、エーファは唸る。

あと一歩で、あとほんの一歩で入り口への扉の取っ手に手は届き、引くか押してかして店の中へはいれるだろう。

店に入ってしまったばこっちのものだ。店のお姉さんがなにもかも面倒を見てくれる。幸いにして店の中には他の客はいない。一歩進んで扉を開き、店の中に入ってしまったば、もう大丈夫。他の客の用事が済むのをうろうろしながら待つ必要もないし、順番を気にする必要もない。

だから、チャンスだって、言ってるだろ。

「……」

そんな誰かの声が聞こえてきそうで、エーファは正気を保つ為に

頭をぶんぶんと振った。

うだうだ考え続けるだけでは駄目だ。行動しないと、何も進みはしない。とりあえず、動かないと。前進でも後退でもいい。それはまあ、前進の方が響きのにも良い感じだが、多くは望むまい。

まず動く。

それからだ。

前進も後退も結果にしか過ぎない。結果が大事なのではない。過程こそが重要。それが魔女の教え。

「……ふう」

大きく深く深呼吸。

気を静める。

久しぶりの街のせいか、ひどく緊張しているらしい。思うように身体が動かない。本当ならばもう店の中に入って、それとあれとか、ああこれもやっぱりいいな、なんて品定めしている最中なのに、現実では店の中にすら入れていない。

（ただ緊張してるだけなんだ、そう緊張してる！ 何故かというところ街に降りてきたのは久しぶりだし、ばば様もあいつも居ないなんて初めてだし、イルマは頼りにならないし！！ そう、緊張してるのは街に降りてきた所為）

緊張の原因は街に降りてきた事にして、エーファは己を鼓舞する。

していたところ。

「ねえ、なにやってるの？」

「!?!」

後ろからかけられた声によって、エーファの奮い立たせていた根性はあっけなく霧散した。

「そんな所でなにやってるの？ このお店に用事じゃないの？」

「……」

エーファは無言のままイルマに目をやった。

イルマはそしらぬ顔で気持ちよさそうに寝そべったままだ。

今日は天気もいい。ぽかぽか陽気で、昼寝にはもってこいだろう。

うらやましい限りだ。

「ねえってば。あなたここじゃ見ない顔ね？ 新しく引っ越してきた人？ でもそれにしては随分と古臭い格好ね。あ、ごめん馬鹿にしてる訳じゃないの。ただ珍しくて。すごく似合ってるけど、でも随分と古びた感じのファッションだから」

イルマは欠伸した。

エーファの熱心の視線をものともせず。

「……」

さて、どうしようかとエーファは一生懸命頭を働かせる。

まずは状況確認だとちらりと後ろを窺うと、そこには可愛い女の子が立っていた。

年はエーファより少し年下、十八、七ぐらいだろうか。栗色の髪は肩辺りまでのばされ、ふんわりカール。白のリボンがワンピースの真つ赤なカチューシャをさしている。つぶらな瞳は緑色できらきらと好奇心で輝いている。色鮮やかなチェックのワンピースに、白い半そでのベスト。足元は茶色の革のサンダルが涼しげだ。

「ねえってば。なにか言つてよ。これじゃあたしが一人で喋って馬鹿みたいじゃないの」

「ですってエーファ。なんか喋ってあげたら？ いい加減にしなさいよね」

イルマがようやく助言したが、全く当てにならなかった。

んなことができたらくくにやっている。

エーファは内心地団太を踏んだ。

「可愛い猫ね。あなたの猫？」

女の子は突然喋りだした猫に驚く様子もなく、イルマの傍に行き撫でようと手を伸ばす。

「アタシをそこら辺の猫と一緒にしないで頂戴。っていうか触んないでよ」

「イルマ」

しゃあと牙をむきかけたイルマをエーファはたしなめる。

女の子は呑気に笑った。

「イルマって名前なの？ かつこいい名前ね」

なでなでなで。

女の子は無遠慮にイルマを撫で回す。イルマはすごく嫌そうな顔をしているが、逆らわなかった。

「あたしはリサ。で、あなたの名前は？」

「……エーファ」

イルマを撫でながら自己紹介をし、たずねてきた女の子に、ようやくエーファはまともに答えを返した。

一度喋ったらぺらぺら喋れるようになるから不思議だ。

エーファは先程まで何も言えなかったのが嘘のように、ぺらぺらと一気に喋る。

「その猫はさつきも言ったけどイルマ。魔女様の相棒で、そんじょ

そこらの猫とは違う、口は悪いけど頼りになる相棒。で、私が魔女――」

「魔女？ 誰が？ もしかしてあなたが？」

女の子――リサは驚いたようにエーファの言葉を遮り、振り返って聞き返した。

「本当に？ あなたがああ魔女？」

「……まあ、正確にはちょっと違うけど」

何度も聞かれると自信をなくす。

忘れかけていた事実が頭の奥底から蘇る。

「そうなの？」

「うん。ええと、継承の儀式っていうものがあるんだけど、それとちゃんとやる前にはば様が逝っちゃったから、まあ正確には一人前の魔女じゃないってことになる」

リサの質問攻めによって思い出される。

自分はまだ魔女ではないのだと。

魔女に連なる者ではあるが、まだ一人前の魔女ではない。正式な魔女では、なかった。

「継承の儀式！ いいわね、素敵な響きだわ！」

リサは立ち上がり、エーファに詰め寄った。

「ねえ、あたしギルドやってるんだけど、どう？　あたしのギルドに入らない？」

「へ？」

「ギルド『ヴォルグ』っていうの、知らない？　この街唯一のギルドなのよ！　どう、すごいでしょ？　あたしはそのマスターなの。いまちよつと団員が少なくてね、絶賛団員募集中なのよ。どう？　あ、誤解しないでね、あやしいもんじゃないわ、別に入会金とか登録料とかそんなの取らないし、超良心的なギルドなのよ！　他の街じゃ考えられないんだから！！！」

リサは腰に手をあて胸を張ったが、エーファには全くそのすごさが分からなかった。

たくさん力説してくれたが、そのどれもが今ひとつ分からない。

ギルドって何？　団員？　入会金とか登録料って何？

エーファの頭の中にぐるぐると聞き慣れない単語が回る。

助けを求めてイルマを見たが、イルマは素っ気ない。身体を丸めて寝ている。

どうすればいいのか、エーファは困った。

何か言わなければ。また黙りは嫌だ。もっとちゃんと話したい。

でも冷静にかえりみれば、エーファは今まで見知らぬ人間と、それも同年代の女の子とこれだけ長く話したのは初めてだった。

相手の話が全く理解できなかった場合の上手い切り返しを、エーファは全く思いつかなかった。素直に「意味が分からないんですけど」言えたらそれが一番かもしれないが、目の前の少女が落胆する様は見たくなかった。

だからそれはナシの方向で。

もうちょっと頑張ってみよう。さあ、がんばれ自分。

頭を悩ますエーファに助け船が出たのは、頼りになるイルマでもなんでもなくて、全く別の所からだった。

「お客様」

声は涼しげだったが、微かな苛立ちがその声には含まれていた。

「どうぞ、店の前での立ち話もなんですし、どうぞ店内へお入り下さい」

店員のお姉さんが店の扉を開き、エーファとリサの二人を案内した。

「ああ、すいませんどうも。あたしっいたらつい夢中になっちゃってそっぴやエーファちゃんは何買いに来たの？」

「手土産を、ちょっと」

エーファちゃんなんて初めて呼ばれた。

エーファは胸が何故か高鳴るのを感じ、どきまぎしつつ答えた。

「昔から好きな店なんだ」

「あたしも！今日はね、おやつを買いに来たの。ここのお菓子ってどれも美味しいのよね」

「ありがとうございます」

店員の形式的な返礼を笑顔でやり過ごしながら、リサは店の奥へと入っていった。その後を軽く頭を下げ、エーファが追う。

今のエーファの頭の中には何故街に降りる事になったのか、その原因を作った人物の事がすっぱりと抜け落ちていた。今エーファの頭の中にあるのはあいつらへのお土産と、先に店に入って手招きしている少女だ。昼過ぎにイルマを追いかけて扉を開けた先に突っ立っていた男の事など、エーファはすっかり忘れ去っていた。

「ねえねえ、どれにする？あたしのオススメはこれかな？」

わあ、美味しそう。

なんて胸の内では思ってもやっぱり声には出せずに、エーファは無言のままリサの指さすケースをのぞいた。

そこには赤、黄色、緑、青等、色鮮やかなゼリーのお菓子が並んでいた。暑いこの季節にはぴったりかも。

「じゅっくりじゅっ覧下さい」

店員の声を背に、二人はあれやこれやと店の中を見て回る。

店の外では黒猫が一匹、まどろんでいる。

おだやかな、午後のひとときだった。

「お久しぶりね」

柔らかな笑顔とともに出迎えてくれたのは見知った顔ではあったが、会いたい人ではなかった。

「……お久しぶりです」

ぺこりと頭を下げ、手土産を渡す。

小さいが暖かみのある家だ。小さな庭には花や野菜がちよこちよこと植えられ、可愛らしく咲き乱れている。

「これどうぞ……お土産です。口に合うといいですが」

少し気まずい。知人ではあるが、友達ではない。この人の旦那さんと娘さん達とは仲良くさせてもらっているが、彼女とは距離があった。エーファが勝手に思い込んでいるだけかもしれないが、しかしこの女性は一度も魔女の家に遊びに来た事はなかった。

夏になれば川遊びに、秋はキノコや山菜取り、冬には雪遊び。

森は遊びの宝庫だ。恵みも多い。昔に比べれば少なくなったそうだが、遊ぶだけなら十分な豊かさが森にはあった。

「まあままご丁寧に。今日はどうしたの？ ごめんなさいねえ、主人も子供たちも今居ないのよお。主人は仕事で、子供たちは学校。……あなたは、今何してるの？」

エーファの手土産を受け取りながら、女性はやや躊躇いがちに尋ねた。

「……修行中です」

エーファも俯いて答えた。

なんとなくだが、この人は魔女の事が好きじゃないんだろうと、そう直感していた。

はつきり言われた事はなかったが。

「魔術の？ 魔術は良いわよね、あたしもうちの子達に習わしてるのよ。今の時代、簡単な魔術なら学校でも教えてくれるのよね、あたし達の時代とは――」

「魔女のです」

大違いよ。

時代は変わったわね。

そんな言葉は聞きたくなくて、エーファは強引に遮った。

「魔法の練習をしています。魔術なんかじゃない」

「魔法って、あなた……まだそんなこと言ってるの？」

ちらりと女の人の反応をうかがうと、彼女は驚いたように目を丸

くしている。

「……」

何も言う気になれず、エーファは小さく息を吐いた。

街の人間が苦手なのはこういう所かもしれない。

昔、先代魔女のお使いで街に降りる時、エーファは好んで魔女の準正装の格好で降りていった時期があった。あの黒三角帽子、黒のローブ、箒の三点セットである。本当なら正装で行きたいぐらいの気合いが入っていたが、当時も含め現在でも正装は持っていない。まだ一人前の魔女ではないから。

その三点セットで街に行くと必ず誰かに声をかけられ、あれやこれやと聞かれたものだった。よく絡まれもした。それでどうにかされる程エーファは弱くなかったし、街の人間の中には助けに入ってくる奇特な人間もいたから大した問題ではなかったが、いつの頃からかそれが非常にうざったく感じ、嫌になった。

「魔法だなんて、あなた、これからは魔術なのよ？　魔法なんてもう――」

「忘れ去れていくかもしれない」

再び女性の言葉を遮り、エーファは彼女の言いかけた言葉を引き継いだ。

そしてうつむきがちだった顔を上げ、しっかりと女性の目をみて告げる。

「でも私は忘れない。魔女様は、絶対に忘れない」

失わせやしない！

胸の中で強く、叫んだ。

「気を落とすことないって！ エーちゃんは悪くない！ ちょっと感じ悪いわね、あのおばさん。あの態度はないわ！」

訪問を終え、今度はリサのギルドとやらに向かう途中の道で。

遠慮し、少し離れた場所でエーファを待っていたリサだったが、二人のやりとりはばつちし聞き耳を立てていた。だからあの女性のやや横柄な態度も見えていた。

「……アリサさんを悪く言うな」

反射的にリサを責めて、エーファはしまったと後悔する。八つ当たりみたいだ。いや、みたいな、じゃなくて立派な八つ当たりだろう、これは。だって自分は今落ち込んでいて、苛立っている。行き場のない感情を無様に吐き出した。

「ごめん」

しまったと思ったらすぐに謝る。取り返しがつかなくなる前に。

エーファの経験上、後に成る程謝りづらく、取り返しのつきようもなくなる。

あんな経験は何度も要らない。

「ううん、あたしこそ無神経な事言っちゃってごめんね?」

「いや、今のは私が悪い。悪かった」

「……えへへ」

てれたようなりサの笑顔を見ると、エーファはむずがゆい、自分じゃ良く分からない感情なのかどうかも分からない衝動におそわれた。

「……あはは」

どうにか全身かきむりたくなるような、みっともない衝動を抑え込んで愛想笑い。

アリサ・マルフォイ。

先程の女性の名前だ。

エーファの名付け親の男性の妻で、どうも魔女の事をうさんくさく思っている女性だ。

そんな彼女だから、エーファは正直あまり快くは思っていないが、しかし彼女は大好きな彼が選んだ女性でもある。嫌いになんかなれる筈がなかった。

「……」

リサはそれ以上何も言わなかった。ただ興味深そうにその緑の瞳は好奇心できらきらと、輝いている。

「……あの人は、」

説明する義理なんかないのだけれど。

でも別に話して都合の悪くなる事情でもないし。

いや、少しだけ恥ずかしいけれども。

でも、我慢して言おう。

あの子が知りたがっているからだけじゃない。

自分だって話したい。知って欲しい。

だから。

「私の名付け親の、奥さんなんだ。名前はアリサさん。マルタと口ツテっていう女の子が二人いる。その子達には魔術の才能があつて、アリサさんの自慢なんだ」

「魔術、ねえ。さつきも言ってたね、あの人も。そんなにすごいものなの？」

女の子は思いついた事をそのまま口に乗せる。

あつという間に話題はさっきの女性から魔術の事に切り替わった。

「あー……、私は、魔術をちゃんと勉強した事がないから、よく分からないけど……あれは、そうだな……」

言い淀むエーファ。

複雑な思いが胸を去来する。

話題が変わった事は良かったが、次の話題もエーファにとっては話しづらいものだった。

魔術。

それは新しき力。忘れ去られていく、魔女という存在と魔法とは大違いだ。

「まさに傲慢チキな人間共に相応しいものだわ」

言い淀むエーファに対し、先を歩いていたイルマはきっぱりと答えたが、リサには通じていないようだった。何の反応も示さない。

「……そもそも、魔法って分かる？」

それが分からないと話にならない。

イルマに「お前が傲慢チキとか言うな」と内心ツツコミを入れつつ、エーファはリサに尋ねた。

「とにかくすごい力！　って、感じ？」

瞳を輝かせてリサは答えた。

まあ、間違っちゃいない。

「うん。実際はそんなに万能なものじゃないけど、象徴としてはそんな感じ……かな」

本から得た知識や、先代魔女との雑談のような授業のような対話の中から学んだ知恵を思い出しながら、エーファは答えた。

「ねえねえ、それなら実際はどんな感じなの？」

リサは更にくいつく。

こういう話題は嫌いではないようだ。エーファは自分でも話せる話題が盛り上がっているのを感じ、ほっとした。

エーファにとって魔法や魔術の話は今日の天気について話すみたいなもので、好きとか嫌いとかそんな感情は入る余地はない。考えた事もなかった。

魔女にとつての魔法とは、そういうものだ。常に共にあり、時にはその存在を忘れてしまっても、ふと気づけば傍にいる。

そんな、存在。

「……」

なんと言ったらいいか。

エーファは弱った。

本で読んだ知識を披露するのは簡単だが、その知識は今ひとつ実感できていない、まるで言葉遊びだ。そんなあやふやなものを自分の知識として伝える事に、エーファは反発した。

「……ごめん、あたしばっかり喋って。言いにくい事だったらいいわよ。そういうのってぺらぺら喋ったら、やっぱりまずいの？」

「……いや、そういう訳じゃなくて、その、なんて言ったらいいかな……」

リサの気遣わしげな視線が痛い。

言いづらいのはただ単に自分の力量不足。勉強不足な上、表現能力不足。今まで一体自分は何を勉強していたんだろうか……エーファは勝手に落ち込んだ。

「そう？　なら良かった。あたしそういう話が大好きなんだけど、他の人はそうじゃないみたいだから、なかなか聞く機会がないのよね。駄目じゃないなら、良かったわ。これからいっぱい聞けるわね！」

「うん……そう、だね。努力してみる」

魔術はあまり詳しくはないが、この機会に勉強してみよう。

「よろしくお願いね」

リサの笑顔が眩しい。

本当に好きみたいだ。

エーファはこんな話題がここまで盛り上がるとは思ってもみなかった。今度会う時はもっと勉強して来よう。そう決意もあらたに、エーファは小さく拳を握る。

「ちょうど着いたわ。紹介するわね、ここがあたし達ギルド『ヴオルグ』の事務所よ！」

少し前に飛び出し、リサは古い建物の前に立ち、誇らしげに手でその建物を示した。

古い建物だ。

がっしりとした黒い色の建物で、時代を感じさせる。入り口は大きく、その横には狼を模った看板がぶら下がっている。

「……」

どうコメントしたのか。

握りしめた拳が力なく垂れる。

古い。古めかしい。

そんな感想しか思い浮かばない。せめてもうちょっと、ましな感想は無いものか。

助けを求めて足下を歩いていたらイルマに目を向けると、

「ぼろっちい建物ね。アンタの格好とおんなじ。苔臭いわ」

なおさらひどい感想を言った。

全くあてにならないイルマを無視し、エーファはリサが自慢げに指し示す建物を注意深く眺めた。

頑丈そうな、がっしりとした建物だ。横幅も他の建物と比べると長く、どっしり構えているようでもある。

「猫ちゃんは気に入ってくれた？」

「アタシの言葉通じてないみたいね、この子。魔法が好きな癖に才能ないのね、可哀想に」

リサをせせわらうイルマ。

かっとう頭に来た。

「イルマ！」

「？ どうしたの？」

イルマの言葉が分からないリサは、突然声を荒げたエーファを怪訝に見る。

「な、なんでもない……ごめん、大きい声出して」

イルマの暴言をわざわざ伝える事もない。

イルマを軽く睨みながら、エーファはリサに答える。

「そう？ そうは見えないけど……まあいいわ。立ち話もなんだから、さあ入って入って。見た目はぼろいけど、中は綺麗なんだから」

やっぱりぼろいんだ。

「それ謙遜だから肯いちやダメよ。自分で言うのは良くて、他人に言われるとムカツク事は多いんだから」

リサの言葉にエーファが頷きかけた時、イルマがそう、何故かすかさず忠告してくれた。

「……お邪魔します」

だから、必要最低限の挨拶の言葉を口にして、エーファは先に行くリサの後に続く。

どういうつもりだろう？

そう訝しげにイルマに目をやりながら。

「はいどうぞ」

リサはそんな一人と一匹のやりとりに全く気づかず、一人と一匹を歓迎した。

「ようこそ、ギルド『ヴォルグ』へ」

事務所の中は流石事務所というだけあり、天井も高く広かった。

入り口の近くに妙な機械の乗った台が一つ、数人がけのテーブルがいくつか。奥がオープンキッチンになっており、L字のカウンタ―席がついている。

「ナニよ、事務所っていうより食べ物屋じゃない……でも美味しそうな匂いね。今日の夕飯はここで良いわよ！」

イルマはケチをつけながらも上機嫌に鳴いた。お眼鏡にかなったらしい。

事務所の中は甘い香りが充満している。先程お土産を買いに行った店といい勝負だ。

事務所と食べ物屋。世間知らずなエーファにはそれぞれの特性も、その二つの違いはよく分からなかった。

「やあ、おかえり。随分遅かったね。待ちくたびれちゃったよ」

奥のオープンキッチンの中に男性が一人立っている。

室内なのにチェック柄の帽子を被った、すらりとした長身の男性だ。薄い灰色のシャツに水玉模様のタイが合わされている。

リサの兄だろうか？ 顔立ちがよく似ている。リサよりずっと大人びた感じが。

「ただいま、お兄ちゃん。みてみて、この子魔女のエーファちゃん。期待の新人よ！」

リサは一直線に男性の元へと駆け寄った。

エーファもその後続く。

「お客様の間違いでしょ？ ダメだよ、誰彼巻き込んだじゃ。またひどい目みたいのかい？ あの時は大変だったよねえ、リサ君？」

「んもう、そんな昔の事は忘れてよお兄ちゃん。過去は過去、今は今！ 私達は新しい伝説へと向けて出発よ！！」

「ねえ、君。エーファさん、だっけ？ うちの馬鹿が迷惑かけてるみたいだね。いいんだよ、こんな馬鹿ほっといても」

全く懲りていない様子のリサに、男は矛先をエーファに変えた。

「……」

話が全く分からないエーファはなんと答えようがない。俯いて黙っていると、

「ああ、ごめんね、僕らばかり喋って」

その謝り方はリサとそっくりだった。

ほっとして顔を上げると、そこには不満げな顔したりサと、穏やかに微笑む男性がいた。

「事情は分かっているかい？ 君は今、君の人生における輝かしい時間の一部を無駄遣いするかもしれないかの瀬戸際なんだよ。君はとても可愛いから忠告しておくけど、関わらない方がいいよ。間違いない時間の無駄だから」

「お兄ちゃんは何にも分かってない！」

リサが大声を上げる。

「この子は本当に魔女なんだから……！」

正確には魔女見習いです。

即座にツツコムが、声には出せない。

「今までとは違うの！ 本物の魔女なんだからね……！」

「だったら尚更でしょ？ お前は魔女がどどういう者か、知ってるのかい？ お前の大好きな冒険ものには全く縁の無い人達なんだよ」

ぼうけんものってなんだろう？

そんな疑問が顔に出たのか、

「まあともかく、リサ。君はいつまでお客様に立たせたままでもいいさ
せる気なんだい？ こっちに来て座って貰ったら？ お茶ぐらいは
出すよ」

リサのお兄さんが手招きした。

イルマはにやあと猫らしく鳴き、お兄さんの元へと走った。

イルマは無類のいい男好き。彼はイルマのお気に入りになったようだ。男のごろごろと喉を鳴らしている。

「可愛い猫ちゃんだね」

よしよしと、男はイルマを撫でた。

ごろごろと、イルマは身体をよじり、お腹まで男に見せつけた。

「……」

私にはいつだってあんな風には甘えないのに。

エーファの中で一方的にやきもちが起こる。

例え嘘でも演技でもなんでもいいから、あんな風に甘えられてみたい。思いつきり甘やかしてやるのに。

「名前はなんて言うの？」

「……イルマ」

ついぶっきらぼうに答えてしまった。

その瞬間、イルマと目が合った。

——だからアンタはガキなのよ。

その冷めた瞳はそう言ってるみたいで、エーファははっとして、落ち込む。

「？ どうしたの、エーちゃん？」

項垂れながらカウンター席に座るエーファに、リサが不思議そうな顔でよく。

「……なんでもない」

説明なんかする気にはなれなかった。

自分の醜態を自分の口で説明する気になんかならない。それが子供だっていう事かもしれないが、ならないものはならない。

「飲み物はどうする？ お茶でもいいかな？」

「……ありがとう」

「どういたしまして」

男は柔らかに微笑んで、イルマから手を放して立ち上がった。

「自己紹介がまだだったね。ボクはエルヴィン。この店を任されている」

「事務所！」

すかさずリサが訂正を入れたが、エルヴィンはさわやかに無視。

「狼の看板がぶら下がっちゃってるからよくいかつい雰囲気のお店だと勘違いされるんだけど、そんな事ないから。また気軽に来てよ。お茶ぐらいはいつでも出せるからね、歓迎するよ」

「こ・こ・は、ギルド『ヴォルグ』事務所です！」

尚もリサはギルドの事務所という事に拘る。

そんなリサに、エルヴィンは少しでも妹の面目を立ててやる気になったらしい。お茶の用意をしながら、ギルドとやらを語った。

「まあ、なにか困った事があれば妹に相談するといいよ。ギルドのマスターはリサだし、行動力と突飛もない思いつきだけが取り柄の奴だから、なにかしら面白い事になると思う」

「ずばつと解決してみせるわよ！　なによ、面白い事って。どういう意味よ？」

「そのままの意味だよ。まあ本人にはそういうの、中々実感できないのかもね」

リサに答えながら、エルヴィンはお茶を入れる。

こぼこぼこぼ。

大きなティーカップにお湯が注がれる。いい香りがエーファの鼻を刺激した。

「つまり、自覚がないって事ね」

イルマがエルヴィンの足下でくつろぎながら言う。

「いいわね、アンタと一緒にじゃないこのお嬢ちゃんも。いいお友達になれるかもね」

「お友達？」

「そう。オ・ト・モ・ダ・チ」

嫌みつたらしくイルマは一音一音くつきりと発音した。何故ならお友達という単語は今までのエーファには縁のない言葉だったからエーファの名付け親である男の娘達とは仲が良いが、あれは妹達みたいなものだ。友達とは違う。

「なにが友達なの？」

リサが隣に座りながら、不思議そうに尋ねる。

イルマの言葉が分からない者には、エーファはただ独り言をぶつぶつ言っている危ない人にしか見えない。

「……えー、と」

エーファは少し迷った。

イルマがね、と状況を説明する事に。

エーファにとってイルマが喋るのは当たり前の事だが、他の人間にとってはそうではない。もしくは強い魔術の素養がある人間なら

ばイルマの言葉は分かるようだが、この二人はどちらも違う。

一々説明するのも面倒ではあるが、それだけではない。

イルマが喋るんだよ。

そう説明した時の反応が、少し怖い。

他の人間にそう説明した時、イルマの言葉がわからない人間に説明した時の反応。そのどれもが、エーファにとって嫌な思い出しかなかった。

しかし。

だからいつて。

「ねえねえ、何の事？」

魔女が嘘を語る訳にはいかず。

それに、こんなにきらきらと瞳を輝かせて自分の言葉を待っているリサに、適当な嘘なんてつける筈もなかった。

「……イルマはね、喋るんだ。あなた達には何言ってるか分からないだろうけど、人の言葉を喋るんだよ」

「うわ、本当にっ!？」

驚くりサ。その驚きはあくまで好意的だ。気味悪がる風は全くない。

「うん」

ここまでは予想の範囲内の反応だ。

問題はここから。

「ふうん？　じゃあさ、君は動物の言葉が分かるの？」

来た。

お茶を差し出しながらのエルヴィンの質問に、エーファは緊張する。

「……いや、イルマしか分からない」

お茶を受け取りながら、エーファはお茶だけを見て答えた。

横にいるリサの顔も、正面に立っているはずのエルヴィンの顔も見れない。

魔女の使い魔であるイルマは特別な猫らしい。イルマの言葉が分かるなら他の猫や動物達の言葉も分かっても良さそうだが、現実の違い。全く分からない。

だから、

「まあ、そんなものかもね」

エルヴィンの言葉にほっとした。力が入っていた肩がぬける。

「そうなんだ、ちょっとがっかりね」

リサの言葉にもあまり傷つかなかった。

言われ慣れた言葉だったから。

昔はもっとひどい事も言われた。まだ子供だったし、子供は直球な物言いしかしない。売り言葉に買い言葉で、更にエスカレートする。

「こらリサ」

「ごめんごめん、つい……あははは。悪気はないの。ごめんね？」

「考えるよりも先にやっちゃう子だから、ごめんね？ 気にしないで貰えると嬉しいな」

「分かった」

肯いて、お茶のカップを手取る。

白い陶器のカップはまだ少し熱かったが、ちょっと熱いくらいがエーファの好みだ。躊躇わずに口に含む。

と。

「……」

舌にさす何とも言えない、感覚。甘いとか酸っぱいとか、そうい

う味覚ですらない。美味しいとか不味いとか、そういうレベルでもない。なんだこれは？ ハーブティーの一種のようだが、エーファは今までこんなお茶を飲んだ事がなかった。

「口に合わないかな？ ヴォルグオリジナルのブレンドティー。うちの家の名物なんだよ」

「……あー、変わった味、ですね」

カップの中身をまじまじとのぞき込む。

色は普通のハーブティーらしく、薄緑色。香りも爽やかで、どこもおかしな所はない。

味以外は。

「あははは、いきなり敬語でどうしたの？ やっぱり口に合わなかった？」

やっぱり？

言葉には出さなかったが、エーファの胡乱げな眼差しが全てを語っていた。エルヴィンは照れたように帽子越しに頭をかきながら、言った。

「いやあ僕が入れるお茶って、家族の人以外にはあんまり受けが良くないんだよねえ。これが、なんでだろう？ 僕らは普通に飲めるんだけどね」

「癖になる味よねー」

隣では平気な顔して、リサがそのお茶とやらを飲んでいる。

エーファが今まで飲んできたお茶がお茶でないのか、それともこれがお茶でないのか。二者択一である。まあ、本人達が特殊である事は認めているので、こちらが異常なのだろう。

ああ、でも。

エーファはもう一口含む。

舌にさすこの感触。炭酸水のような、独特の感覚。

「……確かに癖になるかも」

美味しいとは、思わないけど。

「でしょう!？」

嬉しそうに笑うリサに、

「そう？ 気に入って貰えて嬉しいな」

穏やかに微笑むエルヴィンを眺めていると、エーファまで嬉しくなる。

こんなお茶の時間は久しぶりだ。

先代魔女が亡くなってからは、ずっとイルマが独りきりの食事やお茶の時間。誰かと一緒なのは久しぶりだろうか。

思い返してみれば、名付け親との距離もいつの間にか開いてる気がする。訪ねてくる頻度がめっきりと減った。猟師である彼は森にもよく来るし、森に来れば魔女の館を訪ねるのが常だった。それがここ最近、というか長い間顔も見えていない。今頃彼は何をしているんだろう？ 先程訪ねた時も留守にしていた。森に入っていないなら自宅に居るはずなのに。

それが、どうしたんだろう？ 考えるだけじゃ分からない。会えないなら会いに行けばいい。

また会いに行ってみよう。お昼に居ないなら夜に。もし夜居なかったら朝に。会えるまで、会いに行ってみよう。

不思議なお茶を飲みながら、エーファはそう決意した。

たとえ会いたい人に会えなくても、きっと得るものはあるはずだ。

今日の、この時間のうちに。

「ねえねえ、話は元にもどるけど」

エルヴィンもキッチンの中にある椅子に座って茶を飲んでいる、まったりとした時間の中。

リサはきらきらと瞳を輝かせながら、エーファに尋ねた。

「魔法って何？ 魔術って何なの？」

来たか。

「あー……、まだ、実を言うと私もまだまだ修行中だから、あまり詳しくは言えないけど……」

真っ直ぐなりサの緑の瞳を見ていられなくて、なんとなくキッチンの中を眺めながらエーファは言葉を探す。

綺麗に整理されたキッチンだ。様々な調味料が入った瓶などが並んでいるが、どれもすっきりと自分の場所を守っている。常にこちやこちやして、どこになにがあるか分からなくなるエーファのキッチンとは大違いだ。

「……土地にはね、《力》があるんだよ。ほら、植物とかが芽吹く力。で、そういう力が集まるのか何かが引き寄せてるのが、ともかく《力》が他の土地と比べて一際強い場所があるの。それで、その土地の力をちょっと分けて貰うのが魔法。魔術っていうのは、その《力》そのものに干渉するもの……らしい」

「らしいって？」

「さっきのほら、アリサさんの娘さん。マルタとロッテから聞いた。あの二人には魔術の才能があるから詳しいんだよ」

「素敵ね……」

リサは羨ましがだ。うつとりとした眼差しを虚空に注いでいる。

「……リサはさ、」

リサの事をなんと呼ぼうかと一瞬躊躇い、結局他の者も大概呼び捨てにするように呼び捨てで言った。

「学校とかで習わないの？ 今の学校はそっこの勉強する、って聞いたけど」

「それはね、エーちゃん」

いつの間にか妹と同じあだ名でエーファの事を呼んだエルヴィン。

くすくすと笑いを小さくかみ殺しながら、エルヴィンは教えた。

「魔術を習うのは才能のある子だけなんだよ。まあ才能がなくても自習は自由なんだけどね、魔術の基礎理論は数学やら化学を基にしてるから、このリサには荷が重いんだよ」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「好きならかじりつけばいいのにねー」

にこにこ笑いながら、なかなか辛辣な事を言う男だ。

「数学と化学？」

聞き慣れない単語を、エーファはおうむ返しに繰り返した。

「そういえばエーちゃんこそ学校とか行かないの？ あたしより少し上ぐらいでしょ？ 今じゃ高等を卒業した後は大学行くのが普通だし、あたしも当然そのつもり。エーちゃんは？」

昔はなかった大学もここ数年で創立された。世界でも数が少ない、魔術を専門とした大学だ。魔術の他にも文学部などもあり、そこそこ規模は大きめの大学である。

「……学校には、行かないな」

一時期憧れた時期はあったけれども、今のエーファにはもう必要も魅力もない場所だ。

リサの言葉で思い出される。

昔はマルタとロッテが羨ましい時期があった。二人の話す学校という場所は、それはそれは楽しそうな場所だった。

「必要な事は全部ばば様から教えて貰ってた」

幼い頃のエーファにとって、先代魔女が全てだった。

先代魔女はなんだってできて、なんでも知っていた。あんな人がいなくなるなんて信じられない。

「ふうん？」

何か考え込むリサ。

「へえ、じゃあ君学校とか行った事ないんだ。成る程ねえ」

逆にエルヴィンは納得がいったように肯く。

なにが成る程なのか、エーファには分からなかった。

「どういう意味？」

「いや、特に深い意味はないんだ。ただ君みたいな可愛い子を今まで全く知らなかったから、その不思議の理由が分かったから」

「？ 学校に行けば分かるのか？」

「多分ね、きっとそう。君はとても目立つもの」

教えてくれたが、結局よく分からない。

しつこく尋ねるのも気が引けて、エーファはエルヴィンの足下でくつろぐイルマに目をやった。

しかしイルマはエーファにまったく構わない。目すら合わなかった。

「つまり、エーちゃんは箱入り娘なのね！」

唐突にリサは結論を述べた。

「箱入り娘って？」

今日は知らない言葉ばかりが飛び出してくる。

またまたおうむ返しに繰り返せば、エルヴィンが教えてくれた。

「大事に大事に、まるで箱の中で育てられたかのような、世間知らずな可愛い女の子のことだよ」

可愛い女の子。エルヴィンはいやにその箇所を強調したが、エーファが気にしたのは別の箇所だった。

「箱の中、か……」

言い得て妙かもしれない。

エーファはこれまでほとんど森の中から出た事はなかった。箱を森とすると、まさしくエーファは森の中だけで育った。

「面白い言葉だな」

「ふふ、でしょ？ エーちゃんってどっか天然っぽいしね、まさにぴったりだわ！」

「天然？」

天然の意味は分かる。自然のものって事だろう。

逆に聞きたい。じゃあ反対の人工ってなんだと。

「そういう所よ」

リサはきっぱりと言い切ったが、その一言だけで分かるはずがない。

「それじゃ分からないよりサ。大体君も大概天然なんだから、偉そうに人の事天然なんて言わない方がいいよ」

エルヴィンが呆れながらたしなめる。

「というか、こんな所で時間潰してエーちゃんは大丈夫なの？ 無理矢理リサに連れてこられたんじゃないのかな？ つい引き留めちゃってるけど、時間は大丈夫？」

「無理矢理じゃないってば！ 失礼ね！」

兄に対して憤慨した後、リサはくるりと身体をエーファの方に向けた。

「そうそう、すっかり説明が遅くなったけど、我らがギルド『ヴォルグ』について説明するわね」

「あははは、説明する程の事もないと思うけど」

「お兄ちゃんは黙ってて！ 話が逸れたけど、あたしはエーちゃんにギルドに入って貰いたいの。最初に言ったようにこのギルド、入

会金やら登録料は勿論、更新料だってなんにも要らないし、ギルドマスターはこのあたし。ね、安心でしょ？」

「……」

ね？ と、ちいさく小首を傾げてみせるリサは可愛かった。だからそれだけでもう十分だから、エーファは肯いていた。

こつくりと、深く。

ギルドって何だろう？ そんな根本的な疑問を頭の隅においやつて、エーファは肯いていた。

「ありがとう！ エーちゃん！！！ これであなたもギルド『ヴォルグ』の構成員よ！」

がっつとエーファの手を握り、リサは感激の意を表した。その感情の激しさにエーファは圧倒される。エーファはこれまで、こんなにも率直に自分の感情をさらけ出す人間を見た事がなかった。その感情の激しさには眩しささえ覚え、その輝きの前では些細な疑問は吹き飛んでしまう。

リサは衝動的にエーファの手を握った後すぐさま手を放し、席を立て入り口近くの妙な機械の台に駆け寄る。そして台の引き出しの中から台帳を一つ取り出し、再びエーファの元に戻った。

「はい、これがうちのギルドのメンバー表。ここに名前と住所を書いて頂戴」

差し出されたのは一冊の台帳。かなり古い。この事務所とやらと

同じくらいに、古びた黒の台帳だ。

開かれたページの中にはもう既に何人もの名前が書かれている。どれもが知らない名前だ。ただ直前に書かれた名前はエルヴィン・クロツセル。

エルヴィンも構成員ならば安心だ。

なんの根拠もなしにエーファは安心しきり、署名する。

氏名・エーファ
住所・森

「……なんかあっさりしたサインね。苗字とかははないの？」

署名の内容を見たリサが戸惑いがちに尋ねた。

「ない、と思う。ねえ、なかったよね？」

リサの疑問に答えようと、いつもの調子でついエーファはイルマに尋ねた。

「そんなものないわよ。ついで言えばアンタ、戸籍もないから」

面倒くさげにだが、イルマは答えた。

「戸籍？」

「聞いてみなさい、教えてくれるわよ」

聞き返せば、それ以上は教えてくれなかった。

「戸籍がどうかしたの？」

エルヴィンが二人の会話を拾い、聞いてくれた。

こちらから聞く手間が省けたと、エーファは深く考えもせずにありのままを伝える。

「私、戸籍がないんだって」

「……へえ」

エルヴィンの穏やかな緑の瞳が、一瞬鋭く光る。

まずい事だっただろうか。エルヴィンのその様子にエーファは危惧したが、リサは全く気にしない様子で言った。

「え、って事はなに？ エーちゃんてば不法滞在？ 素敵！ アウトサイダーね！！」

「こらリサ。そんな物騒な単語は気軽に使っちゃダメだよ？ 他にお客さんいないからまだいいけど、敏感な人は敏感なんだからさ」

「えー、別にいいじゃない。戸籍がないって珍しい事じゃないでしょ？ 流浪の民とかはみんなそうなんでしょ？」

「だから、それがさ、」

「それがなによ？」

リサは兄を睨む。エルヴィンは肩を竦めて、言いかけた言葉を飲み込んだ。

「……ともかく、これでエーちゃんも我がギルドの一員よ！　これからよろしくね！」

曖昧な笑みを浮かべたまま黙り込んだ兄を放っておいて、リサはエーファに向き直った。

「よろしく」

なににがよろしくなのか今ひとつ分からないまま、エーファは肯いた。

勢いに飲まれる。

一歩立ち止まって考える時間もなかったし、それよりもむしろ考える必要性もエーファは思いつかなかった。

それだけ、魅せられていた。

「それじゃ今からエーちゃんの入団式を執り行います！　まずは買い出しよ！　エーちゃんも一緒に行きましょう！！」

エーファの返事を聞くまでもなく。

リサは強引にエーファの手を掴んで、エーファを連れ出す。

「こらこらエーちゃんはお客様でしょ？ 買い出しに連れ出しちゃダメでしょうが」

「もうエーちゃんは身内も同然よ！」

身内。

これまた素敵な響きだ。エーファはその響きにつつとりする。

「……ナニやってんだか」

イルマの呆れた呟きも、耳には入ったが気にならない。

久しぶりの人との会話。それもかなり友好的な。イルマと二人きりだった日々が嘘のような、この楽しさ。

「……」

エーファは浮かれていた。はしゃいでいた。

傍目には突然のリサの行動に戸惑い驚き、どうしたら良いのか分からずに茫然としているように見えただろうが、それは大いなる勘違いだ。誤解である。

エーファは心の底からこの状況を楽しんでいた。

正確には今己の手を引く少女そのものを。

次は何を魅せてくれるだろう？

大きな期待を胸に踊らせ、エーファは少女が手を引く方へと行く。

自ら望んで、その手に引かれていった。

ギルド『ヴォルグ』の事務所から歩いて十数分。旧市街の繁華街クラナド地区に二人は来ていた。

森に近い、昔からの街が旧市街。メルディン社が中心となって整備し、急速な発展を遂げたのが新市街。現在では主要な施設は全て新市街に新設され、旧市街は寂れた感が否めない。しかしそれでも昔程の活気はなくても、このクラナド地区は旧市街一の繁華街である。多くの商店が並び、ほとんどな人通りだった。

「もうそろそろ限界かしら？」

道の真ん中、きらきらと緑の瞳を輝かせ、リサは試すように言った。

その輝きを失わせたくなくて、もつとずっと見ていて欲しくて、エーファは踏ん張る。

もう既に両腕には食料品がたくさん詰まった袋がいくつかがぶら下げられ、更に箱物がいくつもエーファの頭上高く積み上げられていた。荷物はどれもエーファが一步一步歩を進める度にゆらゆら揺れているが、エーファの足取りそのものはしっかりとしていた。

エーファ自身は気にした事もなかったが、エーファの身体能力は極めて高い。腕力だけでもそこら辺の男を軽く圧倒する。

「まだ頭の上が空いている」

「すごいエーちゃん！ 頭の上にも乗せれるのね！ 流石ね！」

「ふふん」

自慢げにエーファは鼻をならしたが、荷物に隠れてその得意げな顔は誰にも見えなかった。

今エーファははた迷惑な人間の一人だった。その荷物の余りにも多さに、誰もが避けて通る。

子供を連れた母親がじろりとエーファを睨んでいく。

小さな子供にとってエーファが支える荷物の一つでも当たれば大事だ。当たり所が悪ければ大怪我につながりかねない。危険だ。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん？」

店のおばちゃんははらはらと声をかけた。

隣の店に来た時も十分な荷物の量だったが、更に量が増えている。買い物してくれるのはありがたいが、惨劇に手を貸すのも気が引けた。これ以上荷物が増えるのは良くない。危ない。たとえ本人が大丈夫だと言っても、傍目に見るだけで十分怖い。はらはらする。

「平気だ」

「重くないのかい？」

「平気」

更に声をかけても、返答はぶれる事はなかった。しっかりと落ちて着いた声だ。

見かけはどこかのお嬢様みたいなのに、大した力だ。

「大したもんだねえ、アンタ！ そんなほっそい身体はどこにそんな力があるんだい？ ウチの息子よりもずっと大したもんだよ！！」

甲高い、気がいいおばちゃんの声がその場につんざく。

「……悪かったな」

少し遅れて、どこか呆れの入った若い男の声がした。

「あらあらオルゲンさんとこの奥さん、お久しぶりね」

店のおばちゃんほっとした。

良識ある大人が登場したからだ。面白がっている奥さんの方とはともかく、息子の方は警官で、警官と言えば良識の鏡だ。

きつとこの女の子達の悪ふざけにも似た、危ない荷物の持ち方を正してくれるだろう。

オルゲンの奥さんが興味津々といった様子で、荷物を持つお嬢ちゃんをのぞき込んだ。

「あらま随分と可愛らしいお嬢ちゃんだこと。こんなお嬢ちゃんが

こんなに力持ちだなんてねえ、世の中分らないもんだね」

「ふふん、エーちゃんはただのお嬢ちゃんじゃないのよ。その正体はっ！」

「誰かと思えばお前、エルヴィンとこの妹じゃねえか。他の通行人の皆様にご迷惑だ。その荷物を持ち方はやめろ。危ないだろうが」

連れの女の子の言葉を遮って息子さんが注意してくれたの聞き、店のおばちゃんはほっと胸をなで下ろした。

やっぱり警官さんだ。頼りになる。ちょっと前まではそこら辺走り回って叱られてたのに。

聞き覚えがあるような声に、エーファは己の記憶を探った。

そして今、自分をまじまじと横からのぞき込んでいる中年の女性の顔にも見覚えがあるような気がして、エーファは深々と自分の記憶を辿る。

金髪碧眼の、綺麗な女性だ。晴天の空のような蒼い瞳は輝きに満ち、溢れんばかり。

「いいかそのお前。いくら力があるからといって調子に乗るな。乗せられるな。少しは他人の迷惑も考えろ。危ないだろう」

「なによー、そんな言い方ないじゃない。エーちゃんはただ、」

「ただもくそもない」

「ぶーぶー。そんなだからモテないのよ!」

「それは関係ないだろうが!」

「いいえ、絶対あるわ! ヴィリーさんて人気はあるのに彼女が出来るないのは、絶対にその面白くない性格の所為よ! あと休みの日にお母様と一緒に出かけ、って辺りがちよつとね……」

「これはだな、」

「どうも、初めまして。ヴィリーさんにはいつも兄がお世話になっております。私リサといいます。こっちはエーちゃん」

「はいはい、これはまあご丁寧に」

女性の視線がリサに動いた。

リサと親子は知り合いらしかった。

堅苦しい挨拶が続く。

「ヴィルバルトの母でございます。愚息がいつも、ご迷惑をおかけしております」

「いえいえそんな、とんでもないです」

「まあまあしかつりしたお嬢さんだこと。最近の子は、なんてよく聞くけど、実際に話してみればそうでもないのね。ねえ、そうは思わない？」

「本当ねえ、うちの娘にも見習わせたいわ」

「娘さんていくつだっけ？」

「今年でもう三十になるのよ。三十だって言うのにいつも家でだらだらして、本当、あの子の将来が心配だわ。ヴィリバルト君がお嫁に貰ってくれば安心なんだけど」

「……はは」

若い男の乾いた笑い声と共に、高く積み上げられた荷物の一部が消える。

若い男が強引に、エーファが乗せていた荷物を持った結果だ。

「全く……ん？」

荷物がなくなつて空いた空間をふと見上げれば、男と目が合った。

金髪、というにはやや鮮やかさが足りない、色の薄い栗色の髪。

男の母親が輝かしい晴天の蒼にだったのに対し、彼は深い海のような蒼い瞳。顔立ちは母親似で、綺麗な顔をしている。身長は男が頭一つ分ぐらい高い。

やっぱりどこかで見た顔だ。

エーファはまじまじと男を凝視した。

「……久しぶり、だな？」

やはり知り合いらしい。男は躊躇いがちに続ける。

「お前でもそんな格好できるんだな。その、よく似合っているぞ……」

はて誰だったか？

イルマに聞こうとして、イルマの姿を探す——見つからない。

それはそうだ。イルマは『ヴォルグ』の事務所に置いてきたのだから。

「……」

エーファの沈黙をどう受け取ったのか。リサがエーファを庇うように立ちはだかった。

「ちょっとヴィリーさん、エーちゃん怖がってるじゃないの。似合わない事しないで頂戴！」

たしなめる口調だが、声は楽しそうな響きだ。エーファからリサの表情は見えなかったが、多分笑っているだろう。そんな気がする。

「怖がる、ってお前な……こいつがそんなタマかよ」

男は呆れ顔だ。エーファの事をよく知っているらしい。

確かに怖くはない。ただ返す言葉が思いつかないだけだ。男の顔には見覚えがあったが、詳しく思い出せない。それが気になって仕方ない。

が、周りの反応は違った。

「まあまあヴィリバルト。女の子にそんな言葉使っちゃダメよ。全く、そこのお嬢さんが言う通りだわ。アンタはそんなんだから彼女できないのよ」

「そうねえ、ちょっと感心できないわねえ」

「そうですよ、ねえ」

女とは恐ろしいものだ。

共感する力が強く、あつという間に敵味方を区別する。

「……あなた達は、こいつの事を知らないからそんな事が――」

「エーちゃんと知り合いなの？」

「まあ、な。昔ちよつと……」

「エーちゃんは知らないみたいよ？」

「ぐっ」

リサの容赦ない言葉に男は呻いた。

その情けない姿に、唐突にエーファは閃いた。

『やられたらやり返す』

『やり過ぎだ！ 過剰防衛っつーのを知らないのか！？』

『今知った』

『てめえ！』

似たようなやり取りをその後繰り返した気がする。

準正装の格好で街に降りる度に。

「はいはい、無駄話はそこまで」

男の母親がその場を取り仕切る。

「折角なんだから送って行きなさい」

「分かってるよ！」

男が反抗的に了承すれば、たちまち一斉攻撃が始まった。

「素直に肯いておけばいいのよ、アンタは。そんなんだからモテないのよ。ねえ？」

「やっぱりそうですよね」

「可愛げがないものねえ」

リサは調子よく相づちを打ち、ぱつさりと切り捨てたのは雑貨屋のおばちゃん。

のほほんとした、可愛らしい感じのおばさんだが、なかなかきつい事をにこやかに言う。

「ああもつ、これだから……」

女って奴は。

男は賢明にもはつきり最後まで言わなかった。

エーファはすごいと誉めてやりたかったが、一度口を閉ざすとなかなか口を開ける機会を見失ってしまうエーファは結局何も言えなかった。

黙ったまま三人のやり取りと、その周りを見ている。

これから入ろうとした店には入り口の扉がなかった。店をしまう時はシャッターを下ろすタイプの店みたいで、今の季節はまだ良いが冬は寒そうだ。

店頭には様々な大きさの縫いぐるみが並び、奥の方には色の鮮やかな生地や色々な形を模したレースが並んでいる。

縫い物は嫌いじゃないから、また来てもいい。

そういえばイルマの寢床に敷く小さなカーペットも、もうしばらく変えていない。そろそろ模様替えしてもいいかも。新しく作る時にはこの店に買いに来ようか、なんて、状況に全く関係ない事を考えていたエーファに声がかかる。

「ほら行くよエーちゃん。ちょうどパーティー始めるには良い時間よ！ 流石あたし達だわ」

リサだ。

言っている意味はよく分からなかったが、リサは上機嫌である。言葉一つ一つもリズム良くその可憐な唇から紡がれる。

「パーティー？」

「はい、エーちゃんの入団歓迎パーティーです！ ヴィリーさんもどうですか？ エーちゃんの知り合いみたいだし、ご飯は大人数で食べた方が楽しいですもんね！」

男が聞き返すとリサは律儀に答えて、あまつさえ男を招待した。

「いや、俺は……」

「いいから行つてきなさいよ。ただでさえアンタの周りには女つ気がないんだから、折角のお誘いを断っちゃダメ。女の子のお誘いを断るなんて生意気よ」

「……分かったよ」

母親の言葉には逆らえないのか、男は諦めたように肯いた。

「はい、お借りします!」

元気いっぱいになりサは答えた。

リサが嬉しそうだから、エーファまで嬉しくなってくる。

「それじゃあ行きましょう!」

「へいへい」

リサが先導し、男がそのすぐ後に続いて、エーファはやや距離を置いて後に続いた。

パーティーの始まりだ。

6（後書き）

誤字脱字訂正しました（9／18）
ヴィリーの名前はヴィリバルトです。

「おやお久しぶりですね、先輩。お元気そうでなにより」

エルヴィンがキッチンの中から出迎える。

事務所に入ると、もう既に十分良い香りが充満していた。焼けた肉の香ばしい香り、食欲をつくなにかのスパイスの香りなど。

「お前もな」

ヴィリバルトが肯く。

げっそりと疲れた様子なのはここまでの道すがらリサに質問攻めにあっていた為だろう。それはもういきいきと、リサは根掘り葉掘り質問していた。

エーファとの初対面。

それからの関係、だとか。

しもどろもと答えるヴィリバルトに対し、エーファはほとんど口を挟まなかった。

一度口を挟めばリサにはきつと睨まれるし、ヴィリバルトは更にもって何言っているか分からなくなるし、散々だ。エーファの記憶の中でのヴィリバルトはもう少ししっかりした男だったのだが、しばらく見ない間に少し変わったようだ。

「お兄ちゃん、ヴィリーさんも入団式に参加してくれるって！ ヴィリーさんの分もちゃんと用意してね」

「はいはい」

「荷物はここで良いか？」

「あすみません、ヴィリーさんののは二階、エーちゃんのはお兄ちゃんに渡して頂戴。ヴィリーさんはこっちです」

リサはくるくると目まぐるしく、よく働く。ぽんぽんと指示をあちこちに飛ばし、率先として動く。

見ていてとても清々しい。自分には真似できないと、エーファは息を小さく吐いた。

「お疲れ様。すごい荷物だね、もしかして先輩が持ってた分より多いんじゃない？」

リサはすぐ無茶するから、と小さく笑いながらエルヴィンがエーファの荷物の一つを取った。

「結構重いね、これ。あの子は何を買ってきたんだが……」

「粉ものを買ってた。買い溜めがきくからって」

「それはそうだけど……仕方ない子だね、本当に」

エルヴィンがもう一つ荷物を持とうとしてくれたので、素直に差し出した。ら、どさっとエルヴィンは袋ごと荷物を落とした。

「……ごめん」

気まずげにエルヴィンは謝ったが、エーファは全く気にならなかった。

「荷物持ちはいつも私だから気にしないでいい」

エルヴィンが落とした荷物を拾い上げながら応える。

「そうなんだ……力持ちなんだね。それもなにかの魔法？」

「そんな魔法はない」

きつぱりと言い切った後、気落ちした様子のエルヴィンを気遣い、エーファは話題を変えた。

「それよりイルマは？ 大人しくしていた？」

一見した所イルマの姿は事務所内のどこにもなかった。

夕飯はここでいいと言っておきながら勝手なものだ。普段の夕飯の時間はまだまだ先だが、どうせならここで一緒に済ませたい。『誓い』によって彼女の望むご飯を用意せねばエーファは魔女の資格を失ってしまうのだから。

「猫ちゃんならそこに居るよ」

エルヴィンがカウンターの一角を指す。その先には猫一匹楽々入りそうなバスケットが置いてあり、よく見ると黒い尻尾が垂れてい

る。

「荷物をこっちによろしく」

お茶目な様子でエルヴィンはエーファをキッチンの中に招いた。

切り替えは早い男のようだ。さっき荷物を落として落ち込んでいた様子は微塵もない。

「分かった」

素直に肯いて、エルヴィンの指示の元エーファは荷物を運び、キッチンの奥の隅に運ぶ。

「助かったよ。これで当分重い物は買わなくても済むね」

につこりと笑いながら、エルヴィンは続けて言った。

「ねえ、次は僕と買い物行かない？ 君が気に入るかは分からないけど、素敵なお店があるんだ」

少し距離が近くなった。顔も近い。不快ではないが、気になる近さだ。エルヴィンという存在を強く意識させられる。まるで世界には二人しか存在していないような――

「さあ今から入団式よ！」

「そんな隅で何やってる」

「……煩いのが帰ってきたわね」

二人と一匹の声に、エーファの意識はエルヴィンから離れた。

「……ただいま」

小さく、イルマに向かってエーファは呟く。

「はいはい、おかえりなさい」

実に嫌そうにだが、イルマはエーファに返した。バスケットの中から身体を起こし、優雅に身体を伸ばす。

たえ嫌そうであっても、「ただいま」と言つて「おかえり」と返つてくる事。エーファにはそれが嬉しい。先代魔女がいなくなつてからそんな機会はめつきりと減つたし、イルマは常に応えてくれはしなかった。今日は機嫌が良いらしい。

「良いところだったのに。ねえ？」

からかうようなエルヴィンの声音は本気でリサとヴィリバルトの登場をを煙たがってはいない。それは箱入り娘で天然なエーファにだつて分かつたから、リサに分からない筈がない。

だから、以後続いたこの会話は無意味だ。

「何々、あたし達お邪魔だつた？」

「見れば分かるでしょ？」

「分かんないわよ！　ちゃんと壁作らないと！　空気で！」

「そこはあれだよ、こう兄妹テレパシーみたいな」

「妹に頼ってちゃ駄目よ、お兄ちゃん。そこは自分で空気を支配しないと！」

「空気を支配するって、どんな風に？」

「それはね、まずはね、」

「だあもうやめろその意味わかんねえ会話！！ 黙って聞いてると腹が立つ！ 相変わらずだな、お前ら！」

リサの講釈には非常に興味がそられたので遮られたのは残念だが、意味が分からないという点ではヴィリバルトと同意見だ。腹は立たなかったが、なんだかもよもよもした。

二人の良く分からない会話に口を挟んで加わりたいような、終わらせたいような、そんな相反する気持ち。それにそんな二人に挟まれて、なんとも居心地も悪かった。

「あははは、人間そうは変わりませんよ。先輩も相変わらず短気ですね」

「だから可愛い彼女ができて長続きしないのね」

「ほっとけ！」

「はい、じゃ、仕切り直し！」

あつさりとりサは話題を変えた。

「はいはい」

「お前ら……！！」

それに大人しく従うのは兄、ヴィリバルトは大層不満げだ。エーファもどちらかと言えば不満が残る。もよつとした霧が晴れない。

なんだつたんだろう、アレ？

疑問の雨がひとひと降り注ぐ。

「はい、それじゃエーちゃんは何か食べたい？」

唐突な質問にエーファは面食らった。

「え？」

全て段取りは決まっていると思っていたからリサの質問の意味が分からない。何か食べたいって、それを聞くなら買い出しの前にするべきでは？ さっきの買い出しでは何を買ったんだ？ 買い溜めもあるが、そもそもパーティーの材料を買いに行つたんじゃない？

呆気に取られるエーファを前に、リサは楽しそうに言った。

「だから、エーちゃんは何食べたいかって聞いたの。さっき一緒に買い出し行つたでしょ？ あれで大抵の物は作れるようになったから、エーちゃんのリクエストにお応えするのよ。あたしと、お兄ちゃんとで」

「おいおい、今から作るのか？」

「そうよ、面白いでしょ？」

もつともなヴィリバルトの問いかけに、リサは満面の笑みで肯いた。

「いやね、妹よ。確かに面白いか面白くないかと聞かれればちよつと面白いけどさ、君冷静に考えなよ？ もう時刻は夕方で、晩ご飯の時間でしょ？ 僕もちよつとお腹空いてるしさ、もう大体準備は出来ちゃってるし、ねえ？」

「いいの！ これが『ヴォルグ』の入団式なの！！」

兄の説得も、なんか火がついたらしいリサには無駄だった。

「現団員が新人団員の好きなご飯を作る！ それがうちの入団式の！！！！」

きつぱりと高らかにリサは宣言し、意気揚々とリサはキッチンに入ってくる。

「はい、エーちゃんはこっち！ それで何食べたい？ なんでも言つてよ！？」

「スープ」

エーファは躊躇わずに即答した。

スープはエーファの主食といってもいいかもしれない。スープのない食事は有り得ない。朝昼夜、全てだ。食欲が無い時でもスープだけは意地でも口にする。それがエーファの食生活だ。

ヴィリバルトの顔が少し歪んだのでまずい選択だったと気づくが、もう遅かった。

「スープね、じゃあちよつと作るから待ってて。煮込んでる間にお兄ちゃんが作った分を食べてたらちようど良いわね」

「逆でしょ」

「逆だろうが」

情け容赦ないツツコミが同時に入ったが、リサはお構いなし。

「はい、それじゃあ今からエーちゃんの入団式のお料理を作ります！ ヴィリーさんとエーちゃんはこっち！」

カウンター席に案内される。折角なのでイルマの隣の席に座った。バスケットの中をのぞき込むと、イルマは再び横になって寛いでいた。お気に召したようで、気持ちよさそうな寝顔だ。

「エーちゃんお腹空いてるでしょ？ これでもつまんで。先輩もどうぞ」

エルヴィンが苦笑いと共に差し出したのはフライドポテトの山盛り。それを見たヴィリバルトは呆れている。

「お前好きだな、これ」

「ええ、最近お気に入りのメーカーの物です。美味しいですよ」

「なんでもいいよ」

面倒くさそうにヴィリバルトは出された皿に手を伸ばした。一気に何本かを掴み、そのまま口の中へ。豪快な食べ方だ。

「もっと味わって食べて下さいよ」

「ほっとけ」

「お兄ちゃん！ ヴィリーさんはほっといて、スペシャル料理よ！」

「はいはい」

リサに呼ばれ、エルヴィンはキッチンの奥へと。

エルヴィンと共に料理を始めたリサはとても楽しそうだ。きゃっきゃっと、はしゃいでいるのがよく分かる。その様子を見ているだけで、エーファの頬はゆるむ。

パーティーは、始まったばかり。

散々だった昨日とはおさらばだ。

クルトは気合いを入れて鏡の前に立つ。

美味しい仕事があると聞いて行ってみれば、まあ千歩譲って美味しい仕事だったけれども、なにやら怪しげな術をかけられ、否応なしに引き受ける事に。そんなの仕事だとは言わない。仕事とは、己自身で引き受けるかどうか決める。それが仕事だ。強制されるものではない！……なんて勇ましい持論を掲げる暇もなく、仕方ないから事務所に帰ってみれば弟は使いつ走りになれ、その美味しい仕事を持ち込んだ張本人にお茶をご馳走になり、おまけに茶器まで。ありがたいたいけれども複雑。そして、昼飯を食って嫌な事はさっさと済まそうと行ってみれば。

「……」

最近伸びてきた黒髪に丹念にくしを通し、整髪剤で整える。

深い蒼に細い白い線が入ったスーツと、黒のシャツ。スーツの色に合わせて薄蒼色のネクタイをチョイス。

こぼれ落ちる白銀の髪は月の滴のよう。

白い肌は雪のよう。

蒼と紫の瞳は極上の宝石だ。

陳腐な表現しか思いつかないが、彼女は美しい。これまで見たどんな女性よりも。それでいて普通の女じゃない。

「気合い入ってるな、兄貴」

「まあな」

どこか呆れた様子の弟に鼻歌交じりでクルトは答える。

蒼のスーツはクルトにとって勝負服である。己の瞳の色である深緑にスーツの色を合わせても良かったが、その当時付き合っていた彼女が蒼の方が似合うと言ってくれたので蒼で揃えた。

「今日は俺一人で行くし、もうあの仕事も片付ける。お前は寝てて良いぞ」

「分かった」

「それじゃ行ってくる」

最後に全身をチェックして、クルトは出かける。

昨日は動揺し、慌ててしまい、みつともなく逃げるように帰ってきてしまったが、今日は違う。

十分気合いも入れた。なにが起こっても動揺しない自信がある。

だから――

「誰だお前？」

予想以上だ。

まさか男連れで帰ってくるとは。

しかも自分より背が高く、がたいが良い。真っ正面から殴り合いをすれば勝ち目は薄い。

昨日と同じようにあの薄気味悪い森を通り、館を訪ねてみれば彼女は留守だった。呼び鈴を鳴らしても物音一つもせず、さてどうしたものかと思案に暮れていれば、これだ。

「……アンタこそ誰だよ？」

まさか恋人か？ それはまあ確かに、恋人くらいいてもおかしくない年齢だろうし、あの美貌だ。言い寄る男は星の数程。自分だってその星の一つ。居てもおかしくはないが、不思議と全く思いつかなかった。

彼女はまるで子供のようだった。だから男がいるなんて考えもしなかった。それはまあ、初めてとかそんなのにこだわるほど器量は狭くないから、どうでもいいといえばどうでも良かったが、シヨックを受けたのは否定できない。

「お前の知り合いか？」

クルトが尋ね返せば、男は彼女に問うた。

「……」

彼女は眠たそうに、眼を瞬かせた。

相当眠たそうだ。

それはそうだろう。一体昨日のいつ出かけたかは知らないが、朝帰りならぬ昼帰り。一体いつまで遊んでいたのか……いやいや、遊んでいたとは限らない。そんな女には見えなかった。

今の格好だつてまるでどこかのお嬢様だ。彼女には夜のような黒い服が似合うと思っていたが、こういう格好もなかなか。帽子からあの白髪がこぼれているのも良い。

にゃあ

猫の鳴き声がした。

柔らかな感触に足下を見ると黒猫が身体をすり寄せ、甘えてくる。

安くないスーツにすり寄られ、一瞬顔が引き攣りそうになったが、彼女の手前堪える。

昨日も居た猫だ。彼女の飼い猫だろう。

イルマと、彼女はそう呼んでいたっけ？

「やあイルマ、ご機嫌はどうか？」

名前を呼んでやると、猫はじつとクルトを見上げた。

緑の丸い瞳が、真っ直ぐに見ている。

まるで品定めをおこなっているような、そんな目つき。

非常に居心地が悪い。

「お前は、昨日の……」

ようやく彼女のその可憐な唇が開く。

顔を向けると彼女と目が合い、どきどきと胸が高鳴る。その横で不審げに自分を見つめる男など目に入らない。

覚えていてくれた。その事実にあ堵する。

昨日の今日だから、もし忘れられていたらショックで立ち直れない。片思いという状況は嫌いではないが、顔も覚えられていないような一方的なものは切ない。切ないのも嫌いじゃないが、やっぱり切ないのは楽しくない。

「何の用だ」

昨日とはまるで違う様子の彼女。

昨日は無邪気な子供みたいに元気一杯だったのに、今日はひどく

気怠げだ。

輝きのない紫と蒼の瞳。

病人のように白い肌。

髪もほつれた糸のようにざんばらに散っている。

とてもいい。

どちらかと言うと年上好きのクルトとしては今の状態の方がそ
られる。

好きな人にはいつでも笑っていて欲しいが、こういう疲れた様子
もいい。なんともいえない色気がある。ぞくぞくさせられる。

にゃあににゃあ

クルトの足下で猫が鳴く。

彼女の顔がしかめられた。

「イルマ」

たしなめる口調だが猫はお構いなし。更にクルトの足に身体をす
りつけ、甘い鳴き声をならす。

猫は別に好きでもなんでもないが、ここまで甘えられると悪い気はしない。しゃがんで撫でてやると、猫はほんとんとクルトの腕から頭に上った。

「おっと」

意外とずっしりな重みバランスを崩し、よろめきそうになる。だが彼女の手前、みっともなく尻餅つくのは勘弁だ。持ちこたえる、持ちこたえられた。よくやったと、自分を誉めてやりたい。

そう、みっともなく尻餅をつかずに済んだ事にほっとして、しかし何でもないという風に装って立ち上がり、彼女を見ると。

「……」

睨んでいる。睨まれている。

きつと、睨まれている。

何故だ？ 気に障る事をしたのか？ いつの間に？ 猫がスーツに身体をすりつけても嫌な顔一つせず、なでてやってもしたのにおまけに肩に乗っかられても文句の一つも言わずに受け入れた。

彼女の猫だから。

それだけの理由で、こんな暴挙も許している。

なのに。

「イルマ！」

強く猫の名前を、彼女は呼んだ。

苛立ちが込められている。それは誰に対する苛立ちか。まさか俺じゃないよな、と思いたいが、怪しい。だって彼女の視線の先には俺しかいないじゃないか。他に誰がいる？

にゃあ

「……分かったよ」

猫が鳴けば、非常に不満げにだが彼女は肯いた。

なにが分かったというのか？ まさかテレパシー？ そういえば彼女は魔女らしいし、魔女といえば黒猫。今日は箒は持っていないが、そんな不思議な力があってもおかしくない。

「中へどうぞ。中で話を聞こう」

すたすたと彼女はクルトの横を通り過ぎ、家に入っていく。扉はぱたんと大きく音を立てて閉じ、もう一度開く様子はない。

二人は残された。

「……」

見れば、彼女の隣に立っていた男は難しい顔で何か考えている。

彼女を送ってきただけなら、さっさと帰ればいいのに。

そう願いたいのが、もし、もし彼が彼女の恋人とかそういうイイ感じの関係だったら、このまま帰るなんて選択肢はないだろう。

「……」

なにか声をかけるべきか。

詳しく彼女との関係を聞きたいが、馬鹿正直に尋ねるのも気が引けたし、もし恋人ならシヨックで立ち直れない。仕事どころではなくなってしまう。それはあまりにも格好悪い。弟には自信満々で出かけてきたというのに、あんまりな成果だ。

「……………」

更に熟考した結果、クルトは男を無視する事にした。

居なかったものとして、気にしない。彼女だってそんなに親密そうな態度は取ってなかった。むしろ今背中に乗っている猫の方に気を取られていたし、うん。下手につついてやぶ蛇も勘弁だ。

だから、クルトは男を気にしない事にして、閉じられた扉に手をかけた。

「おい」

すると向こうが食い付いた。

「お前は、なんだ？」

また同じ事を聞く。初めとは異なるニュアンスだが。

むしろこつちが聞きたいよ、なんてダサイ事はもう言わずに。

「アンタには関係ないだろう？」

さらりと切り捨てる。

「……」

男は顔を歪め、沈黙した。

ほっと、安堵する。

クルトは顔では平静を保ちながら、胸をなで下ろした。

言い返さない辺り深い関係ではないようだ。良かった。

「それじゃな」

急いで背を向ける。

頬が笑みで引きつるのが抑えられない。我慢しようとして、痛くなる。きつと今の自分はひどい顔をしている。こみ上げる笑顔を抑えようとして、失敗した変な顔。

彼女にも見られる訳にはいかないから、しばし扉の前で静止。感

情が落ち着くのを待つ。

そして、

にゃあ

急かすような猫の鳴き声を合図に、クルトは扉を開けた。

扉を開けて目に入っただのは大きな机。椅子はない。机の上には何も置かれておらず、何の為の机だろうと首をかしげてしまう。

さつと左右に視線を走らせ、彼女の姿を探す。

いない。

横に長い部屋だ。机以外には何も無く、左奥に扉があった。扉は開いており、まるで誘っているようだ。

知り合って間も無い男を、こんなにも家の奥に入れてくれるなんて。

高ぶる感情が思考を暴走させるが、冷静な理性が押しとどめる。

落ち着け。この生活感の全く感じられない空間。おそらくこの部屋は玄関の一部みたいなもので、彼女の生活圏は更に奥なんだろう。昔は応接間として使っていたのかもしれないが、今では彼女の元を訪れる人間は皆無なんだろう。昔は違うようだが、今の街の人間にとって魔女は忘れ去れた存在。『カツツ』のおっさんがそう言っていた。

がたん

ひどく乱暴な音がして、扉が開く。空気の動きで分かる。

そして、

ばたん

荒々しい音と共に扉が閉じられたのが分かった。

振り返ると、仏頂面した男が立っている。

「……なんか用？」

尋ねれば、

「お前に関係無い」

つつけんどんに答えられた。

にやあと、猫が背中どこか楽しそうに鳴く。この状況を理解し、
楽しんでいるようだ。

そんな筈はないだろうけど。いや、魔女の猫ならもしかしたら――

「いつまで突っ立ったままにいるんだ？」

棘のある言葉にクルトの思考は妨げられる。

むっとしたが、特に言い返す言葉も思いつかなかったなので、クルトは黙ったまま開いた扉の奥へと進んだ。

奥の部屋は広がった。クルトの事務所よりもずっと。三つぐらい入りそうだ——って、それは流石に言い過ぎだが。

部屋の真ん中には螺旋階段がある。変わった造りだ。階段の奥には大きな机と椅子が置かれ、その横にはキッチン。なかなかでかいキッチンだ。家庭用ではなく、業務用ぐらいにでかい。

そのキッチンに彼女は立っていた。

こちらからでは後ろ姿しか見えないので、何をやっているのかは分からない。

にゃあ

猫が鳴くと、彼女は振り返った。

「……そこに座るといい」

何が気に障るのか、彼女は不機嫌な顔のままに勧めてくれた。

「どうも」

近いからという理由で手前側の端の席に座る。決して彼女の後ろ姿を眺めていたいから、という下卑たオヤジくさい下心からではない。決して。

手前に、近くにある椅子に座る。自然な事だ。どこもおかしな所

はない。

男はクルトと向かい合わせに、一つずれて反対側に座った。

「……」

睨んでる睨んでる。

男はクルトを睨んでいた。

彼女に睨まれるとは違い、男に睨まれるのはまあまあ気分が良かった。優越感が湧き出る。全く根拠のない優越感であるが。

「どうぞ」

かたん、と硬い音を立ててティーカップが差し出される。

変わった茶器だ。薄い緑色した半透明の陶器でできたセットで、ティー Spoon は黒い。

来客用の物らしく向かいの男にも同じ物が出されたが、彼女は黒のマグカップを自分の席の前に置いた。

男の、隣に。

ごく自然な動作で、彼女は男の隣に腰を落ち着けた。そのあまりにも自然の動作ぶりに嫉妬してしまう。

男も驚いている様子だったが、女しか目に入っていないクルトは気づかなかった。

「それで、お前はなんだ？」

彼女はクルトの正面に座り、真っ直ぐにクルトと目を合わせた。

「昨日も居たな」

「まあね」

クルトは出されたお茶を一口含み、味を楽しむ。

すっきりとした香りと味のお茶だ。しかし不思議と後味にはほのかに甘みが残る、他で飲んだ事のないお茶だ。

お茶。

お茶を楽しみながら、クルトは僅かに眉をしかめた。

心に引っかかるものがある。

なんだっただけ？　すぐに思い出せないのだから、大した事ではないのだろう。……とは思うが、何か引っかかる。

なんだっけ？

「それで、用件は？」

彼女の可憐な声で我に返る。

声には苛立ちが込められている。何が原因かは知らないが、彼女

は不機嫌だ。特にクルトは何かをした覚えはないのだけれど。

「ああ、別に大した事じゃないんだが、仕事でね」

「仕事？」

胡乱げな声を上げたのは男の方だった。彼女は興味深そうに目を細めただけ。

反応が小さい事は残念だが、仕事自体はクルト自身には関わりあがない物。俺に興味が無い、という事ではないと己を慰めながら話を続けた。

「紹介が遅れたね、俺はクルト・ボルツ。街で小さな事務所をやっている。依頼人は明かせないが、君のサインを欲しがっている人がいてね、その為に来た」

王国では、ペン等によるサインには法的効力が全くない。全てにおいて印鑑が必要で、出生と同時にその印鑑は両親によって作られる。大きさは大人の小指程。苗字は刻まず名前だけを刻み、また縁起の良い紋様をあわせる。世界に一つだけの、印鑑だ。

だからサインを欲しがるなんて、逆にすこぶる怪しかった。

「サイン、ね」

ますます胡乱げな視線を寄越してくる男は無視して、クルトは彼女だけを見る。

「それで、その……ここにサインを」

もつと何か言いたかったが、結局何も思いつかずにクルトは予め用意していた紙とペンを差し出した。

彼女は無言のまま、さらさらと躊躇無く書いた。

エーファ

たった、それだけを。

「ん」

何の問題もないように、彼女——エーファはペンと紙をクルトに突き返した。

「……エーファ、さん？」

クルトは軽く呆然としながら、その紙切れを眺めた。

あまり上手とは言えない筆跡だ。乱雑で、しかし筆圧は弱いのか、字は細く薄い。

苗字がない、という事は、あれだ………どという事だ？

予想外の事にクルトの頭は混乱した。

戸籍をもたぬ、流浪する民だって親から子へと苗字は受け継がれる。

それなのに。

「用は済んだんだろ、とつとと帰れ」

男の言葉にかちんと来る。

だがその通りで、言い返す術がないのが現実だ。

仕方ない、名残惜しいが今日はここで引き上げるか。さつさと仕事の報告も終わらせて面倒をなくしたいし。

クルトはそう決めて、席を立つ。

「はいはい、それじゃね」

返して貰った物を丁寧に懐にしまい、非常に名残が惜しいが、二人に背を向ける。

「んじゃあ俺もそろそろ」

「ああ」

二人の会話が背中越しに聞こえた。

短い会話だが、とても羨ましい。

羨ましい。

自分には、一言もかけてくれなかったのに。

「イルマ」

未だクルトの肩に乗りかかっている猫にエーファは呼びかけた。

にゃああ

猫は長く、甘えるように鳴いた。

しかし、離れる様子はない。重みは消えなかった。

「……そう」

なにやら肯いている。表情は背後だから見えないが、声の調子は限りなく暗い。

「クルト、さん」

躊躇いがちに名前を呼ばれ、クルトは反射的に振り返った。

「イルマをよろしく頼む。あなたが気に入ったみたいだ」

そう小さく頭を下げるエーファは、とても悲しそうな様子だ。

自分が悪い訳じゃないが、ひどく胸が痛む。だが、同時にチャンスだとも感じている自分がいて、ちょっとだけ情けない。嫌いじゃないが。

「それは嬉しいね。それじゃちょっと、イルマちゃんを預かって構わないかな？」

「イルマが望むなら」

にやあと、上機嫌そうに猫が鳴いた。

それが答えらしかった。

2（後書き）

誤字訂正しました（22/9/8）

「ご苦労様です」

にこやかな笑みを貼り付け、メルディン社の男はクルトを歓迎した。

ここは前に通された応接間とは違い、男の仕事部屋らしい。窓を背に大きな仕事机が一つ、真ん中にソファと机のセットが一つ。入り口近くには秘書らしき女性が座る質素な事務机があり、給水施設もその横にある。

秘書の女性はなかなか美人だ。いわゆる知的美人というヤツで、銀縁眼鏡がクールで素敵。今はクルトを案内し、上司とクルトの為に茶を入れるべく給水場に立っている。

「どうも、これがご所望の物です。ご確認を」

社交辞令に付き合う暇はない。

短く返し、案内された席にも着かずにエーファのサインが入った封筒を男に差し出す。

「はいはい、せっかちな人ですねえ」

男は座ったまま軽く笑いながら、受け取る。そして、クルトの背中のあるものに目を止めた。

「可愛い猫ちゃんですね。あなたの猫ですか？」

笑顔のままだが、一瞬鋭いものを感じた。

「そんなもんだよ。懐かれちまってね」

はなからこんな奴に事情を説明する気はない。だが嘘をつく程ではなく、適当に言葉短く答えた。

クルトは嘘はなるだけつかないようにしている。それはクルトが誠実な好青年である、という話ではなく、単純に面倒くさがりなのと弱みを作りたくないからだ。

小さな嘘一つつくだけでもそれは矛盾となり、後々大きな弱みとなる可能性を持っている。

「それより早く確認してくれ。それで仕事は完了だな？」

「本当、せっかちな人ですね。貴方には折角だから我が社と、もしくは私と親しくしたいという考えはないのですか？　なかなか美味しい取引先だと思いますよ、私はね」

男は上機嫌らしい。

鼻歌でも歌い出しそんな勢いでそんな戯言を口ずさみながら、封筒からエーファのサインを取り出した。

「……エーファ、ね」

ある程度は予想はしていたが、サインを見た男の顔から笑顔が消える。

男が何か言う前に、先手を打つ。

「言っておくが彼女以外にはあの家には誰も居なかった。だからあなたの仕事の条件は満たしている筈だ。あんたが欲しいのは森の人間のサインだろう？　あの森には彼女以外の人間はいない。確認した」

クルトだつてただ待ちぼうけをしていた訳ではない。

エーファ達が帰ってくるまで、あらゆる方法を使って他に住んでいる人間はいないかと調べた。その方法は企業秘密だが。

「まあ、予想していた事ですけどね」

エーファのサインを机に無造作に置きながら、男はあっさりと認めた。

「魔女が亡くなっている、というのは予想していたケースです。その確認が取れただけでもよしとしましょう」

逆にクルトが拍子抜けした。

「……どういう意味だ？」

「聞きたいですか？」

男は楽しげに笑った。

むかつく笑顔だ。張り倒して殴りたい。

「フोगナー様、お茶の用意が整いました」

ちょうど、タイミングを計っていたかのように秘書が声をかける。

「ありがとうございます」

それに答えて、男は立ち上がった。

「どうです、詳しいお話が聞きたいのならお茶でも飲みながら、いくらかでもお話しますよ」

「……」

「ふふ、そんなに警戒しないで下さい。貴方はあの方のお気に入りだし、私も貴方みたいな人嫌いじゃないんですよ。貴方の仕事に対する姿勢、とても素敵です」

「……そりゃどーも」

あの方、というのはロゼッタの事か。共通の知り合いはそれしか思いつかない——って、ロゼッタとお茶。

クルトは思い出す。

昨日ロゼッタから渡された茶葉の存在を。

やべえ。すっかり忘れていた。折角ロゼッタがロルフに買いに行かせたのに。もし忘れていたとロゼッタに知られたらどうなるだろうか？ 少しばかり恐ろしい……。

「さあこちらへどうぞ。全部お話しますよ。私が存じている事は、ですが」

棒立ちしているクルトの横を通り過ぎ、男はソファに腰掛けた。

しかし、今はロゼッタの事はどうしようもない。また明日あの茶葉を持って訪ねる事にしよう。それしかない。

諦めてクルトは男の向かい側に腰を落ち着けた。

「どうぞ」

秘書がお茶を置いた。

美人だ。つい目で追ってしまう。悲しい男の性ってヤツだ。

ちらりと秘書もクルトを見た。

目が合う。

にこりと、小さく唇の端が上がった。

大人の女の笑い方だ。いい女だと、改めてクルトは秘書を評価した。

しかし彼女ほどではない。彼女だけが持っている、アレ。

目が引きつけられる、目が離せなくなる、あの強烈な輝きにも似た、なにか。上手く言葉に表せない。

「あの森の重要性を、貴方はご存じですか？」

唐突な話だ。クルトは素直に首を振った。

「いや」

元々クルトは街の人間ではない。街が発展するにつれ何となく流れ込んだ、街のチンピラみたいなものだった。だから森なんて気にした事もない。クルトにとってグレイソンは『森の街』ではなく、メルデイン社によって開発されつつある発展途上の街だった。

「でしょうね。街の人間も珍しい草が生えている、ぐらいの認識ですから」

「それで？」

「パワースポットというのはご存じですか？ 力が集まる不思議な場所という意味ですが、ご存じありません？」

「悪いがその手の才能は皆無でね、興味もない」

「簡単に言えば世界の力が満ちる場所、といった所でしょうか。我々が確認しただけでも世界に七箇所あるとされています。あの森もその一つですよ」

「へえ」

「我々としてはあの森が欲しいのです。他の場所はどれも手がつけられない物ばかりですが、唯一あの森はどうかできる算段がつい

ているんですよ。すごいでしょう？」

「悪いが何が凄いのか、全然分からない」

「そうですか、素直に分からないと言える事は素晴らしいですね。ああいう場所があるという事を理解している人間はごく一部です。知らない事を恥じる必要はありませんよ」

「別に恥じてねえけど」

ため息一つ。

クルトは聞き役に徹するのはやめた。

初めから分かっていたが、この男は意地が悪い。素直に聞き役に徹していたらいつまで経っても欲しい情報にはありつけない。時間をかけるのは嫌いじゃないが、男相手には勘弁だ。

「ご託は結構。俺が知りたいのは森に住む彼女の事だ。あの森がどうとかはどうでもいい」

「彼女の事が知りたいなら森をよく知ることです。彼女は森そのものですよ」

どういう意味だ？

あまりに抽象すぎて意味が分からない。

確かにある人間の生活様式を知ればその人間をおおよそ理解できると、クルトは長年の仕事の経験上知っていたが、男が言っている

意味とはズレを感じた。

クルトが詳しく聞き出そうとした時、

「フォグナー様、お時間です」

秘書が、またまたタイミングを計ったかのように割り込んできた。

秘書は男の前に用意したお茶を下げた。クルトの分は下げない。

流石に失礼だと思ったのだろうか。クルトにしてみればはなから口にする気はなかったので、一緒に下げて貰っても一向に構わなかったのだが。

「おや、もうそんな時間ですか」

いけしゃしゃと男は呑気に言う。

「それでは私はこれで。これから会議ですので、申し訳ないですね」
全く誠意の欠片も感じさせない謝罪を口にして、男は立ち上がった。

「待て、あんた結局俺の質問には答えてないだろ」

「彼女の事について知りたいのならその猫ちゃんに聞いてみればよろしいのでは？ 彼女の最も身近な存在ですしね」

男は猫を知っていた。

みゃあ

クルトの背中で猫はこびるように甘い鳴き声を上げた。

「あんた知ってて……！」

「魔に才ある者なら見れば分かります。誰でもね。その猫は特別ですから」

「フオグナー様」

秘書が遮るように声をかける。

その声が若干先程よりも冷えていると感じたのは、クルトが神経を尖らせていたからかもしれない。

「はいはい、お喋りが過ぎると怖い人に怒られちゃいますからね。失礼しますよ。もしお暇があればまたお茶でも飲みに来て下さい。貴方なら歓迎しますよ」

「……ご冗談」

「それは、残念」

ふふ、と、とびきり胡散臭い笑顔を残し、秘書と共に男は扉の向こうに消えた。

残された、一人と一匹。

3（後書き）

設定地味に変えました。。
力が満ちる場所の数13↓7です。

——猫ちゃんに聞いてみたらよろしいのでは？

男の胡散臭い言葉を苦々しく思い浮かべながら、クルトは部屋を無遠慮に眺めた。

なにもない部屋だ。ここは本当に奴の仕事部屋なのだろうか、疑うくらいに。

秘書の机と来客用のソファ一式、男の机以外には何もない。本とか書類をまとめたたくさんのファイルを整理する棚とか、そういう物が一切ない。だからこそ二人はクルトを残しても平気なのかもしれない。というか、なにも秘書まで一緒に行かなくても良くないか？ 客を残して部屋を空けるって、それはお茶を下げる下げないなど問題にならないくらい失礼な話じゃないか？

なんて、細々考えながらもクルトは更に細かく観察する。

秘書の机にはいくつかのファイルと何かのケースが綺麗に、秩序正しく整理されある。のだが、男の机の上には嫌みな羽ペンとインクケース、使い捨てのメモ帳とさっきクルトが渡したエーファのサイン以外には何も無い。机の中でも開けて見れば別かもしれないが、そこまでする気にはなれなかった。

さあて、どうするか。

改めて己に問えば、クルトは重大な問題に行き当たった。

（やつちまった！ 仕事の話がうやむやのままじゃえか！）

依頼完了はしたのか、彼女は何者なのか。そういえば呪術とやらもかけられたままだ。

そのどれもが結局曖昧なまま終わってしまった。どうする？ ここで奴を待ち、改めて問いたただすか？ 会議と言っていたから何時間かしたら戻ってくるだろう。まだ陽も高い。会議が終わればそのまま帰る、という状況にはならないだろう、多分。

「どうっすかね……」

つい言葉に出てしまう。

クルトは正直、少しだけ参った

考えていても仕方ない、行動あるのみ！ という、当たって砕けるが信条のクルトであるが、そんなクルトでも思い悩む時はある。弟程ではないが。

クルトの虚しい独り事に答える者はいない。ただ虚しく主が消えた空虚な空間に消えゆくのみ。

の、筈だった。

うじうじ悩んじゃってバカみたい。あのいけ好かない男が言っていたように聞きなさいよ、気になるならね。アタシはどうだっていいんだけど

人が喉を震わせ、空気の振動を利用して耳から入ってきた声と違い、その声はクルトの頭に直接響いた。

「！」

びくりと身体が震えた。

同時に背中の中の猫が目の中の机の上に華麗に着地した。

しゃらりと。

そんな涼やかな音がよく似合う、見事な着地の様だった。

実際には物音一つしなかったが。

改めて自己紹介してあげるわね、アタシはイルマ。エーファの使い魔をやっているわ。今アンタに話しかけているのは直接頭の中、テレパシーってヤツね。便利でしょ？

あ、ああ。

呆然と、クルトは胸の中で肯いた。

猫は苛立たしげに身体を逆立てた。

ナニかおっしゃい！ アンタの為に折角アタシから話しかけてやってるのに無視するとはイイ度胸ね！ 魂丸ごと覗いてやりましょうか！？

声はハスキーな女の声で、いかにも姉御といった貫禄を持ってい

る。子供のような彼女にはぴったりの使い魔かもしれない。

そんな事を考えながら、クルトは慌てて口を開いた。

「ちょ、ちょっと待てって。すまない、唐突で驚いたんだ。まさか猫が喋るとは、ね」

猫は嘲るように眼を細め、しっぽを揺らした。

アタシは喋ってないわ。テレパシーだって言ってるでしょう

その違いが、クルトには全く分らなかった。

ぽかんとしたクルトの顔を見て、賢明な猫は察したらしい。少し苛立たしげではあるが、解説してくれた。

だから、テレパシーよテレパシー。アタシは今、口を開いていないでしょ？ 流石のアタシでも人の言葉を話すのは骨が折れるの。そんな喉の構造もしてないんだから。だから、直接アンタの頭の中に言葉を送っているの。お分かり？

こくこくと、クルトは肯いた。

口を開いていないのだから喋っているのではない、という論理は理解できる。全くもってその通りだ。そして、このテレパシーとやらは一方的なものらしい。クルトの思考そのものを感知するものではないようだ。先程イルマがクルトの胸中の動きを察せられない事で確認できる。プライバシーは守られるようで、少し安心。

理解できたのなら実行なさい。アタシに聞きたい事あるんでしょ

？

猫は挑発的だ。

意気地がないならやめときな、とでもいうように。

クルトは深く息を吸って、吐いた。

「野郎が言っていたのは、どういう意味だ？」

どれのこと？

逆に聞き返され、クルトの頭の中に瞬間的にいくつも広がった。

一番は彼女、エーファのこと。自分よりも彼女を知っている口ぶりは腹が立った。

二番はサインのこと。男は魔女が既に亡くなっているという確認で十分だと言った。それはどういう意味なのか。

三番は――

「あんたは何者だ？ ただの猫じゃないんだろ？」

なあに？ それが一番最初に聞きたい事？ まあ、アタシとしては興味をもって貰えていい気分だけど

軽口を叩きながらも誇らしげに姿勢を正し、猫、イルマは告げた。

アタシは魔女見習いのエーファの使い魔、イルマ。使い魔だから

って舐めないでね。アンタを叩きのめすくらい造作もないんだからそれはどういう脅しのつもりか。

クルトは眉根を寄せて、一瞬考えこんだ。

たかが猫にやられるとは、一体自分はどれほど優男なのか。使い魔とはいえ、たかが猫一匹。どうなるというんだ？ 使い魔と言われても全く意味が分らないし、目の前に居るのは猫。猫以外なものでもない。

……あんまりナメた事考えてると、痛い目見せるわよ

「じよ、冗談だつて」

ふん、とでも言いたげにイルマは乱暴にしっぽを振った。当たりはしなかったが、当たったら痛そう
な、素早い一撃だ。

「それじゃ次！ と、言いたい所だが、場所変えようか。いつまでもここに居てもなんだしな」

ええ、それもそうね。で、次はどこに招待して下さるのかしら？

イルマのまるで貴婦人のような物言いにある人物を思い浮かべながら、クルトはなるだけ仰々しく頭を垂れ、言った。

「そうでございますね、まずはゆるりと落ち着かれる場所を――」

その言い方キモいわ。ム力つくし、即刻やめなさい

「……」

女ってヤツは。

つい昨日、彼女の家であった男と同じ事をそうは知らず、クルトも内心でうめいた。

「はいはい、それじゃ行きますよ」

結局出されたお茶には口をつけずに、クルトは席を立った。

イルマも机から飛び降り、しゅたつたと、クルトの背中に駆け上った。

引っかけられた爪が少し痛かったが、耐えきれない程でない。それよりも気になるのはスーツの方だ。

一張羅という程ではないが、決して安くもない。

「やれやれ……」

溜息一つ、クルトは男の部屋を後にした。

ずしりと、イルマの確かな重みを感じながら。

カフェバー『カツ』。

クルトはイルマを伴って店に入るとしたら、やはりここしか思い浮かばなかった。

他に店を知らない訳じゃない。

これが彼女だったら、エーファだったら色々連れて行きたい場所があった。

まずはショッピングから。

シャツにロングスカートという、清纯お嬢様スタイルも嫌いじゃないが、若干クルトの趣味から外れている。クルトはどちらかというと年上か、せめて同い年の遊びなれた女が好みで、清纯乙女を前にするとむず痒くていけない。

次にお食事。

腹いっぱい食うのはいけない。デートなら尚更。まず軽く食事して、次はバー、それが彼女が望むならばスイーツもいい。

そして次は――

時刻はいつの間にか夕方。まだ陽が高かったから気付かなかったが、ふと腕時計を見ると七時を過ぎていた。

「……ペットはお断りだ」

マスターは相変わらずな強面の顔を更にしかめ、短く言った。

猫と言わなかったのは店の名前を気にしてだろうか、とクルトは遠慮なく店に入りながら意地悪く考えた。

『カツ』とは異国の言葉で猫という意味だ。別に猫も動物の一種なのだから素直に「猫なんか連れ込んでんじゃねえよ！」と怒鳴ってもいいのに。まあしかし、顔が怖いので有名なマスターだが、クルトは今までこの男が怒鳴る所か声を荒げる所さえ見たことがなかった。

「まあそう言うなよ、このイルマは賢いからな、粗相なんぞ」

しねえよ。

イルマの名誉の為に、そしてマスターを安心させてやる為に言ったのに。

ばちいんと、まるでしなやかな鞭が無慈悲に地面を叩いたような、そんな身がすくむ音が店内に響く。

クルトの両耳は確かにその音を間近で聞き、やがて顔が、特に鼻や両目の下の皮膚がひりひりと痛み出すのをどこか他人事のように感じ取った。

「……粗相が、なんだ？」

ばちん

言ったのはマスターなのだが、再び乾いた音がし、また鋭い痛みと一瞬遅れでひりひりとする痛みがクルトを襲った。

「……それ、禁句で」

ようやく、クルトはそれだけマスターに返す。

「……ああ、そうだな。食事場でする話じゃねえな」

もつともな事を言って、マスターはクルトの提案を受け入れた。

みゃあ

猫は素知らぬ顔で媚びるような鳴き声を上げる。

「……とりあえずコーヒー頼む」

ひりひりと痛みだした箇所を努めて無視して、クルトはカウンタ―に腰を落ち着けた。

知らなかった。

とん、とクルトが腰を落ち着けると同時にカウンターに飛び乗ったイルマを横目で睨みながら、クルトはしみじみと思い知る。

あの艶やかな猫の尻尾の、攻撃力を。

鞭で叩かれた経験など無いから絶対だとは言わないが、アレはそこらの鞭よりもずっと凶器に違いない。

アタシにも同じ物を

「は？ 猫が――、いやいやちょっと待て、分かった、分かったからそれはやめてくれ」

イルマの尻尾がゆるりと机の上の自分の腕に向けられるのを見て、クルトは慌てて懇願した。

「どうした？」

「ああ、えーと、この猫ちゃんにも同じのを一杯」

「……ボウルでもいいか？」

「ああ、悪いな」

マスターは嫌そうだったが、断りはしなかった。

猫が好きなかもしれない。だが、だからといって猫にコーヒーを提供するのは如何なものだろうか。衛生的にも……ってやめよう。これ以上思考するのは。無駄であるし、また鞭をもらうのは勘弁だ。

「ほらよ」

「サンキュ」

差し出されたコーヒーはいつものように香り高く、クルトの心を

落ち着かせた。

ちらりと横を見ると、可愛らしいピンクの深めの皿にコーヒーが
いれられている。イルマは不満げに目を細めているが、文句は言わな
かった。

……やっぱり猫が好きなのか？

マスターに目を戻すと、マスターは決まり悪げに視線をそらした。

まあ、別にいいんだけど。

クルトは視線をコーヒーに戻した。

ゆらゆらと、その漆黒が揺れているように見えるのは気のせいだ
と知っている。正確には光の加減だが、クルトにはどうでも良かつ
た。その揺らめきと同調するような感覚を想像する事でクルトは不
思議な安心感を覚え、それが大事だった。

……。

まったりとした、沈黙が室内を支配する。

さて、話を続けましょうか

沈黙を破ったのはイルマだった。

顔を向けると、イルマはちょうどちろちろと舌をだし、コーヒー
を舐めている所だった。

「……サインを欲しかった理由は？」

少し冷め過ぎたコーヒーに口をつけながら、クルトは尋ねる。

マスターがやけにでかい独り言だな、というように怪訝な顔をしたのが見えたが、口を挟む事はしなかった。すぐに己の仕事に戻る。クルトからは何をやっているのか全く見えなかったが、おそらくまた新しいカバーでも縫っているんだろうと見当をつけた。

あの子もそうだけど、魔女はこの国の人間じゃないの。印鑑も持っていないし、戸籍だってないのよね。だからサインしかないワケ

「なんで？ 移民でも戸籍は取れるだろう？」

この国は比較的移住しやすい国に入る。仕事を持ち、国に税を何年か払えば戸籍も取れ、印鑑も取れる。

人の法は魔女を支配する法じゃないわ。それに国が出来る前から魔女はあの森と共にある。順番で言うなら魔女が先なのよ？ 偉そうな顔しないで欲しいわね。まあ、近頃の連中は話が分かる人ばかりでアタシも楽なんだけど

猫が、一体どんな苦勞をするというのか。

クルトは疑問に思ったが口には出さないでおいた。

あの連中は森が魔女のモノだって、勘違いしてる。だからサインを欲しかったのよ

「勘違い、ね……」

元々大地を誰かのモノとするのは勘違いよ。アタシ達に言わせればね。アンタ達人間からすれば合理的なシステムなんでしょうけど、なんて傲慢なのかしら。アタシなら恥ずかしくて生きていけないわ

「左様ですか」

適当に話を合わせる。

そういった話はクルトにとってどうでもいい。興味もない。

疑問は解消されたかしら？

イルマは横目でクルトを見た。

「……どうして、答えてくれるんだ？」

改めて問われ、クルトは不思議に思う。何故イルマがクルトに付き合うのか、疑問に答えてくれるのか。そんな義理も必要性も、イルマにはないだろうに。

下心が気になるかしら？

「下心つつーか、打算？ あんたはお人好しって感じじゃねえし」

あら心外ね。アタシには下心があっても打算はないわよ？

それも人として、いや猫としてどうなのか。

クルトは喉元まで出かかった突っ込みを飲み込む。猫としてなら

むしろ正論でしょうと、逆に言われそうだ。猫の世界なんてクルトは知りようがないから反論できない。

「……じゃあなんだ、あんたの下心はなんなんだ？」

やあね、直接聞くのは野暮ってもんでしょ？ もっとじらして頂戴

「……」

こういう奴なのか。

クルトはイルマをまじまじと凝視した。

一見ただの黒猫。毛並みの良い、月のような金色の眼を持った猫だ。

クルトの横で、ボウルの中のコーヒーをぺろぺろ舐めている。

どこにでも居そうな、猫だ。そこらに居る猫と変わらない。クルトには違いが分からない。

「それじゃ最後の質問。彼女は、なんなんだ？」

魔女見習いよ。まだ一人前の魔女じゃないの。継承はまだ終わっていないから

「魔女、ねえ……」

このままじゃあの子は住む場所を失うわ。アンタの所為でね

「……」

己の仕事を完遂させる事が彼女にとって不利に働く事を、クルトは重々承知していた。もつとも彼女の事がなくてもあんな怪しい仕事、なにかやましい事に繋がっているに違いない。だから引き受けたくはなかったが、事情はどうあれ一度引き受けた仕事だ。

だから、完遂させる。己の全てをもって。それがクルトの、『ボルト事務所』の誇りだ。

チンピラじみたクソツタレの生活は卒業し、立派、とは言えないかもしれないが、ちゃんとした社会人になる。

その為の誓いが、一度引き受けた仕事はどんな仕事でも完遂させる事。

単純明快。頭の悪い自分達には似合いの誓いだ。

だからこそ、絶対に破れない。破ってはならない。

破ればまた遠いあの日のような、暴力と理不尽の生活に逆戻り。

そんなのはごめんだ。もう二度と、戻りたくない。あそこから自分達は進化した。退化なんて有り得ないだろう？

「で、俺にどうしろと？」

アタシに聞く事じゃないわね、ソレ。アンタがやりたい事をやりなさいな。勘違いしないで頂戴、アタシはただアンタが気に入ったからついて来たの。ずっとあのコと二人きりの生活だもの。潤いが

足りないのよね。だから少し息抜きにアンタを使わせて貰ったの。あの影薄い男が余計な事言わなければ話しかけもしなかったわよ

あのメルディン社の男に感謝すべきかもしれない。クルト一人ではともイルマが喋れるなんて気づかないだろう。だがやっぱり素直に感謝はできない。やり口が気に入らないし、あの男の存在そのものがいけすかない。

クルトはイルマのやや愚痴っぽい一方的なテレパシーを聞き流しながら、考える。

仕事はもう終わった筈だ。

明日あたり銀行の口座でも見てみよう。報酬が振り込まれている筈だ。仕事は終わったのだから。だから、問題ない筈だ。明日からメルディン社の利害に反する行動を起こしても。

もう契約は終わったのだから。

「俺は……そうだな、彼女とお知り合いになりたいね、是非」

アタシをダシにお使いなさいな

イルマはあっさりと言った。

挑戦的にこちらを見ている。またこれだ、品定めをされている。あまりにもあらか様に。

「ああ、それは勿論。期待してるよ」

意地になり、特上の微笑みでクルトはイルマに答えた。何に對抗しているのか、自分でも良く分からないまま。まだまだ子供っぽい所があるという事だろう。

「……気味の悪い奴だな」

ぼそつと、マスターの呟きが聞こえた気がしたが、無視。

にやあ

イルマは目を細め、鳴いた。

クルトには何を言ったのか、分からない。イルマの言葉を解するのはこの世でただ一人、イルマの主であるエーファだけである。

だから、

「退屈せずに済みそう」

という、とても嬉しそうなイルマの声を理解した者はいなかった。

「……コーヒーでも気に入ったか？」

「さあね。悪巧みの顔にしか、俺には見えねえけど」

にゃあ

黒猫はもう一度鳴いた。

「……困ったのう」

立派な顎鬚をなでながら、老人は全く困っていない様子で呟いた。

老人の前には一通の申請書があった。

王国の辺境にある、とある森に関する申請書だ。もう既にその申請は通り、全く問題なく受理されていた。

「ほんにほんに、参りましたのう」

これまた全く参っていない様子で相槌を打つ、頭の薄い老人が顎髭の老人の向かいに座っている。

とある宮の一室。

飾り気のない室内だ。机や座り心地のよい肘掛椅子といった必要最低限の調度品が、静かに目立たぬように配置されている。

「全く……今の若い者はしきたりを無下にしよって敵わん。暗黙の了承を知らんのかのう」

「知らんのでしょうか……それとも、あるいは」

「あるいは？」

「世代交代、と言いたいのですかねえ」

「じじいとはばあはとつとと死ねと」

「ほんにほんに、お互い耳が痛いすなあ」

「なんのなんの。わしはもう引退したが、お主の所はまだじゃろう？
だから耳が痛いのはお主だけじゃ」

「ほんにや、これは一本取られましたな」

「ほっほっほっほ」

「ほっほっほっほ」

二人は楽しげに乾いた笑い声を上げた。

やがて、顎髭の老人が少しだけつぶらな瞳を細めながら切り出した。

「さて、先にも言ったが、わしはもう隠居した身。そのようなわしの元にわざわざ、このような物を持って来てどうしたのじゃ、大臣殿。わしにはもうどうする力もないぞよ」

頭の薄い老人は皺を更に深くして、微笑んだ。

「御冗談を。隠居の身とはいえ、御前のお力は健在でございました。だからこうして、わたくしめは御前のお力を頼りに参ったのです」

「こき使いに来よっただけじゃろうが」

「ほほほ。そんな、恐れ多い」

「ふん、世辞にも飽きたわ。はよう本題に入れ」

「それでは恐れながら。魔女が亡くなりました」

促され、頭の薄い老人がまとう空気が微妙に変わる。

「……そうか。ばあはもう死んでおったか」

顎髭の老人はぼつりと、

「薄情な女だとは知っておったが、死んで挨拶もせんとはほんに薄情な奴じゃの」

先に逝った古い友人をなじった。

「と、言うことはじゃ、あの森はどうなっとるんじゃ？ 確か小娘を跡目に引き取っておらんかったかの？」

「左様です。ですが娘の方はまだ半人前でして、これがとても魔女とは言えぬ存在……森にはよく馴染んでいるようですが」

「そうか……」

顎髭の老人は唸った。

魔女がいれば、何も案ずる事はなかった。

魔女は魔女だ。

あの森は魔女のもので、それは誰もが知っていた。

王国には王国の法があり、法的にはあの森は王国の物である。が、それはそれ、これはこれという、建前と本質があ森にはあった。

魔女だから。そして、あの森は魔女の森だから。

たったそれだけで、あの森は特別だった。

顎髭の老人は知識として知っている。あの森の異常さを。

王国お抱えの学者共の中に煩いのがいて、かの者は森の重要性を
とくと説き、あの森を魔女などという胡散臭い非国民の好きにさせて
いいのかと、散々喚いていた。

現役の頃は国王権限で丸無視していたが、どうも息子は考えが違
うようだ。この申請書が通った事でよく分かる。

魔女がいれば。

彼女が存命していれば、どうとでも出来ただろう。王国の法など
彼女はものともしない。ものともしない強さが彼女にはあり、己と
しても彼女に不必要に干渉する気はなかった。

それは何代も続くこの国の伝統であり、慣習でもあった。

稀に現れた野心に燃える暴君も魔女に手を出したが最後、恐ろし
い最期を迎えたと歴史書は語る。

「さてはて、どうしたものかう」

口ではそう言いながらも、前国王ジークフリード・フォン・キルヒは分かっていた。これからなすべき事を。

その為に目の前に座る老人はわざわざ訪ねてきたのだという事を、顔を見た瞬間から理解していた。

現國務大臣クロイツ・フォン・ヴァルツ。

彼の薄い頭を見た瞬間から、ジークフリードは分かっていた。

「それではお耳を拝借」

クロッセル兄妹の一日

がんがんする頭を抑え、リサは起き上がった。

ひどい頭痛だ。がんがんと頭が痛む。これが噂の二日酔いというものだろうか？ お酒を口にした覚えはなかったのだけれど。

ちよつと変わった女の子——というには年がいつているかも。リサよりもいくつか年上ぽかったし、身体も大きい。言い換えよう、ちよつと変わった女性エーファの入団式は楽しかった。思いがけない人にも再会できたし……。

ヴィリバルト・オルゲン。

兄の一つ上の先輩で、リサの初恋の相手だ。もつとも初恋といつてもそれほど情熱的な恋ではなく、遠くから友人達と共にきやーきやー騒いで眺めているだけで十分な、アイドル的な恋だ。ヴィリバルトとお近づきになるよりは、共にヴィリバルトの事で友人達を盛り上がっていたい。ヴィリバルトは身近なアイドルだった。

ヴィリバルトに会うのは久しぶりだった。学校を卒業してからは警官学校に進学し、兄が都の王立大学に進学したら疎遠になったし、兄が戻ってきてからも直接会う事はほとんどなかった。

その人と、たくさん喋った。笑いあった。

エーファがスープ好きで、ヴィリバルトはスープは食べた気がし

ないから嫌いだという事。

エーファが暖かい飲み物だと思えばいいとんちんかな事を言い出し、いやそれはスープとは違うだろうと、ヴィリバルトは熱弁を奮った。嫌いな物だからこそ熱くなっただろうか？しまいにはエーファにどうでもいいと言われてたつけ。「お前なあ」って、ヴィリバルトは呆れ、兄はくすくす笑っていた。リサはなんとなく口を挟めずに、二人の短い会話を聞いていた。

一人仲間外れにされた気分。ちよつと面白くない、ほんのちよつとだけ。そもそもあのパーティーはエーファの入団式。エーファが楽しく仲間達と過ごせたらそれでいい。まだ二人しかないけど。

ヴィリバルトさんも入団すればいいのに。

リサは着替えながら思った。

ついでに誘えば良かった。我らが『ヴォルグ』には兼業を禁止する規則はない。問題はない筈だ。少なくともこちら側には。

なんて、うだうだ考えていたら気づいた。

さつきからヴィリバルトの事ばかり。今もそう。思い返されるのはヴィリバルトの呆れたような顔やしめ面ばかり。胸の奥も甘く疼いた。まるでアレのよう。

みれん。

いやでも、未練だなんて。告白だっしてない。振られた訳じゃない、未練もくそもない。ナニ勝手な事言ってるんだろう？

うだうだと回る思考の渦を、ぶるんぶるんと首を力の限り振り切
って払い落とす。

まだ夏休みの最中だけど、もう残りも半分だ。残った宿題も片付
けねばならない。のんびりうだうだしている場合じゃない。気合
を入れて、しっかり朝ご飯……て時間じゃないけど、しっかり食
べて宿題をしよう。うん。

そう今日の予定を決めて、リサは部屋のドアを開けた。

「おはよう、お兄ちゃん」

おはようって時間じゃないけど。

カウンター席に座りながらそう挨拶した妹に内心突っ込みながら、
エルヴィンは挨拶を返した。

「おはよう。なんか食べるかい？」

「うん、お願い」

「分かった」

夕方の仕込みをしつつ、昨日の夜の、正確には今日の朝まで続い
た宴会の残り物を皿に盛った。

久しぶりにあんなに遅くまで飲んで食べていた。まだ疲れが残っているのがよく分かる。昔は徹夜なんて何でもなかったが、最近はどうでもない。疲れが取れない。普段ならば昼前にはいつも店を開けるのに、今日は休んでしまった。体力が落ちた所為か若さがなくなった所為かエルヴィンには分からなかったが、調子に乗ると痛い目に合うという事だけはよく分かった。

「はいどうぞ」

「ええ、これ昨日の残り物じゃない！ 飽きた」

「贅沢言わない。僕だって忙しいんだからさ」

「ぶーぶー、どうせ暇じゃない」

「そんな事無いよ？ 確かにお昼は暇な時もあるけど、夜はそこそこなんだから。バイトでも雇おうかな、って考えるぐらいにはね。リサにも手伝ってもらったでしょ？」

「何回かはね……そうだ、あれが看板娘ってヤツよね？ きっとその所為だわ！」

胸を張って自慢げに言う妹を見ると、たまに頭が痛くなる。リサがそんな時は大概問題を起こしている時だ。

「はいはい、そうかもね」

だが、その事に関してはあながち外れではない。確かに男一人でやっていた時よりは客の入り良かった気がする。男性客だけではなく、女性客の方も。

ほとんど趣味でやっていたようなものだったけれど、そろそろ本腰を入れる時期なのかもしれない。

これまでは特に何も、自分の将来について考えることはなかった。ただぼんやりと、時間が過ぎていく、その先にやはりぼんやりと将来はあるものだと、そう考えていた。

昨日の宴会の所為だ。

それで色々思い出した。ヴィリバルトと長く話しこんだお陰でもある。先輩面して人生なるものを様々語っていた。エルヴィンとしてはエーファともっと、できれば二人きりでどうせなら話してみたかったが、リサがエーファには付きっ切りだった。よく話が尽きないものだと感じた。時々是自己やヴィリバルトを交えながらも、始終二人はべったりくっついたように話し込んでいた。

「まあ、そんな訳で近いうちにバイト雇うかもしれないけど、変なちょっつかいかけないでよ?」

「どういう意味?」

「ギルドに勧誘、とかだよ」

「強制はしないわ」

しれつと言いつつ図太さにむしろ感心する。自分も図太い方だと自覚はしているが、リサには負けれると思う。

「勧誘自体やめてもらいたいね」

「だってここがうちのギルドの本部じゃない！」

「あのねえ、ギルドだって言ってもろくに活動してないじゃない。そもそも君はギルドがなんなのか、本当に分かってる？」

リサは驚いた事に即座に言い返さなかった。これまでは何かしら、冒険者の集まりだの冒険する団体だの言い返してきた。それが、ない。

嫌な予感がして仕込み中の具材から目を離し、リサに目を向けるとリサは真剣な顔をして言った。

「そうね、それを真剣に考える時が来たのよね。うん、分かってる。あたしなりに考えてみるわ」

違う、僕が言いたいのは真逆の――

「ご馳走様、お兄ちゃん。美味しかったよ。それじゃあたし今日は宿題してるから、忙しくなったら呼んでよ。気晴らしに手伝ってあげる」

とても言い笑顔で、そう言われたら兄としては何も言えなかった。

まるで憑き物が落ちたようにすっきりとした笑顔で、リサは食器を流し台に置くと、そのまま二階の部屋へと上がっていった。

残されたエルヴィンはぽつりと、

「……弱ったね。逆に火をつけちゃったかな？」

自らの失言を悔やんだ。

そして今後の懸念を口にした。

「……利用料は、払うべきなのかな？」

リサにとってギルドとは、これまではごっこ遊びの一つだった。ちゃんとした活動目的があった訳じゃない。子供の頃は本の中の冒険に憧れ、なんとなくギルドに入っていれば冒険に出れるものだと思いつ込んでいた。やがて年齢を重ね、すこし現実という物が見えてくると、冒険者なんて職業は無理事に気づく。それでもリサはギルドを止められなかった。

ヴィリバルトの事だっそう。恋愛ごっこに過ぎない。

だが、リサの中で少しだけ変化が生まれていた。

明確な変化ではない。いつのまにか、少しだけ、変わっていた。本人すら気づかぬ内に。

魔女だと名乗った、彼女。

エーファ。

綺麗な人だ。それに、不思議な人。わくわくさせられる。ヴィリ

バルトと知り合いらしいのにも驚いた。

「とにかく、今日は宿題がんばろ。明日はそれからよね」

明日はエーファの家に遊びに行ってみようかな。

なんて、明日の計画を考えながらリサは宿題に取りかかった。

ヴィリバルトの一日

朝帰りならぬ昼帰り。

母親には「送り狼だなんてあたしゃあんたをそんな男に育てた覚えはないよ！でもよくやった！流石あたし達の息子だよ！」とけなされ誉められた。ひどい誤解をしているのは分かったが、ヴィリバルトは訂正する気力がなかった。それよりも早く横になりたい。

のろのろと自室に戻り、着替える事もなくベッドに倒れ込む。

いつも目に入るから近い距離かと思えば、意外と森は遠かった。森の入り口近くにある『秘密の近道』を通ったお陰で魔女の館までは一瞬だったのだが、森と街は意外に遠かった。歩いて一時間程だろうか？見回りで歩く事は多々あるから歩く事は苦痛ではない。ただ近いと何となく思い込んでいた二つの距離が、歩けども歩けど

も縮まらないのが苦痛だった。

おまけに。

少し前をどんどん進んでいく、あの少女。

身体はしばらく見ない内に女性らしく、また背丈も伸びていたが、口を開けば昔のまま。ぶっきらぼうで淡々として、でも己の感情に素直な子供のような彼女。

初めて会った時は自分も警察学校を卒業したばかりの新米で、彼女も今よりもずっと幼かった。小柄で華奢で、乱暴に扱えば壊れそうな儚さがあった。今では当時の面影は全くななくなっていたが。

別にエーファが大女だという訳ではない。同僚や知人の中にはエーファよりも大きな女性だっている。ただ昔に比べると、あの不用意に触れれば壊れてしまいそうな儚さが霧散していた。その差が大きい。昔を知っているので、尚更。

それでもあの宝石みたいな綺麗な目は変わらなかった。彼女は恐れずに人を真っ直ぐに見つめるから、耐性のなかった頃は目のやり場に困った。

今日、昨日から今日にかけ、自分はどこがおかしくはなかっただろうか？ 不自然な態度は取ってなかっただろうか？ 思い返せば気が滅入る。おかしい態度を取った事を思い出したからではない、そんな事を気にする自分に対してだ。その小ささに情けなさを覚える。

それに、あのボルツとかいう胡散臭い男。

エーファが全く気にしていなかったら問いただせずにいたが、あの男はどう見ても裏社会の人間の匂いがした。警官として過ごしてきた数年間で身についた感覚だ。どうもまっとうな社会人の匂いがない。しかしボルツという名も、あの垂れ目の顔にも覚えはなかった。ので、そう神経を尖らす必要はないと結論づけた。

しかし気になる。とても気になった。詳しく聞きたかった。どう
いう関係なのかと。

理性と見栄で何も聞かなかったが、男に問いただしたかった。根掘り葉掘りと。

男が帰った後にそれとなくエーファに聞ければ良かったが、多分アレはなんにも分かっていないに決まっている。そんな気がして、あと見栄も邪魔して結局何も聞かずにそのまま別れた。

そうして、こうしてうじうじと思い悩んでいる。

「……寝るか」

こういう時は寝るに限る。

忘れるように。

起きたら、すっかりと忘れられているように、深く眠ろう。

明日はまだ休みだが、明後日は仕事だ。

上司に無理矢理取らされた夏休みが、明日でようやく終わる。明

後日からは仕事だ。

いつもの日常。

変化のない、代わり映えのない日常が戻ってくる。

ヴィリバルトはその事に安堵を覚えると共に、物足りなさを感じながら眠った。

弟の一日

上機嫌な兄を見送って弟は深く椅子に座り、息を吐いた。

「……………」

なにか言葉に吐き出して、この胸のもやもやを吐き捨てたい。だ
がいざとなると言葉が出ない。

デカイ身体に似合わず、案外自分は気が小さい。そしてくよくよ
しがち。決断も遅い。カッコ悪い所だらけだ。

一人己を省みて、ロルフは落ち込んだ。

くらい。

くらすぎる。

が、まあ分かっていてもすぐには変えられないのが己、性格、個
性というものか。そんなあっさり変えられたら苦労はしない。

人前で取り繕う事には慣れたが、結局変わりはしない。

己は根暗で、くよくよしがちで、決断も遅い。

颯爽と駆けていく兄とは大違いだ。

「さて……」

一人呟く。

今日は一日空いた。他に抱えている仕事もない。兄が言った通り寝ていようか。金を使わないのが一番だから、寝ているというのはあながちまずい選択ではない。退屈で、非生産的なこの上ないが。

さて。

声には出さず、考える。

行ってみようか、な。

行きたくても中々行きづらくて今まで行かなかった、あの場所へ。

図書館。

市民ならば誰でも利用できる場所であるがロルフは今まで行った事は無い。場所だけは知っていたが、入った事は無かった。

入りづらかった所為だ。ロルフの一方的な偏見でしかないのだが、何故かロルフは入りづらいつと感じる。あの入り口を見る度に。

古びた大きな建物。何かの役所のようにも見える、あの大きな入り口。

ロルフの知っている図書館は旧市街の方にある。新市街の方にも

あるにはあるらしいが、ここからは遠い。だから、行くとしたらあの旧市街の図書館なのだが……。

「よし、行くぞ」

誰も聞いてる者はいないのに、ロルフは言い出さずにはいられなかった。むしろ自分自身に言い聞かせているのか。もう一度行くぞと口にして、ロルフは椅子から立ち上がった。

そしてうろつくと部屋を意味もなく歩き回り、出かける準備をしているつもりになる。出かける準備など、財布をポケットに突っ込んで事務所に鍵を閉めて終わりなのに。まあ図書館に行くなら借りた本を入れる袋を用意した方がいいか。

そんな事を考えながら、ロルフは部屋を歩き回った。

うじうじと、結局行くのか行かないのか、決めれないまま。

夢を見ていた。

空を飛んでいる夢だ。

実際に空を飛んだ経験は無かったが、記憶はあった。辛うじて、うつすらと残っている。普段は思い出す事はないが、時折夢に見る。

腕が大きな翼となり、羽ばたいている夢。

飛ぶ感覚は覚えていない。ただその光景はよく覚えている。夢で鮮明に蘇る程に。

大空を羽ばたいているのを、例え夢でも見るのは気分が良かった。

しかしだんだんと、エーファとしての意識が勝ってくる。

大空を舞う光景は徐々に薄れ、暗闇に。目を閉じている所為だ。

強い光を感じる。その窓からの明かりの強さで、もう大分陽は高いようだ。エーファは見当をつける。

ごろんと、光から逃れるように壁側へと寝返りを打った。

意識のはっきりしないこの状態。

寝ているのか起きているのか。限りなく起きているが、まだ夢の中に浸かっている状態。

エーファはこの状態が好きだ。

様々な事を次から次へと、取り留めもなく思い出される、この時間が。柔らかなまどろみの中が。

今日は、いや昨日、一昨日は色々あった。

まずリサと出会い、パーティーとやらに参加し、たくさん食べて飲んで、話をした。

もう一生分の話をしたのかもしれない。元々、話の引き出しも少ないエーファだ。話題の小説も、演劇も、音楽も全く知らない。スポーツも政治も興味ないから、話す事など限られていた。それでも気づけば結構な時間が経っていたから不思議だ。

もうどんな話をしたのか、エーファの記憶は曖昧になっていた。

普段どんな風に生活しているかとか、そんなとりとめもない話。好きな食べ物とか、好きな季節の話。どうしてそれが好きなのか、そんな他愛のない話。

確かりサは夏が好きだと言っていたっけ？ リサらしいと思った記憶がある。

他には――

『この館に住む者に警告します！』

唐突な大音声に、エーファの意識はぼんやりと覚醒した。

『この森はこれからメルディン社の私有地となります！ 即刻立ち退きなさい！！！！』

少しでも常識のある者なら、こんな馬鹿げた宣告を耳にした所で真に受けないだろう。いきなり出ていけとはなんという横暴か。

人権という言葉がある。人間に認められる権利。

それには生命権とか、具体的に現在侵害されているのは居住権であろうか。そういう、人間なら生まれた瞬間から認められている権利がある。たとえば法に守られる一市民ではなくても、人道的にこれはどうなのか。別にやましい所は何も無い。不法占拠して居直っている訳ではないのだ。

だから、エーファは取り合う必要は無いはずだ。そんな横暴に従う理由はない。

なのだが、今ここにエーファは一人きりで寝ぼけていた。

「相手にしなくてもいいわよ。ナニ馬鹿な事言ってんのかしらね？」

なんて、忠言してくれるイルマもない。

「やれやれ、騒がしいのが来たねえ……」

なんて重い腰を上げ、よく分からない奴の相手をしてくれたばば様もない。

「……」

エーファは一人きりで眉を寄せ、考えた。

どうしよう、何言っているのかさっぱり分からない。

相手の主張が、エーファにはさっぱり理解できなかった。

私有地とはなんだ？ 森は森だろう、どうしたというんだ？ 何故突然出て行かなくてはならない？

昨日までは何もなかったのに。

「……」

ちょっとだけ考えて、エーファは降参した。

思考が行き詰まる。思考を重ねる事よりも、先程からある欲求が疼いて仕方ない。静める為にエーファは立ち上がり、窓際によった。

窓からは館の前が一望できた。館の前に広がる畑、小屋。そう大した広さではないがエーファの生活には欠かせないものだ。

それが無残に踏み荒らされている。

館の前に集まっているのは銀縁眼鏡の女を先頭とした、赤茶色の制服に身を包んだ数十人の集団だ。女性ばかりでまとめられている。

その集団に、エーファの畑は踏み荒らされている。

むっとしたが、どうしようもない。彼女らを討ち滅ぼした所で畑

はかえってこない。無駄だ。

それよりも。

『無駄な抵抗はおやめなさい！ いかにも魔女であろうと、この通知は我がメルディン社が国王より正式に許可された物です！ 拒否すれば法に則り、あなたを告訴します！！』

こくそつてなんだろう？ 昨日といい、知らない事だらけだ。

そんな呑気な事を考えながら、エーファは勢いよく窓を開けた。

そして羽ばたく為に翼を広げる。

『なつ……』

眼前の集団にざわめきが起こるが、エーファの興味は引かなかった。

それよりも早く羽ばたきたい。久しぶり過ぎて、夢で見たようにちゃんと空を飛べるかどうか不安だ。だから早く試したい。

窓枠に手をかけ、身体を乗り出して、翼を羽ばたかせる。

ごうごうと風は起きたが、身体が浮かぶ程の浮力は生み出せなかった。

「……仕方ないな」

エーファが面倒くさげに漏らしたばやきを、銀縁眼鏡の女は聞き

逃さなかった。

エーファの翼に呆けていた女だったが、諦めがにじんだばやき耳にし、はっと我に返る。

『そ、そうよ！ 無駄な抵抗はおやめなさい！ あなたの身柄に關しては——』

ただ女は勘違いした。

その呟きは翼だけでは飛べない事に対してであつて、女の要求に従つてのばやきではない。エーファは要求を受け入れる所か理解もしていない。

エーファは少しだけ力を借りる事にした。今の己に足りない力を。

力を借りるのに言葉はいらない。ただ思い念じればいい。ちょっとした力なら、それだけで分けてくれる。

森は力そのものである。

念じれば自分の身体を中心に空気が膨れあがるのを肌で感じる。ばたばたと、カーテンやシャツがめくり上がる音が背中越しに聞こえた。がしゃんと何かが割れる音もし、掃除の手間を考えると少しだけ気が重くなったが、空を舞う快感には抗えない。あんな夢を見た所為だ。

良い感じだ、この調子なら翼を羽ばたかせなくても飛べそうなくらいに。

『に、逃げても無駄よ！ どこへ逃げたって絶対に見つけ出してあげるわ！ うちの会社の索敵能力なめないで頂戴！』

女の警告はエーファの耳には届かない。聞いてもいない。むしろ何故追われるのかも分かっていたいなかった。

ただ飛びたいから飛ぶ。

女の襲来はきつかけに過ぎない。何事も無ければずっとエーファは眠り続けていただろう。イルマが起こすのが面倒臭いのと面白半分で記録したところ、一週間眠り続けた事があった。その時は空腹により目を覚ましたのだが、もっと眠り続ける事も可能だったとエーファは感じている。それが異常な事だなんて、エーファは全く知らなかったけれど。

窓から出る。

極力ゆっくりと出たつもりだったが、勢いが余り、ぶおんと飛び出る格好となる。向かいの大木に激突しかけたので慌てて急停止をかけると、今度は浮力が落ち一瞬落下する、ちょうど赤茶色の集団の真ん中に落ちかけたが、ここで大きく翼を広げる。

どんな色を、形をしているのか、エーファにはよく見えなかった。そんな余裕もない。ただ黒っぽいのはよく分かった。カラスのような漆黒ではなく、様々と混じった黒っぽい翼だ。

自分にはお似合いだと、エーファは満足げに笑う。

「化け物……」

誰かの眩き。

確かに普通の人間には翼は生えないな、とエーファは冷静に肯く。

純白の翼であつたらまだマシだったかもしれない。見た目にも美しい。よく見たら薄い膜のような翼で、これはちよつと見た目が悪い。エーファもうわつ、と思うが、自分で作り出したものでないし、借り物だから贅沢は言えない。

力一杯翼を羽ばたかせると、大きな風が起こる。飛び立つには十分な力が。上手くいきそうだと、エーファの笑みはますます深くなる。

まるで獰猛な野生動物が狩りの獲物を見定めた時のような、ぎらついた光がエーファの双眸に宿る。事実その激情に間違いはない。エーファには明確に行きたい場所が思い浮かんでいた。

頭は悪いエーファであつたが、決断力だけは無駄にあつた。

頭脳の明瞭さとは状況の分析力とそれに基づく判断力である。詰め込んだ知識の量や、ましてや即断の決断力でもない。

頭の回転が良い者は決断が早い。それだけ素早く分析、判断がなされているからだ。勘違いしてならないのは、決断力と判断力は全くの別物であるという事だ。決断が早いからといって判断が速いという事にはならない。傍目には同じに見えても、その中身は天と地ほどの差がある。

エーファはこの状況を分析し、飛び立つという判断したのではない。エーファはただ決断した。ただそうしたいからという理由、そ

れだけで決めた。

あの人の元へ。

昨日は、いや一昨日か？ とにかく会えなかったあの人の元へ。

己の名付け親である、ゲルトという男の元へ。

それがどんな結果をもたらすのか、全く考えもしないでエーファは翼をを羽ばたかせた。

ただ愛しい人を目指し、エーファの翼は空を舞った。

新市街はビルが多い。どれも似たような形のビル群。違うのは掲げる看板の種類や形だろうか。どれも似たような造りで、ぱっと見で違いが分らない。ちよつとでも歩き出せば同じ所をぐるぐる回っているような気にさせられる。そう、まるで道に迷ったように。

「……（ここはどこだ）」

ゲルトは一人途方に暮れていた。

これから取引先の会社に向かわなければならぬのだが、そのビルがさっぱり分らない。

そもそもゲルトは街のビル群は苦手だった。何度来たって同じ所で迷う。妻や子供達と買い物に来てもしかり。一人ではすぐに道に迷ってしまい、家に帰るのにも一苦労する。

会社の同僚達や家族の者に言わせれば街で迷うのはどうかしていいらしい。やかましいぐらに街は己の町名や区名を主張しているではないかと。道路にも番地表記がされている。だから、迷う方がどうかしている。だがそう言われても困るというものだ。

迷うのだから。なんでも言われても、現に今迷っているじゃないか。

そう声高にゲルトは叫びたかった。

やらないけど。

それをやつて以前通報されかけた事があつた。不審者として。

直ぐさま逃げたから大事にはならなかつた。まあ向こうも脅し目的だつたのだろう。通報するぞ、と言われたら大概の人間は逃げ出すと思う。たとえ己に非がなくてもだ。面倒事は避けたい。社会的信用にも関わる。ただでさえ自分は胡散臭く思われているのだから、尚更慎重になるのは当然だ。

ゲルトはこれまで獵師を生業としていた。それが胡散臭く思われる理由の一つらしい。

森を見れば今でも思い出す。このビルが多く立ち並ぶ新市街では森が見える所は少ないけれど、見える場所はあつた。高いビルの窓から、あるいは屋上から、ふつとビルとビルとの隙間から森はのぞいていた。

懐かしい。

今ではほとんど森へは行かなくなつた。

獵師をやめ、そう頻繁に行く理由が無くなつたのも大きいが、何よりも妻や子供達が森に入るのを嫌がつた。それが大きい。下の子はそれ程嫌がつてはおらず、むしろ行きたい素振りも見せるが、母親と姉に遠慮するかのように森には行きたいと口には出さなくなつた。

家族が森を嫌う理由を、努めてゲルトは考えないようにしていた。むしろ森自体が嫌いなのだと思ひ込むようにしている。なぜなら森に住む魔女見習いの少女——というには些か年を重ねているかもし

れないが、ゲルトにとってはいつまでたっても子供みたいなものだ——を自宅に招く事には反対しないからだ。むしろ好意的である風にも見える。

だから妻は彼女を嫌っているのではない。一人の人間として、あの少女は嫌われてはいない。

あんなに綺麗な顔をしててもその美貌を自慢する事もないし、他人を美醜で見下しも賞賛もしない。性格も素直だし、少し世間知らずな所もまた可愛らしい。娘達の良い玩具になっていた。街のある事無い事吹き込まれて、よく遊ばれていたっけ？

取引先の会社にか辿り着き、約束のものを渡して帰る道すがら、ゲルトは昔を懐かしんでいた。

今日はいつもより仕事が早く終わった。そのまま帰ろうとしたら先程のお使いを頼まれ、今に至る。まさかお使い如きで道に迷うとは思わなかった。辺りはすっかり暗い。夏で陽は長くなっているとこのに、この暗さ。

「……（やれやれ）」

ゲルトは無言で頭を振った。

あまりに深く考えると嫌気がさしてくる。これ以上考えるのはよそ。道に迷った己が悪いのだ。猟師としてでは生きていけないな。世の中を恨むのではなくて、すぐそこだから、なんて言ってお使いを押しつけたあの野郎を恨むのではなくて、内省しよう。己が道に迷わなかったらいいだけの話じゃないか。

ばさばさ。

大きな翼のはためき音に、ゲルトは下を向いていた顔を上げた。

重い翼のような物のはためき音だ。森でも聞き覚えのない、不気味な音。

上空に何かいる。

反射的に銃を構えようとして、銃がない事に気付く。ナイフだつて持っていない。必要ないし危ないからと言われて、何も持たなくなつたのはいつからだろうか。

「……やれやれ」

己を強い存在だと思つた事は一度もない。家が代々猟師の家だったから命の儚さ強さ、全てを見て感じていた。

ばさばさ。

上空のそれは、だんだんと近づいてくるようだった。音が大きく聞こえる。

周りは住宅街。もう真っ暗で、出歩いている人は見えない。静かなものだ。これほど大きな音ならば家の中に居ても聞こえそうなものだが、不思議とどの家の戸も閉められたままだ。気配を窺っている様子もない。家の中と外界とはまるで別世界なのかもしれない。彼らにとっては。

まあ太りすぎたコウモリかなにかだろうと、ゲルトはそれを気にしない事にした。

我が家はもうすぐそこだ。

まだ夏だが、夜になると少々冷える。早く暖かい我が家に戻りたい。

と。

ゲルトが我が家に想いを馳せた時。

ばさばさっ。

「ゲルトっ!」

大きな羽ばたき音と、影。そして祖母の名をつけたあの少女の、ひどくはしゃいだ声がした直後にゲルトは身体に大きな衝撃を受け、堪らずよろめいた。

頭上から体当たりされたようだ。向こうが直前で避けたお陰で直撃こそはしなかったが、結構な速度と重さで、まともにぶつかっていたら死んでいたかもしれない。

そのまま影は再び上昇したようで詳細は分らないが、おそらくそういう状況だろうと思う。かつて一度も人間に空中から体当たりされた事がないので、明言はできないが。

ばさばさと、羽ばたき音が徐々に小さくなる。

「ごめん、うまくまだ止まれないんだ。ぶつかってごめん」

そうかそうか、止まろうとして、勢い余って突っ込んでしまったのか。慣れない事をするからそうなるんだ……って、をい。

ゲルトは無言のまま立ち上がった。

そして声と羽ばたき音がする方に顔を向けた。

新市街と旧市街のちょうど境目辺りに位置するこの地区はまだまだ街灯の整備が遅れていた。家々の明かりしか夜の道を照らす物はなく、頭上の影を照らし出すにはそれらでは役不足だった。

目を凝らしてみても、ゲルトの目ではエーファの姿を確認する事は出来なかった。

「ちょっと待ってて」

わくわくしたエーファの声だけはよく聞こえた。

有り得ない。

人が空を飛ぶなんて。

ゲルトは瞬時にそう結論づけたが、同時に彼は現実をしっかりと受け止める度量は持った人間だ。

なんの魔法かは知らないが、とにかく頭上ではさばさびっているのはエーファらしい。待ってて、と言われたからとにかく待ってしよう。

ゲルトは待つ事にした。

それからしばらく、黒い影がゲルトの前に降りてきた。

それは黒い繭に黒い翼が生えたものだった。

「……（なんだこれは）」

ゲルトは言葉を失う。

あの繭の中にエーファはいるのか。

とん、と繭が地面に降りた。

すると繭の側面から人の手が突き出る。

白い、ほっそりとした手だ。

邪魔そうに繭を払いのける二つの手。

黒い繭の下から現れたのは。

「久しぶり」

間違いなくエーファだった。

何かよく分からない繭を被っていたり黒い翼が生えていたりしているが、エーファだった。しかも少し着崩れているが、シャツにロングスカートといういかにもお出かけ用の服装だ。

ゲルトはちょっと、いやだいぶ感動した。

エーファが一人で街に降りてきた事、服装がまともである事に。ちょっと前まで街に降りてくる格好といったら黒の三角帽子に黒口ーブ、おまけにほうきまで持ったものだったのに。

繭や翼の事は目をつぶろう。またなにかしら魔法に失敗したのかもしれないし、まあ大した事じゃない。

「どうしたんだ？」

「ええとね、そうだな……なんて言うか、今イルマも居なくて私人なんだ」

見れば分かる。

ゲルトは肯いた。

エーファは繭を払いながら、更に続けた。

「それで寝てただけで、人が来てさ、出ていけっていうからとりあえず出て来た」

「……出ていけ？」

「そう。なんて言っただけかな。エル……なんとか」

それだけではさっぱり誰かは分からない。おまけにゲルトは知る由もないが、エーファの情報は間違っている。正しくはメルディン社である。

「なんか森がその人達のものになったんだって。だから出ていけって」

「それで、出て来たのか」

「うん。よく分からないし」

あっけらかんとエーファは無責任に答えた。

ゲルトは頭を抱えた。

状況についていけない。

エーファは森から出ていけと言われたという。その割には危機感の欠片もないし、ゲルトは一瞬単純に掃除の邪魔だからとかで一時的に追い出されたのかとも考えたが、即座に打ち消した。

「……森が、誰のものだと？」

「あー、なんて言ってたかな？ 忘れた」

大事な事なんだが。

ゲルトは内心で大きくため息を吐いた。

どうせ話もろくに聞いていなかったんだろう。自分が興味が無い事には無頓着なエーファだ。今までは常にイルマや魔女が居たからそんな調子でもなんとか生きていたかもしれないが、魔女は亡くなり、イルマも傍にいない状況だって有り得る訳だ。今回のように。

そういう時に己を頼ってくるのは構わない。元よりエーファの保護者、後見人のつもりだし名付け親でもある。見捨てられる筈がない。しかしゲルトは魔女ではなく、ただの一般人である。魔女のように万能ではない。出来る事には限りがあるし、自分の生活もある。エーファばかりには構ってられない。

「そうか、まあ立ち話もなんだ。泊まっていけ」

「うん」

嬉しそうにエーファは肯いた。

その様だけなら可愛らしいのだが、張り付いた黒い繭と翼が異様だ。

「その羽はどうにかならないのか？」

一体いつ生えたのかは聞かないでおこう。これ以上頭が混乱するのはごめんだ。だがこのまま家に帰ると妻は卒倒しかねない。子供達も気味悪がるかもしれないし、いやむしろ面白がるかもしれないが、最近微妙になってきている両者の関係に激震が走るのは必至だ。少しでも可能性は摘んでおこう。

「変？」

まじまじと翼に目をやって、エーファは聞いてくる。

「……まあな」

明言は避けた。

似合っていない事もないし、もし新しい魔法が何かでエーファ的にはイケてたのなら少し可哀想だ。ゲルト的にはアウトだが。

「そう」

傷ついた様子もなく、あっさりとエーファは肯いた。

そして。

躊躇う事なく翼に手をかけると、そのまま強引に翼をもぎ取った。

「！？」

言葉を失うゲルトに構うことなくエーファは何でもない顔をして、もいだ翼を無造作に投げ捨ててもう一方の翼に手をかける。

止める間もあればこそ。

エーファは自らの手で残った翼ももぎ取った。

じんわりと、エーファのシャツの背中側から赤い染みが広がる。

「これで問題ないな」

もぎ取った翼を片手に、得意げな顔でエーファはゲルトに言った。
まるで頭いいでしょ、誉めて誉めてとでもいうように。

興奮しているらしく、ほんのり頬が赤く染まっている。瞳もきら
きら輝き、まるで光に当てた宝石のようだ。

もぎ取った翼からはまだ赤い血が滴り落ちていた。ぽつぽつと赤
い雫はスカートを汚し、足下に小さな池を作る。

その様を見ていて、ゲルトはふと初めて会った時の事を思い出
した。

あの時もやたらとはしゃいでいったっけ？ 訳の分からない事を
言うのも同じだ。昔に比べれば随分とましだけど。

エーファが楽しげな様子は見ていて悪い気はしなかったが、どこ
か居心地の悪さも拭えない。

己が場違いな世界に居るような、そんな決まり悪さ。同じ人間な
のに。

だが、森と街とは別世界だ。森に街の法は通用しない。同様に森

の掟も街では通用しないだろう。ならば森に住むエーファと己とは別世界の人間か。

昔は両者の間に交流は確かにあった。

街は恐れながらも魔女を敬い讃え、よりどころにしていた。それがいつからか街は魔女を忘れた。森に見向きもなくなった。そして今は森には見習い魔女が一人、脳天気の日々過ごしている。本人曰く修行が終わるのはもうすぐらしいが、怪しいものだ。

つまり、何が言いたいかというと。

ゲルトは頭を振って纏まらない思考を振り払った。

魔女はもういない。

ゲルトはどこか他人事のようにその事実を改めて受け入れた。

いま森に、魔女はいないのだ。

あの時は魔女を頼ったが、その魔女はもういない。

ゲルト自身がどうにかするしかない。

この少女を守るのは己だけだ。

時は少し遡りエーファの眠りが妨げられる頃、ボルツ事務所にて人語を解する猫とはいえ、やはりただの猫らしい。

弟と猫じゃらしで戯れるイルマは、どこからどう見てもただの猫だった。

「ほれほれ」

くう！ ニンゲン如きに翻弄されるとは腹立つわね！ 止めなさいよその動き！ 追いかけちゃうじゃない！ アンタも黙って見えないで止めさせなさいよっ！！ 弟なんでしょっ！？

でかい図体をして弟は何かと器用だ。そして小動物好き。

飼うとは一言も言っていないのに昨日の夕方イルマを連れ帰ると、弟は目をきらきらさせながら用意を始めた。

いそいそと適当な段ボール箱をどこからか調達し、そんなん何所にあつたと思うような可愛らしいバスタオルをその段ボール箱に敷き詰め、これまた可愛らしい深めの皿と小皿を用意した。それぞれ水と餌皿らしい。

その段ボール箱はなんと、三階の居住スペースに置かれている。

クルトとしては用意するのは構わないのだが、場所は勘弁して欲しかった。広い部屋ではないのだ。いくらイルマが清潔にしてい

も動物の匂いというのは存外強い。どうしても臭う。

イルマのテレパシーを聞き流しながら、クルトは深く椅子に座り直し、大きく伸びをした。

ちよつと、ムシってんじゃないわよ！

いい気味だ。

焦ったイルマのテレパシーはクルトの気を少しだけ良くした。

やはり猫は猫だ。

くうう、この……っ！！

「ほれほれ」

兄としては弟の楽しげな顔を見ているのは悪い気はしない。

しないが、あの猫の正体というか本性を知っているから、あまりからかい過ぎた後が心配だ。弟にはからかっているつもりはなく全力で遊んでいるんだろうが、猫にとってはそうではない。

そろそろやめさせるべきか。

「おいロルフ、いつまでも遊んでんじゃねえよ。今日も一日お仕事頑張らましょ」

からかい半分に促せば、弟は冷たく切り返してきた。

「仕事一つもないじゃんか」

兄はめげずに続ける。

「馬鹿だなあ、お前。だからつつて遊んでる場合じゃねえだろ？
むしろ仕事がない時にこそ仕事は取りに行かねえとな。な、そう
だろう？」

「じゃあ兄貴が行ってくれよ。オレは留守番してるから、いつも
みにたいに」

若干弟の言葉に刺を感じるのは気のせいかな？

「……まあ、確かにいつもそうだな。だからこそだ、兄としては
たまには違うパターンを試してみてもいいんじゃないかと、思う訳
だが、どうだ？」

「兄貴」

猫と戯れる手を休めずに、弟はこちらを見もせずに言った。

「俺は今、猫と遊びたいんだ」

クルトはそれ以上説得出来ず、諦めて自分が出かける支度を始
めた。

——悪い、イルマ。俺にはロルフを止められなかった。

通じるか保証はなかったがクルトは猫にテレパシーを送り、小
さく頭を下げた。

ふにゃあ！

一際激しい猫の鳴き声を背に、クルトは昨日と同じようにロルフを残し、事務所を後にした。

外に出ると良い天気だった。夜も良く晴れそうな、雲一つない快晴。

これからの予定を考える。

ロルフには仕事は探してこいと言ったものの、そんな気分にはなれなかった。

昨日仕事の一つ終わった所だ。そんなに慌てて次の仕事を探す必要はなからうと、クルトは余裕ぶってみる。がつく男は大概引かれるものだ、なんて言い訳めいた事を考えながら、クルトの足は最寄りの銀行に向けられた。

昨日の報酬を確認する為だ。契約では仕事の終了次第即振り込みを条件としている。だから、昨日のアレで仕事が終わりなら報酬が振り込まれ、呪術とかも解けている筈である。魔術だのなんだのは門外漢だから分からないが、あの男の言う事を信じればそうなる筈だ。

報酬を手に入れたら必要経費を差し引いて、自分とロルフの給料——ほとんど小遣いみたいなものだが——に割り当てよう。今回はなかなかの額になりそうで、今から楽しみだ。

それでその金で彼女に何か買って行こうか。昨日は仕事だからと遠慮したのだが、今日は別だ。昨日見た感じだとアクセサリーの類は全く身につけていなかったから、ちょっとしたアクセサリーでも髪留めでもいいかもしれない。彼女の白い髪に映えるものを想像するのは楽しい。

と。

クルトはまたも唐突に思い出した。

ロゼッタの紅茶。

預かってからもう三日も経つ。このままではずるずると忘れて行きそうだ。

だがしかし今から引き返し、ロルフとイルマの待つ事務所に再び顔を出すのも気が引けた。

まあ、紅茶だし日持ちするだろう。

クルトは気楽に考えて、そのまま進路は変えることなく目的地に向かう。

ロゼッタの紅茶は、またしても忘れられた。

宿題をあらたか終わらせ、早速森に行ってみたりサは驚いた。

大きく立ち入り禁止と掲示された立て看板。ご丁寧な丈夫そうなロープで道も塞いであった。看板にはメルディン社所有の為、関係者以外の立ち入りを禁ずと書かれている。

メルディン社。

リサだって知っている、もはやこの街の象徴といってもいい大企業。まさかそのメルディン社とエーファに繋がりはあるとは思わなかった。

「……」

いや、なんかおかしい。

根拠はないが直感でリサは両者の繋がりを否定した。

よくよく観察してみれば、その看板もロープもどれも真新しい。まるで昨日今日設置されたみたい。

エーファはずっと森に住んでいるらしいから、もし元々関係があるのならこの真新しさは不自然だ。もっとも、メルディン社との関係がごく最近になって結ばれたのなら話は別だが。

まあともかく。

「とにかく会わなきゃね。折角ここまで来たんだし」

リサは自分に気合いを入れる。

お出かけ用のワンピースにサンダルという軽装で来た事を後悔した。お菓子を入れたバスケットも、こんなだったらリュックにすれば良かったと悔やまれる。

小道を塞いでいるロープは密で、くぐり抜けたりするのは不可能だ。かといって上を跨ぐには高さがある。となれば横の、ロープを張られていない森を直接入るしかない。こちら木々が密集し、まるで侵入者を拒むかのようなのであるが、他に道はない。

しかしリサには撤退、日を改めるという戦略はなかった。

ただ突撃のみである。

リサは勇ましく腕まくりをして、森へと踏み行った。

そして――

「民間人と思われませんが、少女が一人森へ入って行きました。いえ、魔力反応はありません。ええ、そちらの判断をお願いします」

影から森へ入る者を監視する、赤茶色の制服の女。

森は監視されている。

そして、その後しばらく。

一人の男が走って森の入り口まで来た。長身の、なかなかの優男

だ。

先程無謀にも森へ入って行った少女を探しているのだろうか、うろつろと森の入り口の周辺を歩き回り、奥を覗き込むようにしている。

当然、見つかるはずはないが。

森は今、あの方の術によって大きく形を変えている。森の奥、魔女の館より奥はあのお方の力をもつても無理だったが。

あの少女はもう既にあのお方の元に転送されているはずだ。そういう術が森にかけられている。

赤茶色の制服の女はただ監視するだけである。

女は男を止める事も少女が森に入ってしまったと教える事もなく。

ただ見守るだけである。

クルトは意気揚々と、花束片手に森へ向かっていた。

一昨日昨日今日といい、いささか通いすぎじゃね？　と思わないでもないが、まあそういう巡り合わせなのだと、自分を納得させる。そもそも自分と彼女では接点がなさ過ぎる。こちらから会いに行かなければ会えない。だから仕方ない、と更にクルトは言い聞かせる。それにだ、イルマは住む場所がなくなると言っていた。それが気になる。

だから様子見もかねてクルトは森に来たのだが――。

「……」

声をかけるべきかどうか、クルトは一瞬迷った。

森には先客がいた。森を行ったり来たりしている、不審人物。その人物とは昨日初めてあったばかりだが、クルトはあんまり好きじゃない。なんとなく気が合わない雰囲気。

「お前は、」

ああほら。

クルトは小さく舌打ちした。

こちらから声をかけようか、そう考えていた時に、これだ。

「昨日はどうも。良く会っね」

「……この看板はお前の仕業か？」

笑顔で挨拶したのに無視られ、おまけにガン飛ばされた。

いらつとしたが耐える。

男が厳しい顔で指し示す看板を一目見て、大体の事情を察する。

「まあ、俺の仕事の結果ではある」

男は顔をしかめた。

まあ当然の反応か。男からするとクルトは胡散臭く、またこの状況を作り出した張本人だ。好印象は得難いだろう。欲しくないが。

「そんな奴が何の用だ？」

「あんたに答える義務なんかないと思うけど、まあいいや。これ見たら分るだろう？」

花束を少し掲げてみせる。

男のしかめ面はますます深まる。だがそれ以上は何も言ってこず、男は看板に目を戻した。仕方ないから話しかける。

「で、あんたは？　こんな所で何してんだ？」

「……知り合いに頼まれたんだ。そいつの妹の忘れ物を届けてくれ

つてな」

男は片手に持つ袋を見せた。

小さな袋だ。中身は何かは全く想像できない。

「その子、彼女と知り合いなんだ」

「ああ」

男は難しい顔して看板を睨んでいる。

そんなもん無視して行けばいいのに。

クルトは男の生真面目さに呆れた。

だがまあ、その妹とやらも生真面目に看板の文句を忠実に守り、引き返したかもしれない。男もそう考えているのだろうか。

呼びかけようとして、クルトは気付いた。

男の名前を知らない。昨日自分は名乗ったが、男は名乗っていない。

まあ、別にいいけど。

「で、あんたは何悩んでんだ？ その子はもう帰ったかもしれないだろ、こんな看板があつたんじゃない」

「そういう素直な奴じゃないんだ。あの子は」

「ふーん？」

男が何も言つてこないから生まれる、沈黙。大の男二人が看板の前に突つ立っているのは少々異様な光景だが、幸いにして他の人間はいない。人目を気にする必要はなかった。

「……で、あんたはこれからどうするんだ？」

「……」

男は難しい顔で黙つたままだ。

いい加減、飽きた。

「じゃ、俺は彼女に用があるんでこれで。妹さんに会ったらあんたがうるうるしてたって伝えとくよ」

男にそう言い捨て、クルトは森に足を踏む入れた。

「おいお前——」

男の制止する言葉は最後まで聞こえなかった。

森に足を踏み入れた瞬間。

ぐにやりとクルトの視界が歪んだ。

視界だけではない。

感覚も、思考すらも歪む。

……だ……な……ん……

声にならない叫びを上げて、クルトの意識は途切れた。

ぼんやりと意識が戻ると、甘い香りがクルトの鼻を刺激した。

仰向けに寝かされているのが分かる。背中には柔らかい布が敷かれている。

「へえ、二人はお知り合いだったんですね」

華やかな少女の声。クルトの知らない声だ。

それに応えるのは、

「ええ、この子が街に来たばかりの頃からの知り合いで、今はこんなだけれど、昔は可愛らしかったんですね。寝顔は今も可愛いんですけど」

ロゼッタだ。

クルトはがばつと起き上った。

「あら、もう気が付きましたのね。残念だわ、寝顔はとっても可愛らしいんですもの」

いつも通りの笑顔のロゼッタだ。だが言葉に刺を感じる。

何か気に障ることをやらかしただろうか？

クルトは自問する。

ないはずだ。ロゼッタがロルフに買いに行かせた紅茶を未だエーファに渡し忘れた事ぐらいしか、身に覚えはない。

「ど、どうもロゼッタさん。こんな所で会うなんて奇遇ですね」

さっと立ち上がり、どもりながら後ずさる。

背中に敷かれていた布を拾い上げ、すぐに返せるように畳込む。

さっと辺りを見回すと、ここはエーファの家の前の広場だった。

家の前にはテーブルとイスが運び込まれている。そのテーブルの上にはお茶のセットが用意され、ロゼッタと少女は向い合わせで座っていた。少女の後ろにはあのいけすかない男が立っている。

一体いつの間にも移動したんだ？

あいつも結局来てんじゃねえか。

つかさっきのアレは？

何でこんなところでロゼッタさんはお茶している？

様々な疑問がクルトの頭の中を駆け巡る。

「そうですね、本当に奇遇ですわ。、まさかあの子の所にこんな人が集まるなんて、考えもしませんでしたわ」

「あの子？」

随分と親しげな言い方だ。

クルトが聞き返すと、ロゼッタはにこりと微笑んで言った。

「娘がお世話になっております。わたくし、あの子の母親ですわ」

その頃娘のエーファは、ゲルトの家でぐーすか眠っていた。

朝仕事に出かけるゲルトを見送った後、特にやる事もないエーファは自分に割り当てられた部屋に戻り、眠りについた。

一度昼食時にアリサが起こしに来たが、エーファは起きなかった。アリサも無理に起こさずにそのまま部屋を後にした。

昨日突然ひどい怪我をしてエーファが夫と共に家に来たのには驚いたが、昨日の晩も今朝もエーファは元気だった。よく食べ、よく眠っている。だからアリサは心配はしてなかった。ただ夫が何か面倒な事に巻き込まれやしないか、それだけが心配だ。

エーファは夢を見ていた。

ゲルトに出会う前の事、出会った後の事。

ゲルトに出会う前の記憶は曖昧だ。たくさん覚えてはいるが、どれもあやふやで上手く思い出せない。はっきりしない。

しかし出会った時なら鮮明に思い出せる。

森に一人、うずくまっていた自分達。

当時の自分にとってじつとしている事は退屈な事ではなかった。今の自分にとっては死ぬほど退屈だが、当時の自分にとってはそうでもない。どう楽しかったかはもう忘れてしまったけれど。

そして魔女。

魔女。

まじよ。

もういない。

あの人は一人、時が来たと言って森の奥へ行ってしまった。

エーファを残し、一人で森の奥へ行ってしまった。

会いたい。

会いたいな。

ゲルトに会えたら次は魔女に会いたくなった。

会いに行こうか？

魔女が行った、森の先を想像してみる。

あの先には何があるんだろう？　今まで一度も行った事がない。
未知の領域だ。

わくわくする……ような気がする。

ざわざわと背中がうずく。

自分たちも喜んでいる。

エーファは満足し、夢の中で更に眠った。

「ええ、エーちゃんのお母さんっ!!??」

最初に声を上げたのは少女だった。活発そうな少女だ。

少女の言葉には全くもってクルトも同感であるが、その驚きは少し失礼だ。後ろで男が小さくたしなめている。

「ふふ、そんなに驚く事かしら？ あの子だって人の子よ。ちゃんとわたくしがお腹を痛めて生んだ子供です」

「ええと、そうなんですけど……すいません、あたし驚き過ぎですね。ちょっとなんて言うかびっくりしちゃって。だってロゼッタさんに子供がいるってのも驚きだし、それがエーちゃんだなんて……その、」

齒切れ悪く少女は弁解した。

クルトもその気持ちはよく分かる。ロゼッタは確かに妙齡の女性ではあるが、まるで少女のような無邪気で幼い雰囲気を持つ、子供みtainな女性だ。子供が居るとは思えない。クルトも初めてロゼッタに子供が居ると知った時は驚いた。たしかまだ中等部だったか。男の子だったはず。クルトの記憶が正しければ。

「母親として、あの子と仲良くして頂いて嬉しく思いますわ。あんな子ですもの。少し心配でしたのよ」

説得力がまるでない言葉だ。それにこの場の空気はなんだ？ 白

々過ぎて逆に居心地が悪い。まるで下手なおままことだ。

「ええと……」

少女は言葉を濁し、困ったように斜め後ろを見やる。

少女の頼りの綱の男は、厳しい顔でロゼッタを睨んでいた。

大した度胸だと感心する。クルトにはロゼッタを睨むなどとても無理。知らないから出来るかもしれないが、それにしてもあんな微笑み美人を睨めるとは普通の人間じゃない。男じゃない。

「ふふ……そちらの方はさつきから怖いお顔ばかり。わたくし、なにか気に障るような事をしたかしら？」

「いや」

男は素っ気なく答えた。しかし全くその通りでないのは明白だ。男はにこりとも愛想笑いすらしなかった。いや、と否定しながらもまだ厳しい顔をしている。

「……えーと、そうだ！」

少女がわざとらしく声を上げる。

「ところで、その、エーちゃんはどこ行っただんですか？ 居ないみたいですけど……」

とてもわざとらしい話題の振り方だ。可愛らしいその顔には乾いた笑みが張り付いている。

クルトも同調する。

「そうですね、ロゼッタさんはご存じで？ 彼女の行き先を」

「……そうですね」

なんとか話題をそらしたかったクルトだが、直ぐさまやぶ蛇だつたと気づく。

もし分かっているならロゼッタがこの少女とともに優雅にお茶を飲んでいる筈がない。ロゼッタはそういう女性だ。目的があるならその目的に一直線。無駄なお喋りはしない。

「本当、あの子だったらどこに行つたのかしらね。困つたものですね。折角迎えに来てみればこれですもの。嫌になりますわ……今頃、どこで何をしているのやら」

ロゼッタは苛立ちを隠そうともししていない。しかし苛立ちながらもどこか楽しんでいる風だった。口元に浮かぶ微笑みは消える事は無い。

「それであなた達は、あの子が行きそうな所をどこかご存じないかしら？」

「ん……さあ、見当もつかないですね」

「……」

男は何も答えず、クルトも肩を竦めてみせるだけ。少女だけがま

ともに答えたが、全く当てにはならない。

「ん……行き詰まりですわね。どうしましょ？」

どうしましょ？　と言われても……クルトは苦笑いを浮かべるしかない。

「ふふ……できれば早く済ませてしまいたかったけれど……仕方ないですわね」

仕方ない。

そうロゼッタが言った瞬間。

ロゼッタの纏う空気が変わる。

ちりちりと肌に刺さるこの感触。

殺気だ。

「えーと、ロゼッタさん？　何をなさるおつもりで？」

「あらいやだわ、わたくしったら、つい……」

クルトが声を絞り出して問うと、ロゼッタは恥ずかしそうに顔に手を当て、背けた。

その恥じらう様子は純真無垢な少女そのもののなのに。

ちりちり突き刺す殺気は変わる事は無い。

ついつてあなた……。

次の言葉が思い浮かばずにクルトは焦る。

少女がびびって泣きそうになっちゃつてるとか、その後ろで男が護身用に何か持っていたんだろう、腰の何かに手をのばして身構えているとか、言いたい事はあった。

なのに口が上手く動かない。

からからに乾いて、機能しない。

なんという圧力が。

恥ずかしげに俯いていても、そのプレッシャーは変わる事がない。

「クルトさんはともかく——」

顔を上げ、ロゼッタは艶やかな笑みを浮かべながら小さく囁く。

「他のお二人はあの子にとって大事な存在なのかしら？ わざわざここに訪ねて来る程ですものねえ、かなり親しいのかしら？」

それは俺に聞いているのか。ならばむしろ言いたい、俺だってそこそくだって、多分！……なんて口が裂けても言えずにクルトは顔を背けた。

見てもらえない。

成る程、彼女の血縁者であることは間違いなさそうだ。その蒼い瞳は彼女によく似ている——ような気がする。

まともに思考する事が苦痛となる。

肌に突き刺す強烈な殺意。

まるで反比例するように美しく蠱惑的なロゼッタの微笑み。

綺麗な人だ、ロゼッタは。

クルトは改めて再確認する。痛感させられる。

少女のように無垢な笑顔が絶えない女性。

色の薄い金の髪はふんわりとカールし、深い蒼の瞳はいつも楽しそうな色をたたえている。

それがロゼッタだ。まるで少女のような人。

今も楽しい笑みを浮かべ、瞳もきらきらと輝いているのは変わらない。それなのにこの違いはなんだ、この受けるプレッシャーは。

「……」

こくと、クルトの喉は自然となった。

ロゼッタこそ魔女だ。

妖しき美貌で人を惑わす、魅惑の魔女。

仕事を早めに切り上げ、森に向かったゲルトは言葉を失う。

関係者以外立ち入り禁止。

大きくはつきり書かれた看板。

なんだこれは。

森が誰のものでだつて？

驚きを通り越して呆れてしまふ。馬鹿馬鹿しくさえもある。

森は広く深い。その全てを知る者はいない。

森の向こうに広がる世界を人々は知ってはいるが、それは森の中央部を避け周りを拓いた結果であり、森の全てが人によって開拓された訳ではない。中央部——というにはあまりにも広大な地域ではあるが——には猟師であるゲルトですら足を踏み入れた事はなかった。

だというのに。

苛立ちを覚えながらゲルトは己に出来る事を考える。

メルディン社といえば大企業。こんな事をするからにはおそらく、法的根拠は用意しているに違いない。だとすれば、一般市民であるゲルトに出来る事はたかがしれている。しれてはいるが、己はエー

ファの名付け親。なにもしない訳にはいかない。

さてどうするか……。

ゲルトは看板の前で考える。

とりあえず町長にでも相談してみようか。ゲルトには国の難しい事はよく分らない。所詮己は猟師なだけだ。役人ではない。

夕方にはまだ早い時間だった。このまま町長の所を訪ねていつても問題あるまい。と、結論を下した時だ。

「失礼ですが、貴方は魔女の関係者の方で？」

ゲルトは無言で声の方に振り返った。

一体いつの間に現れたのか。ゲルトの後ろに男が立っていた。

地味な男だ。人並みにすぐに埋もれてしまいそうな、そんなどこにでも居そうな男。ダークスーツもまるで闇夜だ。

「……あなたは」

「申し遅れました、私はこういう者です」

胡乱げに問い返しても男は気分を害した様子もなく、逆ににこやかに名刺を差し出してきた。

そこには一匹の黒猫が描かれ、その黒猫の真っ直ぐに伸ばされた尻尾の上にこう書かれていた。

メルディン社特別顧問、ミハエル・フォグナー。

なんとも胡散臭い名刺だ。

ゲルトの眉間のしわが深まる。

「魔女の森に用がある貴方ですから、魔法というものはご存じですよ。私はその魔法の担当なんですよ。特別顧問なんて大層な響きですが、大した事はありません。お手当も大したことありませんしね、はは」

軽く愚痴めいたものを混ぜながら男は身分を明かした。魔法という単語をいやに強調しながら。

「……魔術の間違いではないのか」

魔法と魔術。

少しでも魔をかじった者なら分かるはず。この二つの圧倒的な違いを。その差を。

だからこそ言い間違える筈などないのに、ゲルトは聞き返していた。

「ふふ、残念ですが言い間違えではありませんよ。最も私自身は魔法使いではありませんが」

「……では何者だ」

「研究者ですよ、私の本質としてはね」

男——ミハエル・フォグナーはそれ以上語らなかった。

にこりと笑みを浮かべ、

「それでは本題にはいりましょうか。貴方はこの森の関係者の方ですよね」

強引に話を進める。

否定する事でもないので黙って肯けば。

「やはりそうですか、ちょうど良かった。向こうが少し手詰まりになってしまい、あの方がご機嫌斜めなんですよね。私は全く関係ないのに、おかげでとばっちりですよ。ノルマはこなした筈なんです、全く困ったものです」

男は肩をすくめ、何気ない調子でとんでもない事を告げる。

「ではそういう訳で、来て頂きましょうか。貴方が顔を出せばあの方のご機嫌も直る事でしょう」

なんと一方的なお誘いか。こちらの都合などお構いなした。

「……おれにも都合がある。今日の所は一度出直しを——」

ゲルトは丁寧な断りを入れる、入れようとした。

しかし、そんなもの、

「申し訳ありませんが、私にも都合があります。だからついて来てもらいますよ、無理矢理にでもね」

聞く相手ではなかった。

「力づくか」

「そうなりますね、大人しくして頂けないなら」

男の口調は変わる事は無い。まるで世間話をしているような、軽いもの。内容はひどく物騒になっているが。

「……」

ゲルトは無言でミハエルと距離を取った。

ミハエルはゲルトと森を挟むように現れた。逃げ場はない。

昨日エーファが空を飛んできたせい、今日はなんとなく普段は持ち歩かないナイフを忍ばせていた。忍ばせてはいたが、相手はまだ丸腰だ。先に抜くのは躊躇われた。

「やはり貴方は堅気の方ですね。相手に先手を許すとは甘いですよ」

「！」

ミハエルの不穏な言葉と共に、ゲルトの足下に白く輝く方陣が現れる。

「一名様、ご案内」

ミハエルの楽しい声とともに、ゲルトの視界は光で覆われた。

かしゃん

夕食の支度をしていたアリアは、何かが落ちる音に驚いて振り返った。

「……あらまあ」

見るとテーブルに置かれていたゲルトのマグカップが床に落ち、割れていた。

ゲルトが仕事などで居ない時、また子供達も学校のこの時間。早めに夕食の支度をしながら、夫のマグカップを使って一服するのがアリアの密かな楽しみだ。自分の物がない訳ではない。家族の食器は一通り全部揃っている。では何故夫の物を使うのか、そう改めて問われると気恥ずかしい。何故って、ゲルトのマグカップで飲むとほっとするから。どうしてもと言われても困る。だから一人きりの時にしかやらない。

そのマグカップが、床に落ちて割れていた。

それはもう、見事に真つ二つに。

マグカップって落としたくらいで割れるかしら？

小さく疑問に思いながらも、マグカップは割れている。早く片付けねば。

ちょうど明日、夫の仕事は休みだ。ちょうど良いから二人で出かけようか。二人で出かける機会はあるにないし、いい口実だ。

そう考えながらアリアは割れたカップを片付け、夕食の支度に戻った。

夢が終わる。

たくさん夢を見た。

遠い昔の事、最近の事、そしてこうなれば良いという願望。

たくさん夢に見た。

リサと一緒に街をぶらつく事。良くは分からないが、とにかくギルドの仕事をこなしている自分の姿、薬を調合してるばかりだった。イルマと共に初めて魔法を成功させる事。そして、その日に起こった事を魔女にあれこれと報告している自分の、楽しげな顔。

夢が終わると、はっきりとエーファは自覚できた。

何故かは分からない。分からないが、魔女ならこう言うのだろう。

刻が来たのだと。

「……」

目が覚めて最初に見えたものは、見慣れない布団、シーツに枕。

明らかに自分の部屋ではなかった。

いつも傍にいるイルマもない。

魔女もない。

エーファ一人、そこに居た。

寝巻きも見慣れない物だ。サイズも若干大きい。

ぼんやりしていると、下の方からじゅうじゅうと肉が焼ける香ばしい音と共に焼ける肉の香りがエーファの鼻を刺激した。

むくりと起き上がる。

刺激的な香りに腹も刺激される。

空腹を覚えるのはいつぶりか。こんなにも強烈に腹が減ったと、感じるのはいつぶりだろう。口も渴いて仕方ない。身体が重く感じる。

エーファはのろのろと起き上がり、部屋を出る。

部屋を出た所で思い出す。ここはゲルトの家だと。森を出ていけと言われ、どうして良いか分からずに飛び出したのだ。

ゲルトの家は魔女の館に比べると小さく狭いが、その分部屋と部

屋との距離が近くて、なんていうか密度が高い。エーファには心地良い密度だ。魔女の館は密度が薄く、たまにふと寂しさと居心地の悪さを感じる事があった。

キッチンに行けばアリアが料理していた。

エーファが声をかける前に、足音に気づいたアリアが振り向く。

「あらおはよう、ってそんな時間じゃないわね。お腹空いてない？ お昼起こしに行ったんだけど、あなたずっと寝ちゃってて起こすの可哀想だから、ずっと一日寝たままだものね」

腹は減っていた。とても。

肯けば、

「そうよね、朝から何も食べてないんだもの。お腹は空くわよね。そこに座ってて。すぐに用意するから」

「ありがとうございます」

椅子に座って大人しく待つ。本当はすぐに水でも飲みたかったが、言い出せずにエーファは待った。

アリアは一旦夕食の準備を止めて、昼の残りを温め直す。昨日の夕食の残りのシチューだ。子供達の好物でもあり、アリアの得意料理でもあった。

「残り物で悪いけど、はいどうぞ」

少し多いかとも思ったが、鍋の残り全部を器に盛って、アリアはエーファに差し出した。後は夕飯に用意していたサラダとパン。

小さく頭を下げ、エーファは無言で食べ始める。

食べ始めるとぼんやりしていた世界が覚醒するかのように鮮明に、エーファを囲む。

楽しげな様子で夕食の支度に戻るアリア。なにか良い事でもあったのだろうか、うきうきとしている。

自分の家に比べると小さなキッチンだが、小綺麗に整理され、使っている人間の手柄が良く出ている。キッチンは食堂も兼ねていて、四人がけのテーブルは家族が座ればもう一杯だ。それぞれの席は決まっているらしく、椅子のカバーの汚れやくたびれ具合がどれも違い、独特の雰囲気を纏っている。今自分が座っている椅子は誰のか、エーファには全く分からなかったけれど。

鮮明になる世界と裏腹にエーファの思考は停滞している。

これからどうしよう。

なにをすればいいのか。

さっぱり分らない。ただ何かに急かされているのはよく分かった。大切な時間があつという間に過ぎ去り取り返しがつかなくなる、そんな焦りだけが暴れ出す。

しかし、だ。

エーファは暖かいシチューを飲み込みながら、自分に言い聞かせる。

何をしたらいいか分からない。だったらどうしようもないじゃないか。過去の経験から言うところいう時に下手に動いてもろくな事にはならない。じつと力を溜め、機会を窺うべきだと、これまでの経験が囁いている。だからその通りにしよう……と結論を下すものの、やはり落ち着かない。

「ご馳走様です」

「あら、もう食べちゃったの？」

「はい、ご馳走様です」

それにまだまだ食い足りない。まだ飢えが修まらない。

「そう、子供達もあの人もまだ帰ってこないだろうから、のんびりしてて頂戴」

「……いえ、少し出かけてきます」

「そう？」

アリアの声のトーンが上がった。ほっとしているのがよく分かるが、それは自分も同じ事。唐突にやるべき事が思い浮かび、ほっとしていた。

「はい、イルマも居ないし、ちょっと探してきます」

イルマに相談していない。やれる事は残っていた。

「ああ、あの猫ちゃんね。居なくなっちゃったの？」

「知り合いの所に行ってしまったて、その、預かってもらってる状態です」

食べ終わった食器をきれいに揃えて、エーファは席を立つ。

焦るばかりの心が、少し落ち着いていた。

「ああちよつと待つて、あなたの服捨てちゃったのよ。出かけるならあたしの服貸すから、ちよつと待つて頂戴」

エーファの血だらけの服を、アリアは深く考えるのはやめて捨てた。夫が何も言わないのだ、だからアリアも追求するのはやめた。それに目の前のエーファは健康そのものだ、どこも怪我をしている様子はない。

本当ならばそんなエーファと、魔女だんて訳の分からない事をいう少女と関わるのはもうやめて欲しかった。もうあの少女も子供ではない。確かに一人前の大人とは言い難いが、しかしもう十分だろうとアリアは思う。

しかし、アリアは口に出してそれを懇願するつもりはない。

魔女を恐れての事ではない。アリアも街の人間だから、魔女の事

は知っている。

十五年前、子供だけがかかる謎の疫病が街を襲った。当時の街は今よりもずっと小さな町で、病院や医者なんてろくにいなかった。今ではとても考えられない事だが、病院の代わりを担っていたのは魔女だった。

その疫病も魔女が調合した謎の薬で治まったが、町の人間は恐れた。今後もし似たような事が起こればその時も魔女に頼り切るのかと。魔女だけに、そんな古くさい物だけに頼るのかと。

そんな時に持ち上がったメルデイン社の誘致話。経済効果だけではない、町の近代化にも大きく寄与する。誰もが歓迎した。渋い顔をする者は時代遅れだと非難された。

それから十年。

辺境の小さな町だったグレイソンは国内でも有数の大都市に発展した。成功は誰の目に見ても明らかだ。

確かにその発展の影で失われたものはあるだろう。二度と取り戻せない、貴重なものかもしれない。だが失われないものなど、永遠に続くものなどこの世にありはしない。だからこの発展は正しいものだ。

子供達の教育水準も随分上がった。アリア自身の娘時代では大学はおろか高等学校さえ憧れの的だった。それが今や卒業して当たり前、大学に進学する者の数の方が多い時代だ。

魔女だの魔法だの、勘弁して欲しい。もうそんな時代じゃない。

夫だつて街で仕事をしているこのご時世。次はエーファの番だと、アリアは願っている。しかし結局の所エーファはアリアにとって赤の他人。もし本人にそんな気がなくとも構わない。

アリアは夫を信じているからこそ、エーファを受け入れる。得体の知れない気味の悪い存在だけれど。

もし、もし何かあれば最優先にゲルトが守るもの。それは自分達家族だと。そう信じているからこそ、アリアはエーファの世話を焼く。

「これなんかいいんじゃないかしら？」

もう着なくなった、昔の服を引っ張り出して見せる。

パジャマは夫がさつさと自分のを与えてしまったから必要なかったが、流石に外に出るなら夫の物はまずい。サイズも合わないし、元々ゲルトは物持ちが良く、数をあまり持っていないから後で捨てるのが勿体ない。

チェック柄のワンピース。夜は少し冷えるから、深緑のジャケツトも合わせて。

「洗濯物はこのカゴに入れておいて。後で取りに来るから」

あの子は小さく背いて、さつそく着替え始める。同じ女だから恥じらう事はないのだが、かといって眺めるのもどうだろう。アリアは部屋を出た。

見るつもりはなかったが、見えてしまったあの子の白い肌。横か

らしか見えなかったが、背中もお腹の辺りも綺麗なものだ。傷一つない。

……
昨日のあの血は彼女の物ではないのか。しかし服は破れていたし

「駄目よ、駄目よアリア」

つい考えてしまった自分を小さく叱る。

関係無い事だ。詮索してはいけない。知って苦しむのは自分だ。知らないのが一番。

そう言い聞かせ、アリアは夕食の支度に戻る。

さてはて、どうやって夫のマグカップを割ってしまった言い訳をしようかと考えながら。

それじゃ行ってきます。

胸の内で呟いて、エーファは家を出た。

イルマを探す。

目的はめでたく決まったが、その方法はどうか。さっぱり見当がつかない。

「……さて」

どうしようかという意味を込めて呟いた所で、答える者などいない。とりあえず歩くしかない。せめてイルマを連れて行った男の住処を知っていればそこに向かうが、全く知らなかった。おまけに名前も忘れた。顔は辛うじて覚えているが、細目でつり目、髪の色は黒いくらいしか思い出せない。

金や茶が多いこの国で、黒い髪の間人は少しばかり珍しい。珍しいのだが、エーファはそんな事は知らない。それなりの場所で黒髪・つり目・何でも屋という条件で探せば、おそらく簡単にクルト・ボルトという人物に行き当たっただろうが、エーファはそんな事は知らない。

行き当たりばったりに歩くしかなかった。

広い街で一匹の猫を探す。

気が遠くなる作業だ。主と使い魔といっても特別な絆などない。引かれ合う何かもない。イルマの言葉がエーファには分かる、それだけだ。

一人で街を、街でなくとも一人きりで行動するのはエーファにとって久しぶりの事だった。

常にイルマが傍にいた。あるいはゲルト、今は亡き魔女が傍にいて、エーファは守られていた。それが今はない。エーファは一人きりで広い街を彷徨い歩かねばならなかった。

少しばかりの不安を覚えながらも歩き続ける内に、エーファは遠

い記憶の中にこれとそっくりな状況を思い出していた。

あの時も腹が減っていた。そして見知らぬ場所で、己一人。よく似た状況だ。不安が少し消え、余裕が生まれる。

そう、これはあの時に似ている。少し違うのはあの時はただ待っていたれば良かった。待っていれば、それで事は終わった。しかし今は違う。ただ待っていても事態は解決しない。多分。自ら行動を起こさねば。これが成長したってヤツだろう。多分。そうだ、そうに違いない。

妙な自信をつけて、エーファは夜の街へと繰り出した。

7（後書き）

根本的な設定ミスが出たので一部書き直しました……これだから無計画は。

夜の街を駆け抜ける、黒い影が一つ。しなやかに伸びる四肢は闇夜。

彼女は敵に追われていた。

彼女に比べ、あまりにも巨大な敵に。

必死に彼女は逃げていた。捕まれば地獄が待っている。もうあの場所には戻りたくない。

「イルマ。イルマ」

彼女の名を呼ぶ男の声。

彼女の毛がざわざわと逆立つ。

怖いとは思わない。ただ気味が悪い。ぞわぞわと毛が逆立つ。こんな怖さをイルマは初めて知った。

嗚呼、こんな事になるなら家で大人しくしていれば良かった……なんて、後悔するのも癪だから、イルマはひたすらに街を駆け抜ける。

己が今どこに居るのか、どこに向かっているのかすら分からずに、イルマは駆けた。

街の変化は目まぐるしい。

しばらく来ない内に街はその姿や表情を変えていた。新しい店、家、アパートやなんだか良く分からないビル。記憶の中では道だったはずの空間にはビルが、その逆もまた然り。

やがて、その駆け抜けた先には。

「ああ、ここにいたのか」

路地裏の一角。なんとも言えない悪臭が鼻を刺激する、薄汚い小さな空き地。

やっぱり華やかな流行の服とは異なった、古くさい服を纏った主人が何故か居た。辺りはもう暗く、服の色までは分からないが、型自体が古い。誰の持ち物なのか、初めて見る服ではあるが……で、そんな事はどうでもいい。

「ナニよ偉そうに！」

イルマは吠えた。

しかし主人は全くイルマに関心を示さず、イルマを見下ろしたまま、一方的に告げる。

「お前が居ない間に困った事になった。どうにかしてくれ」

「知らないわよ……！」

頭がおかしくなりそうだった。

「いるまあ……」

亡霊のように響く、あの男の声。

逃げ出したいのに身体が動かない。

全くもって腹立たしい。ナニが腹立つかって、この主人だ。幼い子供がおずおずとこちらの様子をうかがいながらお願いする時もある。こういう風に偉そうに命令する時もある。一番腹立たしいのは、こういう時のエーファには逆らいがたいナニかがある事。こんな小娘に、己が！

イルマは特別な存在だった。

食うものと食われるものならば食うものの方。支配するものとされるものならば支配する方。そのはずだった。幼い頃から姉妹達を蹴散らし、母はイルマの為に餌を探した。そうしてあの時、巣から独り立ちを果たすあの時にコレと出会った事。それがイルマの最大の不幸だ。

「アタシはアンタの、召使いじゃない！！」

「使い魔だろう、お前は」

「っ！」

素気なく言い返され、それに怯んだ己に腹が立つ。

そして現れる、あいつ。

「なんだここに居たのか……良かったイルマ。もう勝手にどっか行つちゃ駄目だぞ」

ロルフ。

あのクルトに全く似ていない弟。少しでも似ていればまだ耐えられたものを。

茶髪に茶色の瞳。そして無駄にデカイ図体。

髪の色も瞳の色も、体格さえもまるであの兄弟は似ていない。血縁関係はないのかもしれない。

イルマは不意だったがエーファの元へ走り寄る。

他に頼れるものがない。一人で逃げても、またロルフに追いつかれるは目に見えていた。この追いかけてこもイルマは必死だが、ロルフには余裕が感じられた。動き続けたせいで息は上がっているものの、その表情はひどく明るい。

「おいそのあんた、悪いがその猫をこっちに――」

「渡したら許さないわよ!？」

イルマの必死の叫びに、エーファは眉一つ動かす事無く、素気なく答えた。

「これは私のものだ」

冷えたその声は頼もしくイルマの耳を揺らした。

これは私のもの。

イルマを追って裏路地を行けば、そこにはイルマと一人の女性が立っていた。

綺麗な女性だ。

月の光が流れるような白銀の髪。目にした者を底冷えさせる、蒼と紫の瞳。造形は整っているが、感情がなく精緻に造られた人形のようなものである。

「……あ？」

ロルフは聞き返す意味で短く声を上げた。しかしそれは恫喝に近い。並の人間なら短く悲鳴を上げ、逃げ出すに違いない程に圧力があつた。

しかし女性は顔色一つ変えることなく、言葉を返す。

「誰だお前」

にゃあ

猫が女性の足元で鳴く。まるで説明するみたいに。

そんなまさか。とは思うものの、一概に否定はできない。この猫は人の言葉を理解している、それは分かるからだ。毛並みを誉めれば自慢げに毛を舐め、名前を呼べばこちらを振り向く。だからこそこの猫に魅かれる。元々動物は好きだが、この猫は特別だ。

「……ふん、あの男の弟か。似てないな」

「うるせえ！」

やはり猫は人の言葉を理解しているらしい。女性の問いに対し、事情を説明したようだ。羨ましいことに女性にはその言葉、ロールフには鳴き声にしか聞こえないが、内容が分かるらしい。とても羨ましい。

「兄貴を知ってるなら返せ！ その猫は兄貴から預かってんだ！」

「私のものだと言ってるだろう。分からない奴だな」

にゃあにゃあ

猫は女性に同調するように鳴いた。面白くない。全くもって面白くない。

確かに兄は拾ってきたとは言わなかったが、預かりものだとも言わなかった。女性には優しい兄だからちよつと頼まれた可能性もなくはないが、だからといって今すぐに返す必要はないだろう。兄に確認してからでも遅くはない。特別に大切な預かりものかもしれない

いし、無責任な事はできない。そうだ、ちゃんと自分が責任を持たねば。

猫と離れたくない一心で無茶な理屈をこね、己の正当性を自分で立証して、ロルフはじりじりと猫と女性との距離を詰めた。

猫はびくりと身体を震わせ、女性の足下に隠れる。女性は顔色一つ変える事なく、冷めた瞳でロルフを眺めていた。

「その猫を返してくれ。大事な預かりものなんだ」

一歩踏み出す。

猫はふうふうと毛を逆立て、唸った。

「預かりもの、か。そういえばあの男はどうした？ 一緒じゃないのか」

毛を逆立てる猫をひょいと掴み上げ、腕に抱きかかえながら女性は言った。

「営業中だ。もうそろそろ帰って来る時間だとは思うが」

「そうか、なら案内してくれ。あいつに聞きたい事がある。それまではお前が預かってくれ。大事な預かりものなんだろう？」

「ああ！」

喜んで！

猫が女性の腕の中で暴れたが、女性は構うことなく首を押さえて
ロルフに突き出す。ロルフは引つかかれるのも躊躇わずに受け取っ
た。

にやにやにやにやあああ！！！

猫は大暴れしている。

「狭い所だが我慢してくれ。兄貴もすぐに帰って来るとは思うが……まあ、ごゆっくりと」

案内された部屋は確かに狭かった。入り口も狭ければ通された部屋も狭い。綺麗に片付けられてはいるが、狭い。狭すぎる。

古びたビルの二階にある、『ボルツ事務所』。その看板だけでは何を仕事にしているのか全く分からない。何でも屋だから何でもするのだろうか……と、至極どうでもいい事を考えながら、エーファは案内された席に腰を下ろした。

「イルマ、イルマ」

男はイルマをいたく気に入っている。先程から構いっぱなしだ。

細長い棒に毛玉がついた玩具でイルマを弄んでいる。

「くうううううっ……!!」

イルマとああいう風に遊んだ事はなかったが、イルマは良く反応している。口ではなんだかんだといいながら、身体はきっちり反応している。あれが、抗えない本能ってやつか。

「……」

エーファはしばらく一匹と一人を眺めていたが、いかんせん飽きた。元々エーファには愛くるしい小動物も含め、動物を愛でるという感覚がない。赤子ならばどれでも可愛いとは感じるものの、イル

ママも赤子というには勿論、幼子というにも齡は重ねすぎていた。

「ちょっとアンタ！ アンタは一体ナニしにきたの！？ ナニやっているのよそこでアンタはっ！！??？」

イルマの悲痛に満ちた叫びに、成る程もつともだとエーファは肯く。

何しに来たのか。それは重要だ。ただぼんやりと退屈に時間を過ごしに来たのではない。

ぐぐううう……

空気を鈍く震わす、重たい音。

エーファは己の腹を押さえた。

ぐぐううう……

再び鳴った音と共に、己の腹は震えた。腹の虫が蠢いている。空っぽな腹の中で、腹が震えていた。
「なあ、」

エーファは男の方に顔を向け、声をかける。男はイルマと戯れ続ける。エーファになど目もくれない。

「……」

無視される事にはある意味慣れていた。一人で街に降りると大抵の人間は彼女を無視したから。慣れたからといって傷つかない訳ではないが、対処法は熟知している。早速行動に移す。

「無視するな」

「ほげええ！」

エーファはとして軽く小突いた。そのつもりだった。だが男は実にごりごり悲鳴を上げ、前につんのめり床にそのまま激突して、ぴくりとも動かなくなった。

「いいザマね」

イルマは満足気だったが、実行したエーファとしては不本意な結果だ。話をするどころではない。やり過ぎた。

「おい」

うつ伏せの男をひっくり返す。白目をむいていた。鼻血も少し出ている。顔を打った所為か。

「さあ、こんな所からはさっさとおさらばよ！ 早く帰るわよ！」

自分から来たがったクセに。

息巻くイルマを冷めた目で見下ろしたまま、エーファは首を横に振る。

「森には帰れない。困った事になったと言っただろう」

「内容までは聞いてないわよ！」

「そうか」

それきり一人と一匹の会話は止んだ。猫が苛立ちを含んだ目でエーファを睨んだが、エーファは無視した。それよりも気になる事ができたから。

エーファのなにかが、何かを訴えている。それに懸命にエーファは耳を傾けようとした。そういうものが訴える中身は役立つものが多い。分かっているからこそ、エーファは全力でその声に集中した。昔はよくその声を聞いたが、最近はほとんど聞かなくなっていた。もう居なくなったださえ、思っていた。

何故今更？

少しばかり疑問に感じつつも、声を聞く事に集中、しようとした。

「……ナニマジな顔して考えこんじゃってるのよ？ アンタでも頭使うのね」

しようとしたが、できない。

「ごちゃまぜだ。」

かつては確かに一つ一つあったもの達が、いつの間にか混ざり合っていた。確かに別々のものだったはず。だが今となってはもうそ

の記憶すら怪しい。本当に別々だったのか、エーファの中ではもう全てがごちゃまぜになっている。絵の具の色を混ぜ合わせたような存在だけのごちゃまぜではない。過去・現在・未来、時間軸さえぐにやりと歪む。別のものにとっての過去が、あるものにとっては未来の末路。

「アンタのクセに無視してんじゃないわよ！」

猫が彼女の足元に突撃した。

これは一個。一つの個体。黒猫。名前はイルマ。

じゃあ、わたしは？

彼女は己の内面を眺めてみる。それは久しぶりの行為だった。彼女の日々は穏やかに過ぎていて忙しさとは無縁だったが、しかし己を内省するような、そういう哲学的な瞑想とでも言うべき思索する時間は持たなかった。必要がなくなっただけから。

かつて初めて彼女が自己を認識した時、その時の己の内面はたくさん扉がある真つ黒な空間だった。扉は一つ一つどこかに繋がっていて、覗き見するのが楽しかった。しかし注意も必要だった。あまりに覗き見し過ぎると、その扉の向こう側に置き去りにされる危険性があった。実際何度かあった……ような気がする。今の彼女の記憶では曖昧になっているが。

「ちよつとアンタ……！」

黒猫が苛立たしげに彼女に向って、ほえる。

名前を呼んで欲しいと、彼女は思った。

コンコン

軽いノック音が響いた。

「おい、さっきすぐえ音したが、大丈夫か？ 部屋壊してねえだろうな？」

誰も答えない。男は失神したままだし、彼女はぼんやりと黒猫を眺めていた。当然黒猫に答える術はなかった。

「誰も居ないのか？」

訝しみながら、部屋の外の男はドアノブを回した。ドアは開いている。

「しょうがねえ奴らだな、あいつらは」

ぶつくさ言いながら、しかし面倒見の良い家主の男は不審な物音がした室内へと、躊躇うことなく足を踏み入れた。

「灯りもつけっぱなしで、あいつら本当にガキだな」

男が現れる。黒猫は面倒な事になったと、ぼんやりとしている己が主を仰ぎ見た。

「ん？ んん？」

現状を目にし、男は唸った。そこで彼女は現れた男に目を向ける。白髪の、年老いた男だ。どこかで見たような気がしたが、どこで、いつだったかは思い出せない。

「お前さんは確かゲルトの…… エーファとかいったか？」

エーファ。

名前。私の名前だ。

名前を呼ばれ、身体が強張っている事にエーファは気がついた。

「お前さんがやったのか、これ」

「……少し、やり過ぎた」

硬くなった身体をほぐす為、大きく伸びをしながら、エーファは素直に答えた。

「少しじゃないわよ」

イルマは呆れきった調子で突っ込む。

「少し、ねえ……」

老人もイルマと同意見らしい。苦笑いを浮かべている。

ぐうつ…

弁明を始める前に、エーファの腹の虫がまた鳴った。

「腹減ってるのか」

「まあな」

「偉そうに言うことじゃないでしょ」

イルマが突っ込むが、唯一言葉が分かっているエーファは無視。

「ゲルトの奴は元気か？」

「ああ」

「そうか、ならいい」

それきり老人は黙った。男も目を覚まさない。猫のイルマはもちろん喋れないが、無視された事に対してふくれ、なにも言わなかった。

沈黙がおりる。

エーファは居心地悪く身じろぎした。

沈黙には慣れている、はずだった。魔女は身内には無口な人だったし、ゲルトは誰に対しても無口だ。

親しい人間はその二人だけだった。ごく最近までは。

明るい笑顔の少女が思い浮かぶ。と、同時に蘇る歓迎会での御馳走達。

「……腹減った」

「そうだな、いい時間だ。なんか食ってくか？」

エーファは肯くのを躊躇った。金を持っていないのを思い出したからだ。昨日森から飛び出した時点で着の身着のまま。財布を持っていなかった。

「金の事なら心配するな。訳ありみたいだしな、ゲルトの奴にでもつけとくさ」

老人はにやりと笑った。大人の包容力抜群の、かつこい笑いだ。

エーファの口元にも笑みが浮かぶ。

「それは、いいな」

コクのある香りに、程よい苦み。普段飲むお茶とは全く違う、深い焦げ茶色の液体。一口含めば苦みが口の中に広がったが、不快ではない。

「変わったお茶だな」

「それはコーヒーだ。お茶とは違う」

「ふーん」

実にどうでも良さげな相づちに、コーヒーを煎れたマスターはそれ以上の説明を加えるのをやめた。代わりに猫にも用意してやる。猫は嬉しそうにボールにすり寄った。

一人と一匹がコーヒーを堪能している間に、マスターは食事の支度にかかる。

元々はコーヒーとパンなどの軽食、バータイム用のお菓子類しか置いてはなかったが、あの兄弟が入り浸るようになってからは違う。あの兄弟は三度が三度飯を食らいに来るから、とても自分用に用意していた食料では足らなかった。冷静に考えればわざわざ食材を買い足してまで準備する必要はない。全くない。『カツツ』はそういう店ではないのだから。だのに、マスターは用意してしまった。それは多分己の立派な職業倫理のおかげだろ

う。己は食い物屋をまがりにも経営しているのだ。客が食べ物を所望したならばそれに最大限答えるのが筋だろう。そう思う事にした。

今晚の献立は少し豪華だ。特製シチューとサラダ、パンにデザー
トまで。

「ほれ、できたぞ」

「失礼しますよ」

マスターが料理を並べたのと、招かされる客が現れたのは同時だ
った。

夏だというのに、その客は黒いロングコートを一分の隙もなく着
ている。背のあるシルクハットを被り、手にはステッキが。これか
らお城に行くような、ひどく場違いな装いの客だ。

「いらつしゃい……と言いたい所だが、表の看板は裏むけて置いた
はずだが」

「承知しています」

丁寧にシルクハットを取りながら、客は一礼した。

金髪碧眼の、端正だがやや童顔の青年だ。見かけは人なつっこそ
うな、まるで子犬みたいな青年だが、口を開けば落ち着いた物腰の
青年だ。

「ですが私は食事に入ったではありませんから、ご安心を」

「何に安心していいのか分からねえな」

「お邪魔はしませんから。少しだけ私の仕事をさせて下さい」

「客じゃねえなら用はないんだが」

「はは、すぐ終わりますからちよつとだけ私に時間を下さい。さて、こちらに魔女見習いの娘さんがおられると聞いたのですが、あなたですか？」

「……ああ、そうだが」

答えながらも、エーファの目はカウンターの上に置かれた料理に釘付けだ。

「初めまして、私はさるお方の使いの者です。ここに、あなたの現状を憂いた我が主人からの手紙があります」

差し出されたのは簡素な紙切れ一枚。二つに折られてはいるが、手紙というよりはメモにしか見えない。

マスターはひどく胡散臭い男を疑うが、手紙を渡された本人は気にする事無く手紙とやらを受け取り、開く。

そこには簡潔にこう書かれていた。

あの森は魔女のものである。

そう一言だけ。そして、その横には金色の角印が押されていた。王国の繁栄を象徴する鳩の紋様が刻まれた、ジークフリードという名前の印が。

「今回のこの事態、我が主は大変憂いておられます。主の見解を申しますと、あの森は魔女の森であるのが一番、響きのにもカッコイイじゃないか、との事です。ですからあなたには頑張つて頂かないと。私も微力ながら手伝うように申しつけられました。以後よろしくお願いしますね」

金の角印を用いるのは王家の者だけ。ジークフリードという名前は前国王の名である。長く王国を善政し、大いなる発展に導いた王として、第一線を退いた現在でも何かと話題に上る人物だ。その影響力は息子である現国王すらも軽くしのぐとか。

そんな大物が森は魔女のものだと認めているのだ。これは大変な事なのだが、

「……どういう事だ？」

やはりエーファは分かっていたいなかった。イルマは無視を決め込んで、何の助言も与えない。ロルフに突き出された事を恨んでいるらしい。

「つまり、私はあなたが森を取り戻すお手伝いをしに来たという事です」

「取り戻す？」

「ええ。今森は奪われているじゃないですか。取り返しに行かれないでしょう？」

「……」

エーファは無言で手紙と男とを交互に眺めた。そして、最後に力ウンターの上の料理達に目が戻る。

マスターと、料理越しに目が合った。

「まあ、先に食べ食べ。すっかり料理も冷めちまうわ」

スプーン等の食器を置きながら、マスターは男にも席を勧めた。

「とりあえずあんたも、まずは座ったらどうだ？　すぐに終わる話でもないみたいだが」

「ははは、私としては簡単な話のつもりでしたけど」

「嬢ちゃんにはそうでもないみたいだが」

「見習いさんには難しいお話でしたかね」

可愛い顔に合わず、嫌みな奴だ。もっともエーファに気にした様子はなく、マスターが用意した料理をがつついている。

男はエーファの隣に、席一つ開けて腰を下ろした。

「でも真面目な話、早く行った方がいいと思いますよ。なんだか向こうは人質取っちゃってますし」

さらりとんでもない単語が飛び出してきた。エーファはやつぱり気にした様子はなく、代わりにマスターが口を挟む。

「人質？ えらく物騒な話だな、おい」

「まあ私もそこまで直接的な手段に訴えるとは思ってなかったんですが、先程ちよつと森の様子を見るに、どうもそれらしい感じの女の子が居まして」

「女の子？」

エーファの頭に過ぎったのはリサだ。そういえば遊びに行っても良いかと聞かれ、いつでも歓迎だと答えは覚えはあったが、まさか

「お知り合いですか？」

「リサだったら知っている。後マルタとロッテも」

知っている女の子といえばこれくらいか。

「生憎名前までは見えなかったのですが、その子かまでは分かりませんが、可能性はありますね。あんな森に用がある人間はなかなか居ないようですから」

「野草取りじゃないのか？」

「魔女の森に野草取りですか？」

「古い町の人間ならともかく、最近この街に来た奴らは魔女の森なんぞ知らんだろ。気にもしてないんじゃないか」

「そういうものですか」

「そういつもんらしいな」

それきりマスターと男の会話は止んだ。

バックミュージックを流す蓄音機なんて気の利いた物を置いてない店だから、沈黙が降りると雑音がいやに響く。

エーファがもぐもぐと食べる音、イルマがぴちゃぴちゃと舐める音。

そして、どすどすと騒がしい複数の足音。

彼ら、もしくは彼女らは『カツッ』を通り過ぎ、真っ直ぐに二階へと向かう。

そして、

「ぬあ？ な、なんだお前ら！？ ちょ、何しやがる！！？？」

どたんばんと暴れる音と、ロルフの間抜けなな声。

これは、

「穏やかじゃない様子ですね、上は」

「……行ってくる。留守番頼むぞ」

放っておけない。大事な常連客である。

「構いませんよ」

ロルフと知り合いらしいエーファに頼んだつもりだったが、返事をしたのは男の方だった。

「それよりも私も一緒にしましょうか？　こう見えても腕に覚えはあるんですよ？」

「結構だ。俺の家壊すつもりか」

「いえいえ。でも、とても物騒な匂いがするものですから」

同感だった。

なにかヤバイ感じがする。あいつら、何に首突っ込みやがった！？

「私が行こう」

「ん？」

口元を勇ましく拭いながら、それまで食事に夢中だったエーファが立ち上がる。

「嬢ちゃんか？」

「空腹は満ちた。準備は万端だからな」

意味が分からない。

「いや、いいって。嬢ちゃんが行くとまたややこしい事になりそう

だしな、」

そもそもマスターとしては上の様子を見に行くだけの話だ。ロルフが何かヤバイ雰囲気になっているなら仲裁してやってもいいが、あくまで仲裁だ。話し合いで解決。暴力なんてもつての他。

「あいつらには聞きたい事も聞けてない。だからちよつど良い」

淡々とそう一方的に告げると、エーファは扉に向かう。

制止する間もあればこそ。

「ちょ、ちよつと待てって」

マスターが止めるのも聞かず、エーファは一人店を出た。

にゃおん

どこか馬鹿にしたような、猫の鳴き声がやけに響いた。そして、

どがんっ!!

爆発音が轟くのはもう少し後の事だった。

あいつらに聞きたい事はたくさんあった。あの時は眠たかったし飛びたかったから、良く聞きもせずに飛び出してしまったが、そのおかげ今ちよつと困っている。

イルマに事情を説明しようにも、ろくに話を聞かずに飛び出して来たのだから、エーファ自身も何故森を出ていく羽目になったのか今ひとつ理解できていない。いや、全く分かってなかった。

「……はあ」

二階へと続く階段を昇りながら、エーファはため息を吐いた。

面倒。

腹はふくれて準備万端の筈だが、一向に気持ちいがのらない。やる気が出ない。

やる気とはアレだ、絞り出すものか。それとも沸いて出てくるのか降ってくるものなのか。

とりあえず何でも良いから出て来て欲しいのだが、やっぱり出てこない。別にさっき食べたシチューに問題があるんじゃない。アリアさんのよりもずっと美味しかったが、ちよつと濃すぎた。あれはもっと煮詰めるかしてクリームソースみたいに、ドリアにしたりパスタにかけたりしたら美味しいんじゃないかと、全く関係無い事を考え、気を紛らわしてみるが、無駄だった。

ただ時間は過ぎ、歩いた分だけ距離は縮まった。覚悟が決まる前に、向き合う事になる。

「ここは取り込み中です。それ以上進むのはやめ、引き返さない」
階段を上がりきった所で、エーファは二人の女に行く手を阻まれる。

赤茶色の制服の女だ。

あの、森に突然現れた女達。エーファが聞きたい事があったのはこちらだ。

「引き返さない。面倒に巻き込まれなくなったら、大人しく従いなさい。我々としても荒事は好む所ではないの」

親切とも取れる女の言葉に、エーファは鷹揚に肯いた。

「そうか」

歩みを止めぬまま、女達を押しつけて。

「ちょ、止まりなさい!」

「それ以上進むなら——きゃあ!」

この女達では話にならない。あの時何か喋っていた眼鏡の女じゃないと。ここに来ている筈だ、同じ匂いがするから。

「騒しいですね、一体何が、」

「……また会ったな」

居た。

部屋の中からあの眼鏡の女が現れる。

「ここで会えるなんて、私はなんて幸運なんでしょう。これであのお方のご機嫌もすぐに治りますね」

「……あんたに聞きたい事がある」

歩みを止め、エーファは尋ねる。

「ええ、なんででしょう？」

応えながら眼鏡の女は目でエーファの後ろに立つ女二人に、仕草でまだ部屋に残っていた女達に合図を出す。女達はエーファを囲むよう、陣形を築いた。

そんな眼鏡の女を警戒する事もなく、エーファは尋ねた。こういう状況になった、その理由を。

「なあ、何故私は森を出たんだ？」

「そうですね、昨日もご説明した通り、あの森が我が社の所有になったからだと思います」

「そうだったのか……ふうん」

これで合点がいった。あの男が取り返すと言っていたのも、これで理解できた。

「よろしいですか？」

「どうしてこうなったのか、その理由は分かった……と、思っ」

「そうですか、それではこちらの用件を――」

眼鏡の女が言いかけるのは遮り、エーファは告げる。

「私は森に帰る」

「帰るとは？ あの森は我が社の――」

「取り戻す。そう言ってくれた奴もいる」

「……」

眼鏡の女は無言で右手を上げた。それを合図に女達が飛びかかる。頭に腕に腰に足に、女達は押さえ込もうと飛びかかった。

エーファはそれらを物理的な力で排除した。それだけの力が、エーファにはあった。

「きゃあ」「うっ」「くうあ」「がっ」「あうっ」

鬱陶しげにエーファが振り払うだけで、女達はほこりのように簡単に振り払われる。

「帰って伝えるがいい。私は、魔女は、」

魔女。そう、私は魔女になる。見習いは今日でお終い。リサにも言った継承の儀式というヤツ、実はよく分からないが、分からないって事は多分重要じゃないはずだ。名乗ってしまえばこちらのものだろう、先代魔女はもう居ないのだから。うん。

もう詐欺としか言えない、理屈ですらない理屈をこねて、エーフアは自分で納得する。

「魔女様は森に居ると伝えるがいい」

はつきり言い切ると、なんとも言えない充実感が胸を満たす。ほかほかと暖かい。わくわくどきどきと胸も高鳴る。力が沸いてくる。これだ、やる気が出た瞬間。

「魔女様は逃げも隠れもしない！」

「……最初に逃げたのはそちらでしょう？」

きっぱりと宣言すれば、眼鏡の女は呆れた調子で突っ込む。

「あなたがちゃんと人の話を聞かずに突然飛び出したからこうなってるんですよ？ 何を偉そうに逃げも隠れもしないって……馬鹿じゃないですか？」

水を差されるとはこういう事か。眼鏡の女の正論に、やる気はしばらく減った。

そうですねー、確かにろくすっぽ話聞かずに飛び出したのは私で

すよー魔女様の方ですよー。へんだ、でもいいもんねー、今から帰ればいいんですよー。

「……まあ、ともかく」

気を取り直しながら、エーファは改めて宣言する。

「魔女様は今から森に帰る。私に用があるなら森に来るんだな。お茶ぐらいなら出してやるぞ」

「遠慮しておきます」

眼鏡の女は黒い何かを放り投げた。

瞬間的にそれを危険物だと判断したエーファは、それを包み込んだ。

どがんっ！！

完全には包み込まない。少し隙間を開けておく。その方が衝撃は少ないから。隙間の肉は多少裂けるが、切り傷みたいなもので、打撲よりはマシ。痛いけど。

「……本当、羽を生やした時も化け物だと思ったけれど、その腕。あなたはなんなの？」

「魔女様は魔女様だ」

エーファの右手は伸びていた。手の部分は浅黒く変色し、鱗のよ
うなものまで生えている。かつて黒岩竜と呼ばれた魔物の腕だ。ぽ
たぽたと落ちる血は赤い。

「それよりもお前、それはやめた方がいい。こいつらも怪我するぞ」

狭い通路で、他に逃げ場ない。逃げるつもりもない女達。それに
何人かはエーファが無理に振り払ったせいで骨が折れているだろう。

「構いません。危険手当もちゃんとついてますから」

眼鏡の女はむしろ微笑みすら浮かべて言った。

危険手当はなんなのか。分からないエーファはなんと言えいい
か分からない。しかしそれは違うだろうとは感じた。

「そういう問題じゃねえだろ」

「いえいえご主人、とても大切な事ですよ」

「バツカじゃないの」

代わりに答える声が三つ。

「嬢ちゃん達よ、俺の家で荒事は勘弁してくれ。さっきすげえ音が
したが、何も壊してねえだろうな？」

建物を心配するマスターと、

「初めまして。あなた方があのメルディン社の方ですか？」

にこやかに挨拶する男と、

「アンタその腕みつともないからやめなさいよ。戻れなくなったらどうするの？ 嫌でしょそんな腕は」

イルマだ。

イルマ。魔女の使い魔の。

「……なあ、私はなんだと思う？」

突然の問いに、誰もが怪訝な目をエーファに向ける。だがイルマだけは面倒臭げにだが、はっきりと答えた。

「魔女なんでしょ？」

「そう、私は魔女」

見習いでは、もつない。

魔女になる。

そう心に浮かんだ瞬間。その瞬間から。

やる気以上に心に満ちあふれるもの。強い力を感じる。世界がまるで光っているように見えた。輝きに満ちている。

「魔女になる」

宣言すれば、それは事実となる。認めればいい。認められれば、それは事実になる。儀式など関係無い。

「魔女に、なった」

簡単な話だ。少なくともエーファにとっては。魔女になるってどういう事なのか分からないけれど。けれど、魔女がどんなものなのかは知っている。先代魔女の事は分かっている。彼女みたいになればいいんだ。

「それではあの森はあなたの物ですね、魔女殿」

男の言葉に、眼鏡の女は反発する。

「何を馬鹿な、あの森は我々メルディン社の――」

「それはつい先程までのお話です。ここにあの森の所有者を明記した書類がありまして、それによると森は魔女の物だという事ですよ？」

「どついう、事です？」

「特例が認められたのです。前国王ジークフリード様より。見習いの小娘には無理だろうが、一人前の魔女ならばあの森を上手く治められると。ですから、あの森は魔女の物です。魔女がこの街に存在する限りね」

「馬鹿な……」

「他国の人には理解できないでしょうが、この国では法よりも王族

が上なんです。順位をつけられね。ですから、あなた方が今言った事は無効になります。森は魔女の物だと、ジークフリード様が認められましたから」

「……辺境が！」

眼鏡の女はそう言い捨てると、くるりと背を向けた。

「とりあえずここは帰らせて頂きます。仕事が増えてしまいましたから」

「そうか」

エーファが鷹揚に肯けば、眼鏡の女は忌々しげに、

「はい。それでは、失礼」

眼鏡の女が片手を上げる。すると彼女の足下に魔法陣が現れ、白く光り輝くと、次の瞬間には女は消えていた。苦痛に呻く、部下達を残して。

「おいおい……なんて事だ」

マスターの呆れた声。何故呆れているのか、エーファには分からなかったし興味もなかった。エーファが興味引かれるのは結局、自分のことでしかない。関係のない他人は目にも入らない。

「帰るぞ、イルマ」

早く帰らなければ。その思いだけがエーファの頭を占める。

「その前に、魔女ならば務めを果たしなさいな」

使い魔はとても静かにエーファの前に立ち、囁くように告げた。

「務め？」

「そんな事も分らないの？ 分からないなら魔女を名乗る資格は——いいえ、はっきりと口にするのは止めておきましょう。軽々しく口に乗せていい言葉ではないものね」

「……」

エーファは黙って、倒れ伏す女達を眺めた。また先程までイルマと大男が戯れていた部屋からは女が一人、こちらを見ていた。どれも恐怖と混乱に震えている。

何故自分が恐れられているのか、エーファにはさっぱり見当がつかなかった。とりあえずこの人なごらる腕のせいかと考え、腕を元に戻した。破れた服は元には戻らなかったが、腕は元通り、人の腕にもどった。戻す時の力で傷も癒した腕は細く白く、華奢ですらある。

元に戻った腕の柔らかな感触を楽しむように、エーファは腕を撫でた。

撫でながら、イルマの言った言葉の意味を考えた。

マスターや男に目を向けても、彼らはただ肩を竦めるだけだった。マスターは途方に暮れているようで、逆に男は成り行きを愉快げに

見守っているようだ。助言を得る事はできそうにない。

「おいおい、怪我してるじゃないか。早く手当してやれよ。それが、病院に連れて行かないと」

助言は別の所から与えられた。大男だ。戸惑う女達に構うことなく、大男は周りの者に助けを求めた。

「なに突っ立ってるんだお前ら。早くしねえと、」

「あ、ああ、そうだな。おれも手伝うでしょう」

マスターがぎこちなく動き出した。マスターは動揺しているらしい。

「そうか、じゃあ私も手伝おう」

エーファは何の悪気もなく言った。しかし女達は恐怖に震え、まるで呪縛が解けたかのように一斉に同じ呪文を口にし、男達が手を貸す前に魔術で転移した。

「……な、なんだあいつら。いきなりやって来たと思ったらまた突然いなくなるし！ 全くなんだってんだ！？」

「私の家にも来ていた」

「そ、そうなのか？ じゃああなたの客って訳か？」

大男の問いには答えず、エーファは歩き出した。森に帰る為。家に帰ろうと、決意した。

今更ながら、ゲルトの家に行ったのは失敗だったかもしれないと
エーファは考え始めていた。巻き込むべきではなかったかもしれない。
現にアリアは少し苛立っていた。

まあ、今更な話だ。時はもう戻せない。次回にこの後悔を生かそうと、エーファは心に決めた。

「そのまま帰るような人間だったら、私はあなたを危険人物として報告しなければならなかったでしょう。魔女は魔女でも、邪悪な魔女として」

大男を通り過ぎ、マスターの横をすり抜け男の傍を通り過ぎる時、彼は薄い笑顔のまま囁いた。

「……都合が悪いか良いかの違いじゃないのか？」

誰にとって、とはわざわざ指摘しない。一瞬足を止め、そう言い返すとエーファは相手の反応を待たずに歩きだした。男がどう思おうと、エーファにはどうでも良かった。

ただエーファについて男を通り過ぎる時、黒猫が興味深げに男の顔を見上げれば、彼はやはり薄い笑みを貼り付けたままだった。その笑顔の下で何を考えているか、イルマには見当もつかなかった。

「……そう、あの子はそう言ったのね」

カップを優雅に傾けながら、ロゼッタは感慨深げに言った。

「はい。如何いたしましょう？」

「そうねえ、向こうから来てくれるなら話は早いわ。放っておきなさい」

「彼らはどのように？」

「お茶に招待しましょう。あの子が来る時、一緒にお茶できたら素敵じゃない？　ね、そうは思いませんか？　クルトさん」

「……早く帰してやって下さい」

机にうつぶせのまま、クルトは答えた。

今現在机で優雅にお茶しているのはロゼッタとクルトの二人だけ。少女と男は檻に入れられていた。

一体あれから何時間過ぎたのか。過ぎてみればあつという間な気もするが、辺りは薄暗い。座りっぱなしのせいか背中と腰も痛くなってきた。

「それは駄目です。今帰したらこの子達は確実に騒ぎを起こすでしょう。これから大事なお話があるのに、それは好ましくありません

わ

「!!!!」

男が何か言っているのが見える。声は聞こえないが、まあ何を言っているのか想像はつく。クルトだって似たような気持ちだ。今後は本気でロゼッタとの付き合いを考えねばならないだろう。少女の方は気落ちした様子で、今の所大人しくしている。賢明な判断だ。騒いだ所でこちらには声は届かないし、自分ではどうしようもない。

それと、もう一人。

「あなたにも是非同席して頂くわ。あの子も喜ぶでしょう、楽しみね」

「……あんたは誰だ」

「先程挨拶は済ませたでしょう。嫌ですわ、もうお忘れになったの？」

男は無言でもって答えた。

言葉通りロゼッタは先程名乗ってはいた。名前だけ。男が尋ねたのはそれだけじゃないだろうに。

今にも唸って飛びかかりそうな荒々しい容貌の男だが、見た目に反して理性的な男らしい。唸りもせずに大人しく席に着いている。足に鎖が繋がれてはいるが。

「あなたはあの子の名付け親ですってね。素敵だわ。だからあの子

の為に来て下さったのね」

男が無理矢理連れて来られたのは明らかだ。ロゼッタの白々しさに、クルトは背筋が寒くなるよりも力が抜けた。なんかもう、どうでもよくなってくる。危機感がどんどん薄れていく。まるでロゼッタの一人芝居を見物している気分だ。これからどうなるのか、非常にスリリングな演劇であるが。できれば芝居の中でくらはハッピーエンドを要求したい。

「……あいつに、何をさせる気だ？」

「私はただ欲しいだけ。あの子が取り戻すというのなら、私も取り戻してみたいだけですわ」

やはりとてもお美しい微笑みを浮かべながら、ロゼッタは意味深な答えを返した。

そうこうしている内に――

「彼女が来ました。どうしましょう？ 私を迎えに参りましょうか？」

地味男がしゃしゃり出る。彼女に会えるなら自分が行きたいが、そんな気力もない。ロゼッタに吸い取られたようだ。突っ伏したまま、横目でクルトは向こうの様子をうかがう。

「そうね、あなたにお願いしようかしら。あなたもあの子には興味あるでしょう？」

「はい、魔法を探求する者としては、当然」

「素直でよろしい」

ロゼツタは若返ったようだ。元から子供じみた所がある人だが、今は拍車がかかっている。言動が幼くなり、なんかこう、上手く言えないが無邪気な若さがにじみ出ている。クルトの気のせいかもしれないが。

ロゼツタは微笑んだまま、右手で空を切った。それだけで、たったそれだけの動作で男の姿は静かにかき消えた。

さつきもそうだった。

あのいけ好かない男と、リサと名乗った少女。二人ともロゼツタが軽く手を振っただけで、次の瞬間にはいつの間にか現れていた檻の中に入れられた。

魔術士ではないから断言はできないが、これは魔術の範疇を超えている。通常、術を行使する場合は『設定』を行う必要がある。力をどこから持つてくるとか発動条件、術の効果等、いわゆる術の設定図だ。設定の方法は様々だ。単純な術ならば力ある言葉や紋章一つでも十分で、つまり呪文を唱える、印を切るだけで術は発動する。しかし複雑で大きな術となると、呪文だけや紋章だけでは術を設定しきれない、らしい。だから呪文と紋章を組み合わせたりと色々な設計図が出来上がる。ようだ。

ロゼツタが先程からなんでもないようにやってみせる空間転移の術。あれはかなり大規模な術の部類に入る筈だ。

大きな街ならば大概設置されているポータブル。この駅は鉄道や

馬車、船ではなくて魔術による空間転移の駅である。ポータブル間でしか移動はできないが、距離が何千キロとあるうと一瞬で到着する。お値段は超高いが、

最近このグレイソンの街にも設置された。他の街に比べると規模は小さく、一度に転移できる最大人数は三人と世界最小のポータブルだが、隣にある鉄道の駅よりも建物は大きい。その建物の壁・床・天井全てに紋章が刻まれている。紋章は常に薄く鈍く点滅し、夜にはそれは幻想的な光景となっている。今や人気のデートスポットの一つである。

「……」

クルトは目を閉じ、身体のを抜いた。

疲れた。その一言に尽きる。

次目を開けたら、どうか見慣れた我が家でありますように。

闇だ。

深い闇。全て沈んでいる。

「……で、アンタこれからどうするつもり？ 森へ行っても今のアンタは余所者よ？ 見たら分かるでしょう？」

イルマに言われるまでもなく、エーファは一目で分かった。

「ごく一部であるが、森は変質していた。もはや別の空間ですらある。しかし、変化しているのはごく一部。ほんの一部。これくらいなら変わったとは言えない。と、エーファは思う。」

「猫さんは半分正解、半分不正解って所ですね」

唐突な男の声に、エーファとイルマは全く動じなかった。

「驚いていませんね。残念。驚かそうと思ったのに」

薄っぺらい笑顔を貼り付けたまま、大して残念がっていない様子で、男は森から現れた。

右手に灯りのついたカンテラを持ち、闇を小さく照らしてる。

「お前はそこ居るのだから、喋ったっておかしくないだろう。何を驚くんだ？」

「誰も居ないと思ってた所にいきなり声かけられたら、普通はびっくりするんじゃない？」

「確かに、声だけしたらちよつとびっくりするな」

「でしょう？ 誰だか知らないけど、そんな事ぐらいじゃ驚かないわよ、アタシ達は」

「まあ、別に私はあなた方を脅かしに来た訳ではないですから、いいんです。そろよりも——」

「負け惜しみか」

珍しい事にエーファが噛みついた。

「負け惜しみね」

乗っかってやれば、

「……はは、これは手厳しい」

男の薄い笑みが少しだけ張り付く。いい気味だと、イルマは少し楽しくなってきた。

先程から散々な目に合っている。すこしばかり意地悪をしたって許されるはずだ。どうせこの男も、あの眼鏡女の仲間なのだろうし。そもそも、魔女や魔法使いでもないのにイルマの言葉を理解できる者も珍しい。イルマにとっては貴重な存在だ。これでもっと色男ならば文句はつけようがないのだが、

「まあ、ともかく。本題に入りましょう。我が主人が――」

「断る」

また男の言葉を遮って、短くエーファは言い放ち、無遠慮に一步、大きく前進した。

「……力ずくですか。綺麗な顔して、乱暴な人ですね。残念です」

「違うわ、単に怒っているの。これは」

珍しい事だと、小さく驚きながらイルマは己の前に立つエーファを眺めた。

そう、エーファは怒っていた。

仲間をあつさり見捨てていく、あの眼鏡の女のやり方を。そして見捨てられた女達の姿が重なって見えて、非常に不愉快だった。

昔の自分に。

いや、現在進行形での自分に重なって見えて、不愉快だった。早く帰りたいかった。誰も居ないけれど、暖かい我が家へ。ゲルトにも会いたくなかった。なにかあるとすぐに会いたくなる人だけれど、今は会いたくない。

八つ当たりを、してしまいそうだから。

「八つ当たりされなくなったら大人しく道を開けなさい。ここはアタシ達の家だもの。案内は結構よ」

流石は使い魔。ちゃんと主人の状態を分かっているじゃないか。なんて、偉そうな事を考えつつ、エーファはもう一歩踏み出した。

男は無言で森へ数歩、退いた。

警戒している。少し緊張してきているようだ。男の纏う空気と匂いが若干変わった。

「……弱りましたね。私は戦闘とか苦手なんですが。ほら、私は研究者ですから、本当は」

口ではそんな弱腰な事を言いながらも、引く気はないようだ。力が、男の元に集まりつつあるのがよく見えた。

「どうでもいい。邪魔をするのなら相手をするだけ」

「やめておきましょう。言ってるじゃないですか、私の専門は研究だって。勘弁して下さいよ、ただでさえ慣れない事務仕事でストレス溜まつてるんですから。駄々をこねるのは止めて下さい。全く、親子揃ってろくでもないですね」

「関係無い」

「そうですか？ 見たところ大部分はあの子みたいじゃないですか？ あの人喜ぶでしょうね」

「黙れ」

男の言葉に反応するものがあつた。ざわざわと、身体の奥底がざわめく。一人喚けば、それはあつという間に全体に広がった。嘆き悲しみ喜び怒り、諦め。絶望。様々な声が波のようにエーファを襲う。

—— まま、まあま

—— おおおおおおん……

—— >。 □！！！？？？*****

——GA!A!A!A A A Y A A A!!!!

煩い。

うるさくて堪らない。

「黙れ!」

久しぶり過ぎるそれらの存在に少し懐かしさも覚えるが、やっぱりうるさい。煩わしい存在だ。

「私はなにも言っていないですよ?」

男は面白がっている。エーファがなにでできているか理解した上で、揺さぶっている。どこを揺さぶれば一番大きく揺れるか、全部理解した上で。

「ど、どうしたのよアンタ?　しつかりして頂戴!」

逆にイルマは狼狽えていた。珍しくくらいに狼狽えてた。いつもの太々しさはどこに行った?　ここにはイルマを弄ぶ奴はいないというのに、なにをそんなに動揺している?

後ろから飛び出して、まるで男からエーファを庇うように二人の間に割り込み、イルマはエーファに叫んだ。

「しつかりしなさいよアンタ!　ここが家に帰れるかの瀬戸際でしょう!?　もうたくさんよ、早く帰りましょう。家はすぐそこよ。分かってるでしょう?　何度も帰った家だもの。分らない筈ないわ」

その通り。森に一步足を踏み入れば、望むだけで家との距離は消える。森は目の前。つまり家はすぐそこ。目の前。分かってはいても、何故か声にならない。

イルマはなおも吠えた。反応のないエーファを揺さぶるように。

「それにアンタは満腹かもしれないけど、アタシのお腹はペコペコなのよ。アタシが満足するご飯用意するって、アンタ誓ったでしょう！？ 魔女の誓いよ、忘れたの？ 破ったらどうなるのか、アンタ分かってんの！？」

いや、分からないな。

即答しかけたが、口に出すのはやめた。部外者がいるから対面が悪い。

「……そういえば、そうだな。約束したな」

「そうよ。そうでしょう？ アンタ何一人だけでゴハン食べてるのよ！」

イルマは憤慨している。ここまで感情を表すイルマも珍しい……それは、自分も同じか。

唐突にエーファは興が冷めた。頭が冷えたといっていい。変わらずに己の内側で声達は煩いが、もうそんなに不快ではなくなっていた。イルマのお陰だ。エーファという存在を強く認識できた。

「悪い。失礼な真似をしたな。謝るから水に流して欲しい」

男に向かって小さく頭を下げる。

八つ当たりなんて、最低だ。どんな相手でも、いかなる理由があるとも。

「構いませんよ」

男はエーファの謝罪を快く受け入れた。

「では、参りましょうか。ご案内しますよ」

男はカンテラを森の方へと照らした。すると細い道が現れる。イルマが不安気にエーファを見上げたので、エーファは小さく肯いてみせた。

「大丈夫。私に敵うものなんていないから」

「別に、怯えてなんかいないわ」

「そう。それはよかった」

そこは道というよりも空間だった。

ほんのりと淡く光る緑の道と、それを取り巻く白い空間。所々街灯のような物が建っているが灯りはついておらず、ただのオブジェらしい。

そこには天と地はあつたが、前と後ろはない。ただ進むだけ。本当に進んでいるのか、分からなくなる。

「一つ聞いても良いですか？」

先導していた男が唐突に口を開く。前を向いたまま、振り返り燃せずに、淡々とエーファに尋ねた。

「ああ」

「あなたって、なんなんですか？」

「分かってるんじゃないのか？」

エーファの返答はにべもなかった。

「まあ、確かにちょっとは知ってましたけど、でも少しばかり違うみたいですから。ほら、私ってこんな事してますけど、本職は研究者でしょう？ 小さな事でも気になると説明せずにはいられないんですよ」

勿論男——メルディン社特別顧問、ミハエル・フォグナーは全て知っていた。エーファという存在の在り方全てを。しかし、それは十五年前の、エーファがこの街にやって来た時のお話。それから後の事は分らない。というか、ミハエルにしてみればこうして生きている事が信じられない。当時はとても不安定で、今にも壊れそうなものだったのに——というか、壊れる事があれの目的だった。

「先に私の質問に答えたら、教えても良い」

母親に似て、傲慢な物言いだ。ただこの子は母親と違い、それが高慢だとは知らないだろう。母親は分かった上でやるが、この子は違う。だから似ていると感じても、受ける印象が全く違う。

「いいですよ、私に分かる範囲でしたら何でもお答えします」

「なんでこんな事になったんだ？」

「……」

あまりにも根本的な問いに、ミハエルはどこから話したものかと一瞬悩む。

「……それは、そうですね。まあ順序よく言えば元々この森は狙われてたんです。ずっと前から。金銭等で買い取れば話は簡単だったんですけど、それはきつぱりと断られてましたからね。それで次の手段として、国の上層部に色々なお話をして、強引に乗っ取ろうと、そういう話です。勿論合法でね」

「合法、ねえ……」

含みのあるイルマの眩きを無視して、ミハエルは肩を竦めて見せた。

「しかし、それも前国王様のお陰で水の泡になりそうですけど。厄介ですよねえ、王国というのは」

ミハエルはこの国の出身ではない。もっと大きな国、東の共和国の出身だ。メルディン社の本社もその共和国にある。

ミハエルの常識によれば、法とは絶対だ。色々と抜け道はあるものの、それは小さな網の目を抜けるようなもので、ぶち破る事は不可能だ。だというのに、この国では紙切れ一枚でころころと法は変わる。故郷では考えられない事だ。

「はい、私はちゃんと答えましたよ。次はあなたの番です」

「私は私だ」

エーファの返答はにべもない。

「……まあ、それはそうですけどね」

もつと他に言い方はあるだろうに。

呆れて振り返ると、あの子は退屈そうに地べたに座り込んでいた。猫も隣で大人しくしている。歩いていたのは、ミハエル一人だけだった。

「……いつ気がついたんです？　ここに道が無い事に」

「入ればすぐに分かる」

やはりエーファの返答は素っ気ない。だが彼女らしい答え方だ。

「そうですか……上手くできてたと思うんですけど」

この空間は、全て見せかけだ。ここには何もない。なにも。歩いているように感じてても、それは全てまやかし。

空間すら統べる魔術士にとって、道とは点だ。繋いだ点と点を移動する。踏み入れればそこは目的地であり、歩くという物理行動は無意味だ。

「魔女様だからな、分かる」

何でもありとはずるい。それはちょっと、ずるくないか？

「……で、結局私の質問には答えてくれないんですか？」

「答えたぞ」

「私は私、ですか？」

「他に言いようがない」

「見たままの事よねー」

猫とその飼い主は呑気なものだ。こちらの事情や想いなど、気にも留めていない。それがらしいと言えば、らしいのか。

「手厳しいですね」

「無駄話は終わりだ。早く案内しろ」

ついさっきまで、森で会った時はこちらの言葉に簡単に動揺していたのに。この違いはなんだ？

「はいはい、分りましたよ。今日の所は諦めましょう」

そう、機会はいくらでもある。これから先この子が魔女として生きるとしても、ロゼッタの玩具になるとしても、どちらにしても調べる機会はある。できれば動いている方が色々実験できるから望ましいが、欠片一つでも構わない。本来ならばこれはもうとつくに、壊れているはずの検体なのだから。

そうミハエルは自分を納得させて、己の務めを果たす。これを、ロゼッタの元へ連れて行くことを。

「それではこちらへ。お母様が、お待ちですよ」

「……」

あえて挑発的に言ってみせても、エーファは特に表情を変える事はなく、また何も言わなかった。

少しだけつまらないと残念に思いながら、ミハエルは道を繋いだ。

皆が揃う、あの場へ。

何もできる事がなかった。町長に相談するしか思いつかないでいたが、それとこれとはまた話が別だろう。

ゲルトは己の無力さにやり切れなさを覚えていた。

情けなくはない。己は魔女や魔法使いではない。だから、彼らのような存在からすれば己がちっぽけなものだって、よく分かっている。世の中に公平なものはない。理不尽ばかりだ。

「……」

自分をこの場所に連れてきた男がエーファを迎えに行つてから数分、あるいはほんの数十秒の間、誰一人として言葉を発さなかった。

ロゼッタと名乗った女は腕を組み、身体を深く椅子に沈み込ませ、目を閉じていた。眼鏡の女は番犬のようにロゼッタの後ろで直立不動の姿勢。クルトと呼ばれていた男はだらしく机にうつぶせている。そして、檻の中の青年と少女。あの二人は誰で、何故こんな所にいる？ たまたま森に入り、捕まったのか？ 有り得ない話ではないが……いや、青年の方には見覚えがある。それもよくない印象で。おまけに実に久し振りの再会……とは少し違うが、まあ再会に違いない。すぐには思い出せなかった。

はて、誰だったか。

ゲルトがさらに記憶の糸をたどろうとしたその時、まさにその瞬間、ぬつと、あの男は音もなく現れた。エーファを連れて。

「！」

男に連れられたエーファを見て、その格好に少しだけゲルトは驚いた。

エーファは昔妻がよく着ていた服を着ている。チェック柄のワンピースに、深緑のジャケット。

同じ服でも受ける印象は妻とエーファでは全く違う。ややふくよかな妻が着ていた時は柔らかい、ぽかぽか陽気をおもわせるが、エーファは全く違う。細身であるエーファが着れば、そこからはさわやかな初夏の涼しさを感じさせる。

まあ、最も。

せつかくの装いも、何故かジャケットの右腕の肩から下の部分が引きちぎったように破れ、台無しだ。この子らしいといえはこの子らしいのだが……。

エーファは昔からよく服を破していた。怪我がないのがふしぎなくらいに。今までは木の枝やなんかにつっ掛けて、それを力づくで引っ張った為に破れていたのかと思っていたが、昨日のあれをみるに、もしかしたら別の理由かもしれない。ゲルトにとっては、どちらでも大した事ではないが。

「御苦労様、ミハエル。もう下がってもらって結構よ」

随分と偉そうな態度だ。ミハエルは肩を竦めると、そのまま現れた時と同じように音もなく消えた。

しかし、まあ、

「誰だ、お前」

それはうちの娘にも言えることだったが。

エーファは、こんな状況だというのに微塵も動揺していない。ここに来るまでに何か聞かされたのか。若干イラつているようだが、誰だって家の前で好き勝手されたら不快だろう。好き勝手というレベルではないが。

「……お前の母親らしいぞ」

いつも通りのエーファを見たら、ゲルトはだんだんと落ち着いてきた。なんだか大した事のないように思え始めたから、不思議だ。鎖で繋がれてはいるが。

「ふふ、初めましてというべきかしら」

ロゼッタに目を向けると、彼女は妖艶な笑みを浮かべ、笑っていた。

「ゲルトを放せ。リサと……もう一人も。あと、ここは私の家だ。さっさと出て行け」

「何年ぶりかしらね、あなたとこうして語り合つのは」

エーファの言葉を見殺して、全く穏やかな調子を崩さずに、ロゼッタは続けた。

「覚えているかしら？ あなたと初めて言葉を交わしたのはわたくしなのよ」

「覚えてない」

「冷たい子ね。あれだけ色々教えてあげたのに、覚えていないなんて。母は悲しいわ」

「私に母はない」

「そう、わたくしが教えてあげた事はちゃんと理解しているのね。結構」

鷹揚に肯くと、ロゼッタは立ち上がった。

「あなた、魔女になったそうね。ミハエルから聞いたわ。すごいのね」

小さく笑いながら、ロゼッタはゲルトの後ろに立った。

ぞくりと、背中があわだつ。

「でも、母は心配だわ。あなたみたいな化け物が、ちゃんと魔女として——いいえ、そもそもヒトとして生きてけるのかどうか。その素敵なお洋服だって、もう破れてるじゃないの」

ロゼッタの細い指が、ゲルトの頬を撫でる。

その艶めかしい動きに、ゲルトの全身はぞわぞわなにかが駆け抜ける。気持ち良いような悪いような……欲情にも似ているが、身体

の中心は冷えっぱなしだ。しかし、どちらにせよゲルトはどうすることもできなかった。指一本だって動かせない。まさに蛇に睨まれた蛙状態。ちらちらと、冷たい死のイメージがちらつく。

ああ、アリア……それに子供達。

死のイメージがちらつく中、だからこそだろうか。この場にいない、愛しき妻と子供達の姿が頭に浮かんでは消える。

初めてアリアと出会ったのはそう、エーファと出会うよりも前だった。

アリアは近所の小さな商店の娘だ。近所だから昔から知っているが、特にこれといって接点もなく、顔だけ知っているという関係だ。たまに彼女が店番をやっている時に店に入ると、妙に緊張したのを覚えている。

彼女とまともに会話したのはそう、小さな子ども向けの菓子を買った時だった。

『贈りものですか？』

まさか彼女から話しかけてくるとは。ゲルトは混乱のあまり硬直した。

今思えばそれはただの接客だと分かるが、当時はそんな、まともな店で贈り物を買うという習慣がなかったゲルトはひどく動揺した。

両親や知人に贈り物をする場合、山で獲れた物や知り合い達から物々交換で手に入れた物を、そのまま渡していた。

だから、

『男の子です？ それとも女の子？ 好きな色とか分かりますか？
良かったらその色でお包みますよ』

アリアが言っている事の意味は、さっぱり分からなかった。

贈り物に包装など、したことはなかったのだから。

『あ、でもこのお菓子だったら包装紙で包むよりもこういう柄のついたビニールで包んでリボンの方が可愛いかもしれないですね、どうしましょ？ こないだこういうのも入ったので、色々できますよ』

アリアの瞳は、きらきらと輝いていた。

別にちょっとした手土産だし、そう大そうな物ではない。だから、そんな包装など必要はなかった。

のだが、

『……お任せします』

そう答えた時の、

『！ はい、任せてください！』

彼女の嬉しそうな顔。

それが、今になってあまりにも鮮明に思い出される。

まるで走馬灯の最後の一枚のように。

「——だから、母が試して差し上げますわ。あなたがちゃんと、理性のある人間だってことを。この場にいる皆に証明してあげなさい。それができれば大人しくこの地からは手を引きましょう。ここは魔女の森、ですものねえ」

「ゲルトから手を放せ！」

考えてみれば、アリアはエーファを苦手としているようだが、あの子がいなければアリアとあんな風に話しをする事はなかっただろう。もしあったとしても、それは数年後、あるいは数十年後の話だ。現在のような関係には、なっていないかっただろう。

「駄目ですわ。それでは試練にはならないでしょう？ 試練は、ここから、開始ですわ」

痛みはない。

ただ、つんと鼻に突き刺す香りと頬を流れる液体。涙でないことをゲルトはよく知っている。

それは、血だ。

クルトは動けずに、その様を呆然と眺める。

化け物。

それはまさしく化け物だ。

あんな綺麗な人を捕まえて化け物なんて言うから何言ってんだと、ロゼッタを訝しんでいたが、これで良く分かった。

エーファは見る間に変化していった。

歪に歪んだ背中に両腕。服は無残に裂けている。そして巨大なトカゲのような尻尾が、クルトが見ている前でずりりと彼女の後ろから垂れた。細い足が、めきめきと小さな音を立てて象牙色の鱗に覆われていく。あの綺麗な顔は右半分は辛うじて残っているが、左半分は闇に沈んでいる。真っ白だった髪も漆黒に染まり、ざわざわと有り得ない動きをし始めた。

ああ、これを化け物と呼ばずにしてなんというか。

クルトは決して豊富ではない語彙を総動員してみたが、これ以上に相応しい言葉は思いつかなかった。

「あらあら」

ロゼッタは微笑みながら、楽しげにこころ笑った。

ロゼッタにしてみればこの変化は好ましい結果なのだろう。多分、その為にゲルトを傷つけた。

「これでは駄目ね。駄目過ぎですわ。母は失望しました。変化するのにも滅茶苦茶じゃない。折角色々つけてあげたのに、生かしきれないじゃないの」

「……つけるって、その、何を、ですか？」

「ドラゴンとか、色々ですわ」

ゲルトの頬に指を突き刺したまま、ロゼッタはさらりととんでもない事を言った。指からは特殊な薬かはたまた、魔法でも流し込んでいるのだろうか。指が突き刺さっているのに、ゲルトは無表情のままだ。痛みを感じていないようだ。

「は、」

「アレはわたくしの研究成果の一つですわ。ここまで育つとは思いませんでしたけど。それだけに少し惜しいですわね。あんなに育ったのを廃棄するのは……さて、どうしましょう？」

問いかけは、クルトに向けてのもではなかった。そんなの答えようがない。

「エーファに何したのっ！？　っていうか、その男から手を離しなさい！！」

イルマだ。全身を逆立て、低く唸りながらクルトの机の上に躍りで、人の言葉で怒鳴った。

人の言葉は疲れるから喋らないと、あの時は言っていたのに。それだけキレているという事か？

クルトは妙に細かい所に気付く自分がちょっと嫌になった。大切な人が大変な事になっているのに、この冷静さはなんだろう。

「エーファ？ ああ、アレの名前ね。素敵な名前なこと。勿体無い名前ね」

「おだまり！」

毛を逆立てたまま、イルマはぴしゃりと言い放つ。

「どうでもいいから、そいつから手を離しなさい！ あのコがこれ以上暴走する前に、出て行きなさい！」

「出ていくのはあなたの方よ、子猫ちゃん。試練は失敗だもの。あれは魔女ではなく、化け物。化け物なんかはこの森は預けられないわ」

「バカ言わないで！ アタシは魔女エーファの使い魔イルマ。アタシが居る限り、あのコは魔女よ！」

「ん、そうねえ、それは……確かに一理あるわ。まだ完全ではないよね。何が足りないのかしら？ インパクト？」

イルマが示した根拠はクルトにはさっぱりだが、理屈を知る者には通じるらしい。ロゼッタは誰ともなく呟く。

「やはりインパクトではないでしょうか」

ロゼッタの後ろの眼鏡の女性が冷淡な笑みを浮かべながら言った。
嫌な笑みだ。

「そうね。わたくしも同感だわ」

ロゼッタはゲルトの頬から指を引き抜くと、一旦ゲルトの肩に手を置いた。

嫌な予感。

クルトは自然と立ち上がり、いまだ毛を逆立てロゼッタ達に威嚇するイルマの首根っこを掴んで距離を取った。

ナニすんのよ!?

イルマのテレパシーの抗議を無視。クルトの危険察知信号がもの凄い勢いで信号を送ってくる。これはヤバイ、本当に。

「……何をなさるおつもりで？」

緊張に満ちたクルトの問いかけに、ロゼッタいつものようにこりと微笑みながら答えた。

「インパクトですわ」

その瞬間。

ロゼッタの手が目に見えない程の早さで空を切る。

そして、

赤い液体が噴き出す。

どさっ

そこそこな重量を持った物の落下音。

一瞬遅れて生臭い血の匂いがクルトの鼻を刺激する。

ゲルトの頭は、クルトの視界から消えていた。

「……やり過ぎじゃないですか……っ？」

あまりの事にクルトの声は上ずる。

ロゼッタの微笑みは陰ることがなく、むしろ輝きが増すようだ。

「そうかしら？ あなただって人を殺した事ぐらいあるでしょう？
その猫ちゃんも」

「それは、」

そうだけど。

しかし、

「そういう問題じゃ、ないでしょう……？ それに何もあなたが手を下さなくても……」

って違う。そういう問題でもない。何言ってんだ自分。

混乱するクルトに、ロゼッタの声が冷淡に響く。

「ふふ、心配して下さるのね、ありがとう。でも大丈夫ですわ。みんなの殺しても、なんにもないですもの。クルトさん達もそうだけれど、この男もまた無登録市民。存在する筈のない人間。居るはずのない人間を、どうやって殺すというの？」

国が民を管理する。

その思想自体は新しいものではないが、この国においては比較的近年において導入された。戸籍という制度もまた然り。

地方分権が強いこの国では王は大地主といった感じで、国全体を直接治めるのではない。各領主に任されている。各領主の下には町長や村長。彼らが己の町を管理し、領主に税を納める。領主はそこから自分の取り分を貰い、余った分を国に収めるといふ、なんとも適当な制度でこの国は成り立っていた。

そんな曖昧で非効率な税制を改革したのが、現国王。国王は西の大陸諸国ではとつくの昔に実用化されている戸籍登録制度を新たに登用した。

文明国と自称する西の大陸諸国では既に全国民が登録済みの戸籍であるが、この国においては、特に老人や辺境の村の住民の登録は

まだまだ完璧ではない。

「それにわたくしの本籍地は共和国ですから、」

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

問題ないと、言いかけたロゼッタを遮るように声なき叫びが轟く。

大気が震える。

見なくても誰の叫びかなんて分かりきっている。

「ロゼッタ様」

眼鏡の女性がうやうやしく、複雑な魔法陣が描かれた水晶玉をロゼッタの前に差し出す。

「そうね、頃合いだわ」

満足げにロゼッタは肯くと、その水晶玉に手をかざした。すると水晶玉に描かれていた魔法陣は一瞬で消え去り、何秒か遅れて白い光が破裂した。

「！」

あまりのまばゆさに目を庇ったクルトが恐る恐る目を開けると、そこにはもうロゼッタも眼鏡の女性の姿はなかった。テーブルや茶器は残っている。あの二人を捕らえた牢も。

そして、ゲルトという男の死体も。

——あなただって、人くらい殺した事あるでしょう？

否定はしない。身を守る為、仕事の都合等でやった事は、確かにある。しかし、だからと言ってロゼッタと同じだとは思いたくなかった。確かにロゼッタも何かしらの利益を期待しての殺人だが、やり方が。あのやり方は頂けない。手刀というのもアレだが、殺してもいいとか問題ないとか、気にくわない。

これが終わったら流石にロゼッタとの関係を見直さなくては。

ゲルトの死体を眺めながら、クルトは考えた。

痛みは全くなかったようだ。無表情のまま事切れている。最期に何を想ったのか、その表情からは全く読み取れない。

イルマが身体をひねり、クルトの手から逃れた。ゲルトの元へ走り寄り、そしてクルトの後ろ、エーファに目を向ける。

つられるようにして、クルトも後ろを振り返った。

化け物がいる。先程よりも更に化け物が。

複数の魔物や動物がごちゃ混ぜになった魔物だ。

辛うじて二本足で立ってはいるが、左手はうねうねと蠢く触手に覆われ、右手は黒い鱗で覆われた鋭い爪をもつ爬虫類の腕。胴体も黒い鱗で覆われているが、背中では真っ白な毛が覆い、獣のようでも

ある。足は太く、象牙色の鱗で覆われている。尻尾の先は船の碇のように尖り、獲物を見定めるようにゆらりと揺れた。

化け物は現在進行形で、少しずつ大きくなっていた。

最初はエーファより二回り程大きいただけだったのに、今やそれ以上。二階建てのビル程の大きさになっている。

「エーちゃん！」

悲痛に叫ぶ少女の声がクルトの耳に届いた。

さっきまでは彼らの声は聞こえなかったのに、どういう事だ？
そもそも、なんでこの男は首をはねられ、殺される必要があったのだ？

ぐるぐると、クルトの思考は空転する。

あの化け物だってなんなんだ？ 新種の魔物か？

ボサっとしてないで、これ以上あのコを刺激しないようにどうかしなさい！

って、言われても。

クルトは途方にくれて辺りを見回した。

前方には化け物。

その手前には鉄製の牢。

そして、死体。

どうしろと言った？

「おい垂れ目！ ぼさつとしてないでとっとなここからオレ達を出せ！」

「……無茶言っなよ」

やれやれ、どいつもこいつも。

化け物は低く唸りながらも、その場を動かこうとしない。激情に翻弄されながらも、必死に耐えているような。それともまだ状況が分からずに理解しようと頭を働かせているのか。後者ならば相当に頭が残念だが、彼女は綺麗な顔してあまり賢いとは言えなかった。むしろ馬鹿だと思う。

死体になるだけ見ないようにしつつ、クルトは牢の前に移動した。

牢はちょうどエーファとロゼッタ達の間にあった。惨劇も、エーファの変貌も全て見ていたのに二人とも取り乱している様子はない。男の方とはかく、リサという少女もなかなか肝が据わっている。

鉄製の牢。素手でどうこうできる代物ではない。

「……なあ、イルマ」

試しに言ってみる。

「これ、どうにかできないか？」

貸しにしといてあげるわ。ちゃんと返してね

牢の上に上り、イルマは尻尾を振った。それだけあっさりと鉄の牢は崩壊する。

「サンキュー」

いーえ、こちらこそ。どうやって返して貰うか、楽しみにしてるわね

少しだけイルマを頼るのは早まったかと後悔しつつ、クルトは牢の中の二人に声をかけた。

「よ、災難だったな」

「災難で済むかつ!! てめえこの垂れ目っ!!」

「をいをい、俺に当たるのは違うだろ……ってまあ、そうでもないか」

はあ。

深く一息。これからどうしようか。

「そ、そんな事よりヴィリーさん、今は、」

「……くそ」

忌々しげに男は舌打ちすると、エーファの方に目を向けつつ、牢

にから出た。リサは怖々とその後が続く。

「……で、どうする?」

「と、とにかくエーちゃんを落ち着かせないと……あれ、エーちゃんだよ?」

「それ以外のナニに見えるのよ?」

「わ、あ、ね、猫が喋った……」

リサはやはり混乱しているらしい。しどろもどろな反応だ。あんなに元気で明るい少女だったのに。

イルマは苛立たしげに尻尾を振るうと、優雅に牢の上からエーフアとの間に入るように降り立った。

「アンタ達には期待してるよ、特にお嬢ちゃん。エーフアはえらくアンタの事気に入ってたし、アンタだってお友達になってくれたんでしょう、アレの」

アレ。

嫌な言い方をするなあ、と、他人事のようにクルトはイルマとリサの一匹と一人のやり取りを眺めた。

アレ。

イルマがいうアレというのが、エーファであったものだという事は、頭の中で分かっている。

見ていたから。

目の前で変化したから、疑いようがない。

でも、疑わない事と理解する事とはまた違うのだと、リサは矛盾する心を痛いくらいにかきむしった。

「期待してるって、そんな……」

「……こいつもどうにかしないと。このままじゃ不味い、よな」

戸惑うリサの横で、ヴィリーが着ていた上着を脱ぎ、生首を包んだ。

二人はしっかりとこの場での物騒な会話を聞いていた。だから口ゼツタが何者なのか、殺された男の事、エーファが何なのか、なんとなく理解できた。

「おい、垂れ目も手伝え」

「……はあ、仕方ねえな」

「とりあえず家の中に入れよう」

「へいへい」

途端に怖くなる。

なんで。イルマも、あのクルトも、ヴィリーでさえも。

なんで、そんなに平気なの？

死んでる。人が死んで――

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「っ！」

声なき叫びが轟く。

エーファだ。遺体が動かされた事がきっかけだろうか。エーファは一声吠えろと、のそりと動いた。

「げ」

誰の呟きかは分らない。ひどいんじゃないの、って思わないでもないけど、それを言うならリサも同罪だ。

エーファが怖くて、エーファが動いた分だけ後ずさる。遊びになんか来るんじゃないかとさえ思う。なんで、なんでなんでなんで。

「……動かすのはやばくないか？」

「……このままにしておくのもまずいだろ」

「いやいや、下手に刺激するのがやばくね？」

「しかし、」

「様子を見るべきだって。彼女を刺激したくない」

「このままにはしておけねえだろ！」

「んな事は分かってる！　けどな、ああなってる彼女がもしこっち来たら、あんたどうにかできるのか？」

「っ」

ああなってる。

ヴィリーも言葉を失ったが、リサも大きく動揺する。

「あ……」

怖い。

なんで。

アレはナニ。

なにしにきたんだっけ？

そうだ、遊びに来たんだっけ。なにも今日じゃなくてもいいのに。なんで今日来てしまったんだろう。どうして。どうしてあの時のあたしは、立ち入り禁止の看板と太いロープを無視して、入ってしまったんだろう。なんで。

のそりのそり

エーファはゆっくりとだが、近づく。

リサに。その後ろのもう動かなくなったゲルトに。

エーファが横を通り過ぎる時、リサの鼻にひどい匂いがついた。獣の臭い、血の臭い、腐った臭い。

とてもあのエーファのにおいじゃない。

綺麗な人だったのに。だった、じゃない。綺麗な人なのに。なんて臭いをさせているんだろう？

「エーちゃん……」

ぽつりと呟けば、エーファは一瞬歩みを止め、またのそりのそりと、やや速度を落として歩き始めた。

気のせいかもしれない。けれど、気のせいじゃないかもしれない。

リサはエーファを正面にして向き直った。

「エーちゃん……あたし、リサだよ。あたしの事、分かる？」

エーファは無言だ。ただ歩みは止まり、じっと動かなくなった。

その視線の先にはヴィリーとクルトと、頭はヴィリーの上着に包まれ、首のないゲルトの骸がそこにある。

自分の言葉に反応したのか、ゲルトの骸を眺めているのか、リサには判断できなかった。けれども、けれども。

「エーちゃん……どうしたの？ その格好……っていうか、姿？ すごいね、すごい……」

なんて続けていいか分からず、リサは一度口を閉じた。

きれい？　かわいい？　どれも違う。そんなの全然違う。全くもって違う。

見ていられなくなって、リサは視線を足元に落とした。

と。

「いい感じよ、お嬢ちゃん。もっとその調子で言ってやって頂戴」

イルマがリサの足もとにすり寄って囁く。

「あんなになっても耳も口も鼻もちゃんとあるわ。アンタの言葉はちゃんと届いてる」

「そ、そう？」

「ええ。後ろの男共は頼りにならないわ。アンタだけが頼りよ」

ウソだ、そんなこと。怖くて仕方ないのはあたしだけなのに。目の前で人は死ぬし、エーファはこんなになるし、ヴィリーとクルトはその死体を運ぼうとしている。どうして平気でいられるんだろう？

どうして、こんなことを平気で受け止められるんだろう？

「おかしいよ、こんなの変。変だって……おかしいもん。絶対おかしい！」

一度言葉に出すと、感情はせき止められた川のように勢いよく溢れ出す。

「エーちゃんはそんなになっちゃうし、ゲルトさんは、ゲルトさんはさっきまで、さっきまで……さっきまで、そこにいて、エーちゃんのお母さんだって……なんで？ どうして」

初めてエーファと会った時、彼女はゲルトを訪ねる手土産を見定めていた。あの時は直接ゲルトには会えず、奥さんだけを遠目から眺めた。エーファに向けて言った魔女やら魔法を否定する物言いは

気に入らなかったが、でも暖かで素敵な女性であることは見ただけで分かる。

そんな素敵な人が、旦那さんを失う理由なんて、有り得ない。

お子さんだっているらしい。その子達も父親を突然失う意味なんて、分らない。

エーファだつて。

名付け親を目の前で、あんな形で失うなんてひどい。しかも奪った相手は母親を名乗ったあの女性。エーファは「母はない」なんて言つてたけど、そんな訳がない。

「とにかくエーちゃん、いったん落ち着こう！　だつてこんなの変だし、変だし、変だし……」

それ以上言葉が続かず、しかし込み上げてくるものは大きく、リサ自身が変になりそうだ。

「うう……」

おかしい。

あんなに簡単に人が死ぬなんて、おかしい。

間違つてる。

あんなに簡単に人が人を殺すなんて、間違つてる。

「ひつく……」

聞きたいことがたくさんある。分からないことだらけだ。なんでエーファがこんなものになってるのか。

なのに。

「っ、」

自分の口からは嗚咽しか漏れてこない。

泣いてる場合じゃないのに。むしろ泣きたいのはエーファの方だろうくに。

ロゼッタはゲルトがエーファの名付け親だと言っていた。そんな大事な人を、エーファは目の前で亡くした。しかもあんな形で。

言う事を聞かずにあふれ出す涙を拭う。と、黒い触手が眼前にあった。

「ひっ」

おぞましさに身体を仰け反ると、リサの足は纏れ、後ろに倒れ込んだ。

あ。

倒れ込んで気付く。あの触手はエーファだ。

はっと顔を上げると、気のせいかもしれないが、若干小さくなっ

たエーファがそこに居た。伸ばされた触手は所在なさに揺らいでいたが、少しして引っ込められる。

にゃあ。

イルマが鳴いた。

呆れているみたいだ。怒ったのかエーファの身体が小さく揺れ、今度は目に見えて縮んだ。

くすり。

その様子がおかしくて、リサは笑った。

エーファの身体は小刻みに揺れながら、徐々に縮んでいった。人の姿をしていた頃よりも小さくなり、リサよりも小さくなった。黒くうねっていた髪は白に戻り、身体の形もだんだん人の形に近づいていく。

顔も綺麗になった。左目をのぞいては。

左目の眼球はまさに宝石だった。文字通り、ごつごつとした研磨する前のアメジストがはめ込まれている。

右手の鱗もそのまま。

そして、何故かエーファは幼くなっていた。二十歳過ぎぐらいの女性だったのに、今のエーファは十二、三歳ぐらい。リサは知る由

もないが、それは初めてエーファが街に降りてきた時と同じ年頃だった。

「ありがとう」

幼い声でエーファが言った。

「ありがとう。泣いてくれて、ありがとう」

エーファは泣いてなかった。悲しい表情でもなく、むしろ何の表情も浮かんでない。石の瞳がよく似合う、無機質なお人形。

「ありがとう。お前の涙が流れるのを見たら、落ち着いた」

胸に手を当て、心臓の鼓動を確かめるよう、俯きがちにエーファは言った。

「じゃあ

イルマが鳴く。

エーファはそれに答えるよう、小さく肯く。

「分かっている。好き勝手にされた森を戻さなくてはな。ここは魔女の森なのだから」

姿が幼くなったのと反対に、エーファが纏う雰囲気はひどく神秘

がかった。神々しいというのは言い過ぎだとしても、気安く言葉をかけられる存在ではない……

「おいお前！」

と、リサが気押されている中。

「服くらい着ろ！」

ヴィリーが怒気荒く注意した。

ヴィリーに指摘されてリサも初めて気付く。エーファが素っ裸である事に。いくら胸のふくらみもほぼない体型をしているといっても、裸はまずい。女としてまずい。

自分の服を脱いで、ヴィリーは突き出す。

「これでも着てろ！」

「家の中にあるからいい」

あっさりヴィリーの申し出を断ると、特に恥じる様子もなくエーファは家の方に進む。途中でヴィリーの上着にくるまれたゲルトの頭部を持ち上げ胴体も担ぎ上げると、呆然と突っ立っているクルトを押しつけて家の中に入っていく。幼くなっても怪力は健在だ。

「お前達には面倒かけたな」

振り向かずにエーファは告げる。

「みつともない所を見せた。もう大丈夫だから、帰ると良い。もう関係無いだろう」

淡々としているエーファは落ち着き払っていて、確かに大丈夫そうだった。元々どちらかというと無愛想な感じだったし、なんて。

「ウソばかり」

「む？」

ぼつりと呟かれたリサの言葉に、エーファが僅かに振り返る。

「大丈夫って、エーちゃんウソ下手すぎ。それに関係無くなんかないよ。エーちゃんはウチのギルドの大事なナンバー2だもの。関係無くなんか、ない」

「……成る程、関係無くはない、か」

「待ておい、それならオレだって、」

「好きにしる」

最後まで聞かずに、エーファはさつさと家の中に入って行った。イルマはエーファの後に続き、リサ達を一瞥して家の中に消えた。くるんと動いた尻尾は「しょうがないわね」と言ってるみたいだ。

「お前は どうするんだ、タレ目」

脱いだ服を着直しながら、ヴィリーがクルトに問うた。

「タレ目言つな。これでもクルト・ボルツっていう立派な名前がありますから」

「はいはい、で、お前はどっち側の人間なんだタレ目」

「……」

ヴィリーの言葉に刺を感じるのはリサだけではないはずだ。

苦笑いで降参とでも言うように、両の手のひらを上に向け、クルトは答えた。

「全く、彼女には驚かされてばかりだよ。あんたもそうは思わないか？」

「……まあな」

用心深くヴィリーは同意した。横で聞いてるリサも同感だ。

初めて会った時から変な子だとは思ってはいた。化け物にはなるし、それで人の姿に戻っても何故か子供の姿になってるし、所々はおかしいし！ 兄が見たら卒倒するかもしれない。あれで頭の固い、保守的で古い人間だから。

「……ま、俺は一旦帰るよ。つーか俺は何しにここに来たんだっけ？」

「知らねえよ」

「は、そりゃあそつだよな。ま、じゃあそーゆー訳で。じゃあな」

あっさりとクルトは帰った。

「あの人、エーちゃんに用があったんじゃ？」

「知るか」

花束を持っていたような……そういえば、彼が持ってきた花束はどこに行っただろう？

「行くぞ」

「は、はい」

ヴィリーに急かされて、リサはそれ以上クルトについて考えるのを止めた。

ヴィリーに続いてエーファの家の中に入ると、大きな机の上にゲルトの遺体は安置されていた。その横でエーファは裸のままで、ゲルトの顔を覗き込んでいる。イルマはその足下に。

服を着ろ！ とまたヴィリーが言い出すかと思いきや。

「……羽織れそうな物取ってくる。頼んだぞ」

「う、うん」

奥のドアに迷いなく入って行くヴィリー。以前ここに來た事があったのだろつかと、そんな事が今気になる自分にちょっとだけ気落ちしつつ、リサはエーファの横に並

んだ。

ゲルトの首には傷を隠す為か、銀系の房が掛けられている。

エーファの髪だ。

人毛である事に気付いた瞬間に生理的嫌悪を感じるが、同時に敵さも感じた。原始の混沌とでもいうか、神秘と禍々しさが混じっている、そんな矛盾した感動と嫌悪。

うぐぐぐおおおん！！

ぎゃしゃああああ！！

突然上がる咆吼。

「きゃああー！」

悲鳴を上げ、リサは尻餅をついた。

「なに、あれなに！？」

「森の獣達だ」

エーファの答えはやはり素っ気ない。

「う、ウソエーちゃん！ あれっつてば絶対動物の鳴き声じゃないって！ もっとすごいっていうか、あれは――」

魔物。化け物。

何故か口にするのは躊躇われた。噓。エーファのことを指すように、言えなかった。

「おい、大丈夫かお前ら！？ 今の悲鳴は何だ！？」

奥からヴィリーが慌てた様子で走って来る。手には大きな白い布一枚。おそらくどこかで使われていたシーツをとりあえず引っ張って来たのだろう。それを乱暴にエーファの頭に被せながら、ヴィリーは素早く辺りの様子をうかがう。

「はい、あたし達は大丈夫です」

起き上がりながらリサが答える。その傍から、

ぐしゃあああああっあ！！

しゃっしゃっしゃああ！！

再び上がる咆吼。

「……ゲルトを家に帰さないとな」

外の様子を全く意に介さず、エーファは布を身体に巻き付けながら言った。

「で、でも外には、」

「待て、この人はあの女に殺されたんだぞ？ それを――」

「問題ない、少し待て。支度をしてくる」

リサとヴィリーの言葉にも動じる事なく、エーファは淡々と行動に移る。

奥のドアを抜け、どこかへ行く。何の支度か、これからどうするのか。後を追いつ、問い詰める気にはなれなかった。

「……くそっ」

小さく毒づくと、ヴィリーはじっとしていられないとでも言うように、ぐるぐると部屋の中を歩き回る。

だっだっだっだ。

苛立ちを含んだ足音が響く。

ちょっと怖い。

そうして、ほんの少し時間が過ぎた頃。

「待たせたな」

黒の三角帽子に、夏だというのに黒の長袖のローブ。右手には箒。魔女の格好でエーファは現れた。仮装と思われても仕方のない服装であるが、リサは知っている。エーファが魔女であることを。そして彼女はいつでも真面目で本気だ。

軽くエーファが箒を振るうと、箒の先がぼんやりと光る。その光る先でエーファはゲルトを寝かせている机の周りを一周して掃く。すると箒が掃いた後の線はうつすらと光り、エーファはその線の中に入り、手招きした。

「行くぞ。早く入れ」

これが魔法か。

リサは目を凝らして白く光る線を見つめた。

魔術ならば絶対に必要な数式や紋章、文字式の類が一切そこにはない。ただ白く光る線があるのみ。

恐る恐るリサは白く光る線の中に足を踏み入れた。光りに触れると、気のせいかもしれないが僅かに暖かい。

「……くそ」

何に対しての苛立ちか、ヴィリーはもう一度小さく毒づいて、線の中へと入った。

その瞬間。

リサの視界は真っ白な光りで覆われた。

5 (後書き)

なんだか色々描写が穴だらけですが、そろそろ終わるので、終わってから手直ししようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9136/>

森の魔女

2011年8月14日16時24分発行